金正日逸話集

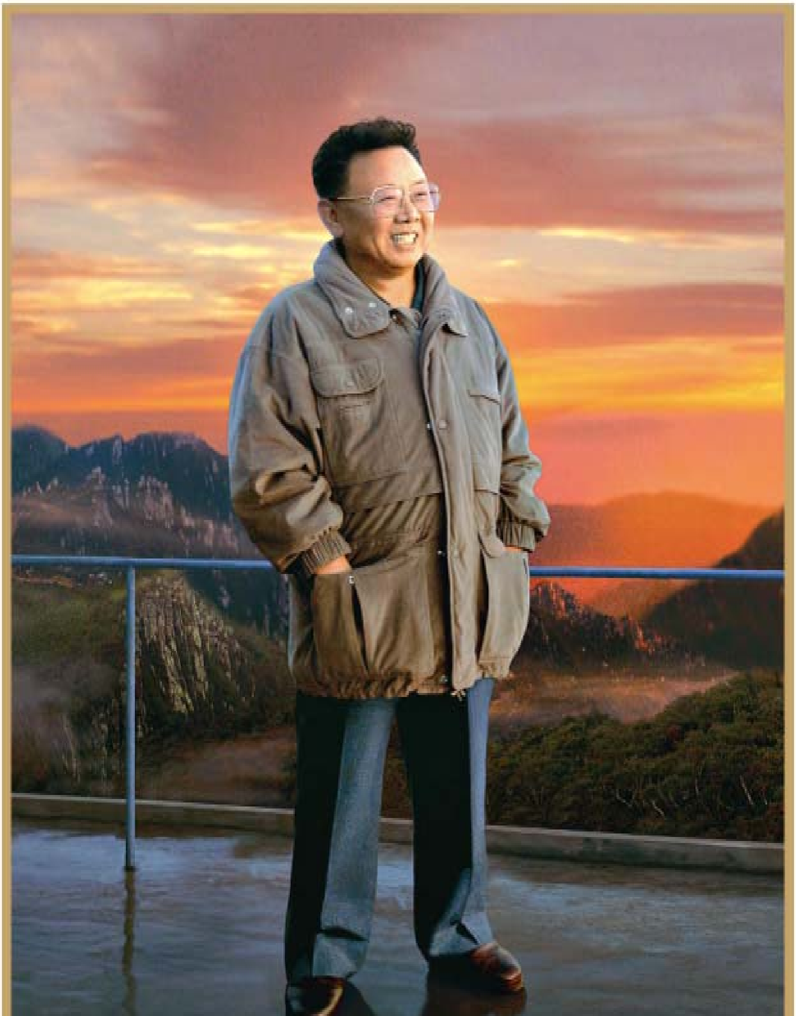
3



金正日逸話集

3

朝鮮・平壌
外国文出版社
チュチェ105(2016)





慶興商店を見て回る（1988.2）



人民の歓呼にこたえる（1995.7）



朝鮮人民軍近衛ソウル柳京守第105戦車師団を
視察する（1996.12）





三日浦特産物工場を現地指導する（2009.4）



新たに建設された万寿台通りを見て回る（2009.10）

目　　次

1　愛と信頼

豚のパルチョクの謎

朝鮮の名優兪元俊（ユ ウォンジュン）のあるポートレートの裏面には次のような文が記されている。

永遠に同じ道で　1966年1月19日を記念して　金正日

兪元俊は、金正日（キムジョンイル）総書記のこの親筆に励まされて、数十年もの間俳優生活を続け、その間かずかずの名演技を世に披露し、一生を輝かしく生きた。

次のエピソードは、彼の俳優生活の中で起きたちょっとした出来事に端を発している。

ある劇映画の撮影を前にして、撮影所で合宿し練習に打ち込んでいた兪元俊は、妻が出産したとの知らせを受けた。早速帰宅してみると、近所の婦人たちが妻の世話を焼いていた。妻と生まれた子に別条がないことを確かめた彼は、その足で撮影所に戻り、練習を続けた。

一家の主としていささか気が引けたのは、妻の乳の出がかんばしくないと聞きながらも、産婦の体力回復に効き目があるという豚のパルチョク（肢端）を求めて来て妻に与えることなく引き返

したことだった。そんなやましさが胸中にもやもやしていた彼は、休息中、同僚たちと雑談していた際、なにげなくそのことを口にした。

数日後、家に帰ると、妻がにこにこして、一体どこでそんなにたくさん豚のパルチョクを買って送ってくれたの、と言うのである。

「えっ、ぼくが豚のパルチョクを?!」

目を丸くした兪元俊は、誰がそんなに気をつかってくれたのだろうか、一言礼を述べなければと思ったが、贈り主が誰だかついに分からずじまいだった。

「いや、全くおかしなこともあるものだ」

それから30年の歳月が流れた。

ある日彼は、金正日総書記が催した宴会に招かれた。

総書記は、兪元俊さんが今回高齢のお体でずいぶんとお骨を折られましたと慰労して、杯に祝いの酒をついだ。

「将軍、一生愛をそそがれているばかりで、満足に恩返しもできませんでした。それにもかかわらず将軍はいつもこんなに……」

７0歳の峠を越した老俳優は、こみ上げる激情に喉をつまらせた。総書記はそんな彼の激情をしずめるかのように、思わぬことを言った。

「母乳が少なくて困らせたのは何番目の子でしたっけ」

兪元俊は、質問の意味が取れず、返答に窮した。まわりの人たちの視線が一斉に彼に注がれた。遠い昔のことで思いつくことができず、しばらく首をかしげていたが、やっと思い当たり、二番目に生まれた娘ですが、今はもう子持ちの母親になっています、

と答えた。
　総書記は、いや、もうそんなになるのですね、歳月の流れは本当に速いものです、わたしが、その時、少しばかりの豚のパルチョクを届けたのでしたが、それがお役に立ったようですね、と言って笑った。
　「えっ、では将軍が?!」
　兪元俊は驚いた。
　総書記は、もう遠い昔の出来事だから、打ち明けてもいいでしょう、と言った。
　兪元俊の妻が出産した日、撮影所へ出掛けて一演出家に会った総書記は、兪元俊の家庭で起きたことを知った。深夜、走る車の中で深い思いにとらわれていた総書記は、車をある郊外へ向けさせた。そこでかなりの量の豚のパルチョクを買い求めた総書記は、運転手にそれらを兪元俊の家へ届け、その際贈り主が誰であるかは絶対に口外してはならないと口止めし、自身は歩いて執務室へ向かった。
　こうして、豚のパルチョクの謎は30年ぶりに解けたのである。

烈女の骨肉

　児童団員金今順（キムクムスン）は９歳という幼い年に日本の軍警に捕らわれ、処刑された烈女である。
　この烈女のことが忘れられなかった金正日総書記は、松の落

ち葉の中から針を捜し出すかのようにして、独り生き残っていた弟の金良男（キムリャンナム）を捜し出して国家幹部に育て上げ、その生を永遠に輝かせた。

草笛を吹いていた牧童　酷寒が最後の暴威をふるっていた冬のある日、平安（ピョンアン）南道温泉（オンチョン）郡を後にして平壌（ピョンヤン）へ向かっていた乗用車の中では、金正日総書記がテープレコーダーから流れ出る音声に耳を傾けていた。

金日成（キムイルソン）主席がシナリオライターやディレクターたちを前にして行った談話であった。

「以前われわれが東満州で戦っていた頃、遊撃区に金今順という９歳の少女がいましたが、彼女がある日、母親に会うためわが家へ向かっていた途中、敵兵に捕らわれました。日本軍憲兵は今順が幼いとしてみくびり、あるいはすかし、あるいはおどしもして遊撃区の秘密を聞き出そうとしましたが、彼女は頑として口を開きませんでした。刑場へ引かれて行った際も、憲兵たちが秘密を明かせば許してやると言いましたが、彼女はその顔につばを吐きつけてののしり、壮絶な最期を遂げました」

児童団員今順の英雄的な死について回顧した主席は、その幼い烈女の身内のたとえ1人でも捜し出せればよいものをと、切々と言った。

果たして彼女に今生き残っている肉身がいるだろうか。

こう考えながら平壌に帰った総書記は、抗日武装闘争当時王隅溝一帯で戦った抗日革命闘士たちや多年間諸戦跡を踏査し革命

家の遺児たちを捜し出しもした人たちに会って、今順の家族についての消息を聞きあわせた。

切れ切れの線を一つ一つつなぎ合わせていくうちに、総書記は今順の家庭についての概略を把握することができた。

……今順の父親金沢奎（キムテッキュ）――地下革命組織のキャップ。母親崔玉鳳（チェオクポン）――遊撃区の村長。今順の弟が生まれた年に、金沢奎は正体不明の男たちに連行されて殺害された。家庭の大黒柱と頼む夫を失ったが、崔玉鳳はくじけることなく遊撃区村長の任務に励んだ。1934年春、日本軍討伐隊が王隅溝を急襲した時、彼女は２歳のわが子を隣家の老人に預け、村人たちが遠くへ避難するまで、銃を取って討伐隊と戦い、壮烈な最期を遂げた。それ以来他人の乳を飲みながら育った弟は、９歳の年に地主に雇われ、10歳にもならずに地主の牛を飼い、哀れなわが身を恨んで草笛をわびしく吹いていたという。……

いまだ彼を見たという人はなく、その名を知る人もいなかったが、総書記は、その草笛を吹いていたという牧童をなんとしても捜し出さなければと、人知れず心を砕いた。

そんなある日、朝鮮記録映画撮影所の音楽編成員金良男の生活経緯が今順の家庭資料と通ずるところがあるという報告が入った。総書記は早速、いま少し具体的に確かめるよう指示した。

その日の夜、次のような調査結果が総書記に報告された。

――金良男が語った両親の名は今順の両親の名と一致していた。幼くして地主に雇われた彼は、日中は数十頭の牛を牧草地に放牧し、夜は牛舎で睡眠を取った。そんな苦労を続けた彼は、祖

国解放の日を間近にしたある日、父方の遠い親類に出遭い、両親と姉についての話を聞いた。

祖国解放戦争（朝鮮戦争）当時、戦災孤児を引き取って教育する中等学院で学び、戦後祖国に帰った。少年時代に草笛に興じ、歌を好んでいた彼は、帰国後、平壌音楽大学（当時）に入学し、卒業後、音楽の専門家になった。……

報告を受けた総書記は、**「金良男君は児童団員今順の弟に間違いありません。彼が朝鮮記録映画撮影所にいるとも知らずに、ずいぶんと捜したものです」**とたいそう喜んだ。

「ところで……」

「ところでどうしたというのです」

報告者はちょっとためらってから、こう言うのである。

その頃、ある出版物に金良男の父親金沢奎が日本の走狗団体「民生団」に荷担していた罪で処刑されたという記事が掲載され、そのことで金良男はショックを受け悩んでいる、と。

しばらく物思いに沈んでいた総書記は、金沢奎と金良男の問題を金日成同志に報告し、結論を仰ぐことにしよう、児童団員今順の生活についてよく知っておられるのは金日成同志であり、彼女の父親を保証できる方も金日成同志だと言った。

書面報告を受けた主席は、金良男の父親金沢奎は「民生団」ではなく堅実な革命家であったと保証し、昔日の記憶を逐一よみがえらせ、児童団員今順の目は父親の目に似ている、今順と良男の目も似ている、良男は金沢奎の子に間違いない、良男をわが党の手で立派に育てるようにと言い、今順のただ一人の肉身を捜し出

したことをとても喜んだ。
　その日は、1967年10月10日であった。

　姉と弟の劇的な対面　朝鮮記録映画撮影所の音楽編成員から党中央委員会部員に抜擢されて間もないある日、金良男は金正日総書記に呼ばれた。
「やあ良男君、ようこそ。今日やっと会えましたね」
　総書記は、彼が来るのを玄関にまで出て待っていた。
「指導者同志が私をこんなに……。本当に有難うございます」
　金良男は深ぶかと頭を下げた。涙がぽたりと絨毯の上にしたたり落ちた。
「私は涙を流す牧童の恰好でなく、明るく笑う君の姿を見たくて、会う日を一日、二日と延ばして来たんだよ。さあ、顔を上げなさい」
　この言葉に、彼はしゃくり上げた。
「もっとも、どこにも思い切り泣ける所がなかったろうに、これまでの悲しみも苦しみも一切合切その涙で洗い流してしまうのだ」
　うるむ声でこう言った総書記は、彼の激情がしずまるのを待って執務室へ導き、椅子を勧めたあと、今日は君のために時間を割いたのだから、ひとつこれまでの苦労談を聞かせてもらうことにしようと言った。
　痛々しい人生行路……。彼の一言一言はそのどれもが涙を誘うものであった。

その胸深くに残るしこりをどうすればきれいさっぱり取り除くことができようか。……

数日後、再び彼を呼んだ総書記は、彼の両親がどのように革命に一命をなげうったかを詳しく話して聞かせたあと、書架に保管してあった小さな額縁を取り出して、テーブルの上に立てた。

以前ある画家に依頼して、刑場に立つ児童団員今順の姿を画いた油絵であった。

そこには、幼い今順が銃殺される直前、涙をたたえて見守る人びとに向かい、「お父さん、お母さん、どうして泣くんです。泣かないで。革命軍のおじさんたちがきっと敵をうち滅ぼします。お国が解放される日までくじけずに戦って下さい。……日帝を打倒せよ！　金日成将軍万歳！　朝鮮革命万歳！」と叫ぶ壮絶な姿が描かれてあった。

油絵に見入る良男に向かって総書記は、今順と一緒に演芸隊生活を送った抗日革命闘士たちの助言を得て、９歳の年の顔形を描かせた、姉さんの顔をしっかり憶えておくんだと言い、今順が銃殺された出来事を掲載したコミンテルンの雑誌と『救国新報』紙の記事内容を話して聞かせた。

総書記は、今順があの幼い年で英雄的な最期を遂げたのは、金日成主席の下で育ち鍛えられたからだとし、彼女が小汪清遊撃根拠地で主席に見守られながらどのように児童団演芸隊生活を行ったかを詳しく話した。

そのあと、総書記はテーブルの上の油絵を取って彼に与えた。

世に生まれて以来一度も見たことのない姉。肉身の誰か一人で

もいたらどんなに心強いだろうかと、切なく思い続けてきた良男は、改めて姉の顔に見入り、こらえ切れずに激しく嗚咽した。

総書記は、油絵による姉と弟のこの劇的な対面に、痛ましい思いを抑えきれず、長いこと窓辺にたたずんでいた。

その後、金良男は金日成主席と金正日総書記の意を体し、生を終える最後の日まで国の音楽芸術の発展に大いに尽くした。

鉄湯の中へほうり捨てたエゴ

1970年5月3日、金正日総書記は次のような思いがけない出来事についての報告を受けた。

清津（チョンジン）地区で公演を行っていた映画人たちが重火傷を負ったある労働者の生命を救うために、自分たちの皮膚を提供したという。

総書記は声を高ぶらせて、奇特なことだ、なんと立派なことだ、皮膚を提供した人は誰だれかと尋ねた。

一人一人名前が挙げられるたびに、「うん」「そうだろう」「えらいもんだ」とうなずいていた総書記は、ある女優の名を聞いてあっと思った。

「誰だって？　今誰だと言ったのかね」

報告者は、女優の名を今一度告げた。

「ほう、やっぱりね」

総書記は明るく笑った。

「うん、彼女がわが身の皮膚を提供したとは……」

この女優は私生活上少なからぬ欠点を持っていた。とりわけ彼女のエゴイズムは撮影所で知らぬ者がない程だった。

映画制作の指導を続けていた総書記は、彼女の悪癖を直してみようと、いろいろと気を使った。

ある日は彼女を呼び、真剣な面持ちでこういさめた。

金日成主席のおぼえがめでたい俳優がエゴイストだのなんのと後ろ指をさされていいものだろうか。人間の尊厳がお金のために損なわれてもよいだろうか。人々の信望を裏切り、お金や物品に心を奪われてエゴに走っていたら、生きる誇りをどう覚えることができようか。……

女優はこの忠告に涙ぐみ、そんな生き方とはきっぱり縁を切ると誓った。

しかし、彼女の悪癖は容易に直らなかった。

彼女の生活に大した変化がないと知った総書記は、一度さとして駄目なら10度、100度繰り返してでもきっとその悪癖を直さなければとして、彼女を映画人公演隊に加え、労働者たちの中で自分を鍛えさせようと思い立った。

総書記は公演隊の出発に際して彼女に会い、今度の機会にエゴイズムを溶鉱炉の鉄湯の中へほうり捨てて帰って来るのだと、ねんごろにさとした。

こうして出発した女優は、ついにエゴの悪癖を溶鉱炉の鉄湯の中へ投げ捨て、死境をさまよう労働者を救おうと、わが身の皮膚を提供する美徳を発揮したのである。

総書記はそのことがあまりにも嬉しくて奇特だ、頼もしい、誇

らしいと言ってこう続けた。

これは決して簡単なことではありません。創造と公演活動の過程が直ちに、革命化、労働者階級化の過程にならせるべきだとする党の方針が生活の中で効果を収め、実りをあげていることを意味しているのです。

総書記は彼ら俳優たちの善行を広く紹介、宣伝するようはからった。

人民が味わってみたあと

1977年6月2日、金正日総書記は、平壌市党委員会の責任幹部に電話を入れ、ある麺工場の運営問題について質問した。

その工場は、総聯（在日本朝鮮人総聯合会）が金日成主席に進呈した贈り物工場であった。

責任幹部は、本年4月15日に最初の麺を試作し、５月末に操業式を行ったとし、すぐ大量生産を開始する手筈だと報告した。

「大量生産ですか……」

こうつぶやいた総書記はちょっと考えたあと、麺に対する市民の意見を聞いてみるべきだ、麺の品評会を行って市民の意見を聞いてみることだ、と言った。

責任幹部はえっと思い、返答をためらった。総書記は、人民が食べる麺だから人民が先に試食してみるべきじゃなかろうかとして、こう続けた。

「委員長や部長たちを万景台（マンギョンデ）千席食堂のような所へ案内してさまざまの麺を５分ほどずつ煮立てて、これも試食しあれも試食してみるようにさせてから意見を聞くとよいでしょう。麺を小麦粉でも作り、トウモロコシ粉を混ぜて作って意見を聞くのです。居住人民班の班長たちも参加させて意見を聞いてみるのがよいでしょう」

こうして万景台千席食堂ではインスタント麺の品評会が行われ、当該部門の幹部や平壌市居住人民班の班長たちなど数百名が招請された。

彼らは、さまざまのインスタント麺を試食し、一様にどれもみなおいしかった、麺がしこしこして歯ごたえがある、５分間煮るだけで食べられるのだから素晴しいと評した。

品評会の結果は直ちに総書記に報告された。

総書記は、人民が判断を下したのだから、インスタント麺は合格だと言い、報告書に〝合格〟と書き入れた。

こうして、インスタント麺は大量生産を開始した。

見直された予算案

金日成主席の誕生日4月15日を迎えて、全国の園児や生徒・学生に供与される贈り物の生産がたけなわの1979年3月27日、金正日総書記はそれらの見本を見た。

デザインがとりどりの園児服や小・中・大学、専門学校生の制

服、それに靴、女性用ネッカチーフ、ボタンに至るまでことこまかに見た総書記は、満足して言った。

「金日成同志がわが国の子供や生徒・学生にめぐらされる配慮は実に大きい。確かにわが国の子供や生徒・学生はこの世で一等幸せです」

総書記は、園児や生徒・学生に衣服や靴をどのように供与する予定かと聞いた。

「製品を小売り価格で支給してはいかがかと思います」

このような案が出されたのは、前年の11月全国の園児や生徒・学生に冬服をただ同然の廉価で支給しており、今回の4月15日の贈り物製品生産にも莫大な国家資金が投入されているため、国費を節減する必要があると思ったからである。

総書記はちょっと考えてから言った。

「私の考えでは、園児や生徒・学生に衣服や靴を小売り価格で売るのはよくないと思います。園児や生徒・学生の衣服と靴を小売り価格で売れば、園児や生徒・学生が４人以上いる家庭では一度にみな購入することが困難ではなかろうかと思います」

結局、原案は見直され、全国の園児や生徒・学生に衣服と靴、学用品がすべて無料で贈られることになった。それだけ国家の財政負担は大きかったが、全国各地では、４月の祝日、一斉に新しい衣服を着た園児や生徒・学生が喜びに満ちあふれたのである。

移された敷地

咸鏡(ハムギョン)南道新興(シンフン)郡に精錬所を新設する予定で準備が進んでいた1980年9月25日、道党委員会の責任幹部は金正日総書記の電話を受けた。咸興(ハムフン)から新興までの距離がどれほどかという問いに、彼は質問の意味するところが解せぬままに答えた。

総書記はその距離を口ずさみ、慎重な口調で、新興に精錬所が建ったら咸興市への飲料水供給に影響が及ばないだろうかと尋ねた。

質問の趣意をやっと悟った責任幹部は、新興は成川(ソンチョン)江の上流に位置しているので、そこへ精錬所を建てたら川の水が有害物質に汚染され、咸興市の飲料水供給に支障を来たす恐れがある、と説明した。

総書記は、数日前精錬所を新興に建てるという意見が持ち出されたので、咸興市民の飲料水問題が気がかりで電話をしたのだが、そういうことなら精錬所の敷地をほかへ移すべきだ、ときっぱり言った。

実際、下部の実情にうとい一部の中央幹部が経済一面にのみこだわって押し付けてきた案であったために、八方手を尽くして保留を要請したのだったが、誰一人首肯してくれず、困惑している矢先だったのである。彼はほっとした。

そんな気持ちをおしはかるかのように、総書記は、どこかほかに適地はないだろうかと尋ねた。

彼は勢いづき、自分たちが別に選んでみた土地があると答えた。
総書記はたいそう満足し、あなたたちが電気と水が正常に供給され、交通にも便利な所に精錬所の敷地を定めることができると言うなら、今日中にも中央の幹部が咸興を訪れるだろうから、十分に討議して決定するようにと言って、受話器を置いた。
その後、総書記は適切な敷地が選ばれて精錬所の位置が確定したとの報告を受けて満足した。
総書記は、工場敷地の選択では原料の供給地や輸送の便などいろいろな要件を考慮しなければならないが、とりわけ重要なことは、その結果人民生活にどんな影響が及ぶかを慎重に考慮する必要があるとして、こう強調した。
「われわれは経済的にいかに大きなメリットがあるとしても、人民に有害なことは絶対に許容すべきでありません」

マホガニーの扉

1984年4月18日午前、金正日総書記は新築なった咸興大劇場を視察した。
２階の休憩室へ入ろうとした総書記は、扉の前でつと立ち止まった。随員たちは、どうしたのだろうかといぶかった。
アルミニウム製の扉に目を凝らしていた総書記は、これはどこで作ったのかと尋ね、道の工場で作ったものだが、レベルはあまり高くないという答えに、万年大計の国宝として建設する大劇場

にこんな扉を取り付けるようなことはしないで、立派な木製のものを使うといいだろうと言った。

そのあとさらに他の部屋を見て歩いていた総書記は、ニューム製の扉は大劇場にふさわしくないし、加工レベルも高くない、すべての扉を高級家具用材を使って付け直すことだ、人民のための咸興大劇場だから立派でなければならない、劇場内部の扉は外国からマホガニーのような高級木材を輸入して取り付けなければならないと言い、こんな扉が劇場内にどれ程あるのかと聞いた。

「観覧客が普通に出入りするものだけでも40ほどになります」

総書記は、それらをみなマホガニーのような高級用材を輸入して作り直すようにと言った。

マホガニーは尋常の家具用材ではなかった。熱帯地方の一部の密林でのみ成育するその木は、指折りの特殊な高級家具用材で、昔から宮殿や大富豪の邸宅の家具としてのみ使われ、とりわけ扉にされるのはごくまれだという。価格があまりにも高くて、現在、外国でもこの用材で家具、なかんずく扉を作るようなことはほとんどなされていないのである。

「指導者同志、その木はちょっと高すぎて、今すぐには買って来れそうにありません」

総書記はほほえみ、費用がどれ程かかるのかと聞き返した。価格が法外に高いので、随員は口を開くことができなかった。

総書記は微笑して、気にすることはない、値が分からないと対策が立たないではないか、と促した。

一人の随員が言いづらそうに価格を述べた。

総書記は顔色一つ変えずに言った。

「それなら十分ですか。よろしい、その金はわたしが用意しましょう」

その後、咸興大劇場の扉はすべてマホガニー製のものに取り換えられた。

勝利した「自力更生」チーム

1984年10月22日、金正日総書記は楽元（ラグウォン）機械工場（当時）を現地指導した。

総書記は、大型造機職場に一歩足を踏み入れるとまず目につく「自力更生」というスローガンを意味ありげに眺めたあと、回転式ボーリング機械部品が並べられてある場所で足を止めた。そして、自分が見たかったのはこれだと言い、部品の生産実態と性能についていちいち質問したあと、「楽元のボーリング機械がいいとか良くないとかいう評価はどうしてなされていたのですか」と尋ねた。

「幾つかの部品に欠点があったためですが、楽元の労働者たちはそれらの欠陥を基本的に改良しました」

「それはよかった。楽元にはボーリング機械の製作でも歴史的な土台があるではありませんか」

総書記は続けて、わが国ではじめて作った最初のトラクターも試運転の際、後ろ向きに動き出したものだったが、今では数千、

数万のトラクターが全国各地の協同農場を走り回っているではないか、ボーリング機械工業はわが国では楽元の人たちが切り開いたわけだが、どうして最初から欠陥がないと言えようか、しかし、それらの欠陥は玉にちりが付いているようなもので、ちりさえ取り除いてしまえば、玉は玉として輝くものだと言った。

人びとの脳裏に、その年の５月にあった出来事が思い浮かんだ。

総書記が茂山（ムサン）鉱山を現地指導した時のことで、鉱山の人たちから、楽元のボーリング機械をもってしては鉄鉱の増産は難しいとして、性能のよい外国のボーリング機械を輸入してもらえたらという意見が出された。

総書記は、回転式ボーリング機械はもとより、その他の設備も自力で作り出すべきだ、外国の物を買ってばかりいたら、底の抜けた甕（かめ）に水を汲み入れるようなことになってしまう、今後も茂山鉱山に必要な回転式ボーリング機械は楽元機械工場で生産したものを使うようにするとよい、楽元の労働者たちには高性能のボーリング機械を作るよう課題を与えよう、そうすれば彼らはきっと自分たちの手で作り出すだろう、と言った。

楽元機械工場ではその後しばらくして、回転式ボーリング機械の欠陥部品を改良し、新しいボーリング機械を作り出した。

ところが外国製ボーリング機械に幻想を抱いている茂山鉱山の人たちは、国産のボーリング機械を蔑視して採用をしぶった。

このことを知った総書記は、彼らに対して実物による比較教育を行う必要があると痛感し、茂山鉱山でボーリング試合をするようはからった。

こうして鉱山では国産と外国産の機械によるボーリング試合という異例の生産競技が行われた。

試合は最初から白熱した。

はじめのうちボーリングの実績は一進一退を繰り返したが、やがてその差が次第に開き、試合の終了日間際には勝敗が歴然となった。結局勝利したのは、楽元製のボーリング機械だったのである。……

総書記は当時の試合の結果を思い浮かべてか、部品を見渡してにっこりした。

「この前の生産競技で、楽元のボーリング機械は困り者だという評がでたらめだったと判明したそうですね」

「はい、今度の生産競技でわれわれ楽元のボーリング機械が断然勝利し、機械の生産性が以前のものに比べて４～５倍高いことも実証されました」

総書記は豪快に笑った。

どうです。結局、自力で生きようという人たちと外国に頼ろうとする人たちの戦いで、自力更生チームが断然勝利したのです。自力更生チームがね。

茂山鉱山の人たちは大きな刺激を受けたことだろうとして、楽元を信じるのです、楽元の労働者たちも信じ、彼らが作り出したボーリング機械も信じるのです、と強調した総書記は、わが党は朝鮮戦争後のあの困難な時期にも楽元の労働者を信じた、それなのに、今彼らに懸念を抱く根拠がどこにあろうか、外国製ボーリング機械の輸入計画は取り消すべきだと言い、工場幹部の肩を叩いてこう激励した。

自力更生の伝統をあくまでも輝かせていくことです。

利益金

中国マカオの天明貿易公司の女性総経理にとって、1988年2月20日はことのほか喜ばしい日であった。合弁会社の慶興(キョンフン)商店がいよいよオープンする運びになったのである。

この日、朝早くから慶興商店に出向き、各売り場に不備な点はないかと見て歩いていた彼女は、大きな幸運に恵まれた。

平壌市内の諸商店を視察していた金正日総書記が慶興商店に立ち寄ったのである。

彼女の挨拶を受けた総書記は、「**ああ、総経理先生がお出でになっておられたんですね**」と言って、慶興商店の開店を祝った。

そのあと、商店の各コーナーを巡り、商店の運営策についての具体的な説明を受けた総書記は、今後とも商店の内装をさらに充実させ、色とりどりの商品を並べて売るとよいだろうと強調し、随員たちに向かって、「**今後慶興商店がマカオ天明貿易公司との合弁で上がる利益金は平壌市民の生活の向上に振り向けようと思います**」と言った。

すでに総書記に何度か会っている総経理は、総書記の人民愛がいかに大きいかを知らぬわけではなかったが、今受けた感銘はとりわけ深かった。

総書記は、われわれが外貨を稼ぐのもみな人民生活の向上をは

かってのことだとして、話を続けた。

——慶興商店で外貨をたくさん稼げば、光復（クァンボク）通りに新設する合弁料理店をわが国のお金を受け取って運営することも考慮すべきだ。私は今に慶興商店で上がる利益金のうち50パーセントは外国から原資材を輸入して人民消費財の生産に充当し、50パーセントは光復通りに新設する合弁料理店に投資し、国内の住民がわが国のお金で料理を注文して食べられるようにするつもりだ。……

光復通りに間もなく建てられる合弁料理店は、原資材から調味料に至るまでのすべてをマカオから仕入れて中華料理を作って奉仕することになっていた。それで、料理店では売り上げを増やす目的で、客から外貨を取って運営することを予定していた。ただそうなれば、外国人や外貨を持つ数少ない住民だけが料理店を利用することになるのはもちろんである。

総書記はこのことを念頭におき、広範な朝鮮の住民に奉仕する、自国のお金を取って運営する大衆料理店にならせるべきだと語ったのである。

総経理はその言葉に一抹の不安を覚えた。

実際、マカオから仕入れる原資材の値段は高く、朝鮮の食料品の価格は安い。それに朝鮮ではすべての商品が公定価格で売買され、好き勝手に値を上げることは許されていない。そんな関係で朝鮮の金で商売をすれば利益をあげることが難しい。総経理が不安を覚えたのはもっともなことである。

総書記は言葉を続けた。

「やがて光復通りに建つ合弁料理店は、わが国のお金を取って運営することになるので、利益はほとんど期待できません。ここから利益金を得ようと考えるべきではありません」

総経理は理解に苦しんだ。

（利益をあてにしない企業……それはとりもなおさず倒産ではないか）

彼女の危惧にはおかまいなく、話は続いた。

——外貨を稼ぐとして、人民に飲食物にまで外貨を支払わせるのはよくない。昨年、平壌市民の食生活を潤わせる足しにと小麦粉を輸入して諸食堂に配分し、パンや麺類を食糧切符なしに売る措置を取ったところ、反響がとてもよかった。われわれは何事であれ人民を先に考え、人民の利益に合わせて行わなければならない。合弁料理店が利益をあげようがあげまいが、それにはお構いなく、天明貿易公司には別途に利益金を配当すればよい。……

総書記の言葉の真意を悟った総経理は、総書記のすべての思索と実践の唯一の基準は人民大衆の利益であり、そのためなら国家が損をしても利益金にこだわるべきでないとしていることに感嘆した。

総書記は、またお会いしましょう、困ったことができたら、いつでも訪ねて来るようにと言って、商店を後にした。

総書記を見送った彼女は、その大河のような人間愛に胸を打たれ、深く頭を垂れた。

誕生祝い

第13回世界青年学生祭典の準備が進んでいた1989年4月2日、準備の進行状況を聴取した金正日総書記は、外国代表たちを温かく迎え入れ、彼らの生活に不便がないようしっかり世話をすべきだと強調し、その際、人びとが思いもしていなかった問題に言及した。

「祭典期間に参加者の中には誕生日を迎える人たちもいるでしょうから、中央準備委員会はその点も考慮に入れて必要な対策を講じなければなりません」

祭典期間に誕生日を迎える外国人客がその一日を意義深くすごせるよう取りはからうべきだとした総書記は、だからと言って、一律にみな同じ形式で祝うのではなく、それぞれの国の風習とその民族が好む飲食物、とりわけ本人たち一人ひとりの性向と好みもあらかじめ確かめたうえで誠意を尽くして用意し、簡単な贈り物もし、記念撮影もしてあげ、朝鮮で誕生日を祝った思い出をいつまでも深い印象として残せるようにすることだと指摘した。

祭典の錯綜した準備には、こうして、予定していなかった一件が付け加えられた。

準備委員会が調査したところでは、100余の国から来た数万名の祭典参加者の中に、この期間誕生日を迎える人たちは、実に300余名に達した。

彼らは、自分たちの誕生日に、自国、自分の土地の風習と各人の好みに合うお祝いの膳を供せられた。

思いがけない祝膳を前にして目を見張った彼らは、そのいきさつを聞かされて、金正日総書記の恩情に深く感謝した。

ある川辺で

主人が客に　1989年5月15日、黄海(ファンヘ)北道を現地指導していた金正日総書記は、昼時、ある川辺にある揚水場の近くに至った。

郡の責任幹部は喜びを隠せなかった。総書記の郡現地指導に際して、住民の心づくしの昼食をもてなしたくてあらかじめ用意させておいたのである。

彼は、食事の準備ができているから、まっすぐ村へ下りて行きましょうと請じた。

総書記は、いや、田植えに忙殺されている村人たちに迷惑をかけるのはよくない、食事はここで取ることにしようと言った。

「えっ、こんな不便な川ばたで食事をなさるなんて……村へ下りて行きましょう」

総書記は笑って、私は一向に構いません、こんな所で取る食事はおいしいものです、今朝、平壌を発つ前にちょっと支度した物があります、多くはないが、あなたも一緒にしましょう、と勧めた。

彼は困惑した。総書記をもてなそうとした計画がはずれ、かえって自分の方が御馳走される羽目になった。結局、主人が客になってしまったのである。

青々とした芝生の上に簡素な食事が広げられた。

彼は感激もし、申し訳ない思いもして、もじもじした。

総書記はそんな彼の手を取って自身のかたわらに座らせ、あなたを請じはしたものの、大した物がなくて申し訳ないと言い、その前へ皿を移した。

揚水機の音　食事中、今日の昼食は格別にうまいと言って一同を見回した総書記は、ふと、**「おや、揚水機の音がする」**と、耳を澄ました。確かに揚水機の単調な音がかすかに響いている。

「さっき通り過ぎたあの揚水場で、新しい機械の組立てが終わり、田植えを前にした田んぼに水を入れているようです」

責任幹部の言葉に、総書記は顔を曇らせた。

「その人たちは、今までずっとあそこにいたのなら、食事はまだ取っていないでしょうに……」

彼らが昼食も取らず作業を続けているのに、自分たちだけがここで食事をしているとは申し訳ない、彼らは揚水機の運転にかかり切っているので、こちらへ呼ぶわけにはいかないだろうから、作業場へ何か少し届けようと言って、容器に食べ物を移し入れた総書記は、こんな話をした。

——私がいつだったか、洛東江（ラクトン）まで進撃して食糧を切らし、10日余りもの間かずかずの苦労を重ねながら退却をしたというある人民軍軍官（将校）に会ったことがあるが、彼にあの苦しかった日びに誰の事を一番先に考えたのかと聞くと、彼は、飯は腹一杯食うことだと言ってくれていた指揮官のことが誰よりも先に思い出されたと言った。彼の言葉通り、腹を空かした時は、真っ

先に、飯をうんと食えと言ってくれた人のことが思い出され、その次に両親のことが念頭に浮かぶ。人間は誰であれ、空腹とは妥協できない。……

総書記は、あなたが早く行って食事をさせるのです、郡の揚水工たちが食事をまだ取っていないのだから、郡党責任書記が行かなくてほかに誰が行けようか、と促した。

彼が容器を手に取って立ち上がった時、総書記は一言念を押した。

「彼らに私が贈ったなどとは言わないで下さい。私が贈ったと聞いたら、彼らは食事に手を付けることをはばかるでしょう。だから、そんなことは言わずに黙って帰って来るのです」

実に素晴しいわが人民　揚水場では２人が作業をしていた。総書記が案じたように、彼らは食事も取らずに揚水機を運転していたのである。２人は、食べ物を持って現われた郡党責任書記を見て驚いた。

「遅くなってすまない。昼食を持って来たから、早く食べるんです」

「これはこれは。責任書記同志がわざわざ昼食を持って来て下さったのだから、今日の計画は問題ありません」

油に汚れた手をさっとぬぐって床に腰を下ろし、食事をうまそうに取る２人の様子を眺めながら、責任書記はおのれを恥じた。

（自分は党の幹部であるにもかかわらず人情にうとい。いつになったら指導者同志の高潔な人間愛を体得できるだろうか）

食事を取っていた年長の揚水工が改めて彼に感謝の言葉を述

べた。彼はこらえ切れなくなってありのままに話した。

「私には感謝を受ける資格がない。それは金正日同志が親しく君たちに贈って下さった物だ」

「えっ、本当ですか。そうとも知らずに……どうして最初からそうおっしゃって下さらなかったのですか」

「指導者同志に、御健康をお祈りしているとの私たちの挨拶をきっとお伝え下さい。これらの容器は勝手ながら有難く頂戴して家宝にし、代々指導者同志に変わらぬ忠誠を尽くします」

戻って来た責任書記に、総書記は尋ねた。

「その人たちが食事を取るのを見届けてから帰って来たでしょうね」

彼は現場での一部始終を話した。総書記は感心して言った。

「揚水工たちが私が贈った食べ物を受け取り、私の健康を祈ったうえ、容器を家宝として代々伝えていくと言ったとのことですが、朝鮮人民はみな彼らのように素晴しい人民です」

しばらく深い思いのこもるまなざしを揚水場に向けていた総書記は、随員たちに向き直り、言葉を続けた。

われわれは今後とも人民のための活動にもっと力を入れなければならない。われわれにはなすべきことが山積している。人民の暮らしを豊かにし、彼らを幸せにするのが私の理想だ。人民により豊かな生活をもたらすためには、われわれ幹部が常に人民の忠僕にならなければならない。幹部たちがわが子を慈しむ母親のような気持ちで常に人民の世話を焼き、人民に一つでも多く与えようと努めるべきだ。幹部は自分が満腹している時は、人民が空

腹を覚えてはいないだろうかと考え、自分がぬくぬくと過ごしている時は、人民が寒さに震えているのではと思いを致すべきだ。そうあってこそ人民の忠僕になれるのである。……

見舞い金

1995年1月、日本を急襲した阪神大震災は総聯の同胞にも甚大な不幸をもたらした。

一朝にして骨肉や家産を失い、廃墟の中にほうり出された同胞たちであったが、彼らは日ならずして悲しみをぬぐい去り、ショックから立ち直るべく力を合わせて再生に取り組んだ。金正日総書記から送られた慰問電文が彼らの勇気を奮い起こしたのである。

彼らの意気盛んな様子を目のあたりにしてひとかたならず羨んだのは、民団系と中立系の同胞たちであった。苦しい時は一枚の紙も力を合わせて持ち上げれば軽いと言われているのに、自分たちには同情し、心の支えになってくれる偉人がいないのか、と。

ところが、そんな彼らにも救援の手が差し伸べられた。総聯の活動家を通して、総聯系同胞と全く同じく、彼らにも金正日総書記からの見舞い金が贈られたのである。その時、彼らは次のような話を聞かされた。

慰問電文を送った数日後の1月22日、関係部門の幹部たちを呼んだ総書記は、阪神大震災の状況について話し、こう続けた。

「海外に居住する総聯の活動家や同胞たちが不幸に見舞われ、悲哀に沈んでいる時に、われわれがじっとしていられましょうか。……今回地震の被害を受けた総聯の同胞たちに見舞い金を贈る対策を考えてみなければなりません」

「見舞い金ですか」

「そうです、見舞い金です」

彼らは胸を熱くした。

総書記が慰問電文を送ったことで満足し、あとは総聯が被災同胞のための助け合い運動を繰り広げればよい、と彼らは思っていた。いわんや国情が極めて苦しい現在、見舞い金を贈ることができようなどとは、誰一人考えていなかったのである。

総書記の意向にいたく感動した彼らは、それなりにいくばくかの予算案を立てた。

報告を受けた総書記は、在日同胞の不幸と苦しみを和らげることでは何を惜しもうか、たとえわれわれが粥をすすり腹を空かせるようなことがあっても、見舞い金はたっぷり贈ろう、見舞い金を総聯系同胞ばかりでなく、民団系と中立系の同胞にも過不足なく公平に分け与えるようにしようと、特別に力をこめて言った。……

見舞い金のいきさつを聞いた同胞たちは、感激の涙で頬を濡らした。それまで、理念だの所属だのと称して総聯に背を向けていた彼らであった。それに当時、朝鮮がいかに大きな経済的試練を経ていたかを知らぬわけではなかった。

ところが、単一民族、同じ血を分けたはらからであるという一

つの思いで、それまでの不信と国の苦しい経済事情もかえりみず、自分たちにも総聯系同胞と差別することなく救援の手を差し伸べてくれた金正日総書記の深い恩愛にどう感謝を述べてよいか分からぬ心情であり、血が水よりどれ程濃いかを今更のようにはっきりと悟った彼らであった。

実に、金正日総書記の限りない同胞愛は、不幸もぬぐい去り、不信と対立の冷気も払拭する春の日のような温かい愛であった。

石写真の真価

1998年4月28日、金正日総書記は、石写真製作機の開発に成功したある機関を訪れた。

総書記は、多くの人物の石写真を注意深く見て大いに満足し、コンピューターによる石写真が実に立派にできている。ただ、写真がもう少し明るいといいのだがと評し、ふと、みなさんはこの石写真術をどういうことに使うつもりかと聞いた。

「外国人たちの石写真を製作して、外貨を稼ぐつもりです」

総書記は慎重な面持ちで、再び石写真製作機と石写真に視線を移し、こう言った。

「石写真は何よりも、犠牲になったわが国の英雄や烈士の碑石に着けるべきです」

烈士たちの墓碑に石写真を着けたら遺族のみなさんが心底から喜ぶだろう、私は以前から烈士陵に愛国烈士たちの石写真をと

念じていたが、その念願が叶うことになった、共和国創建50周年に際してきっと石写真を着けよう、と総書記は二度、三度繰り返した。

その後、愛国烈士陵を訪れた総書記は、烈士たちの石写真を注意深く見て歩き、こう語った。

「今、愛国烈士陵に300余名の烈士が安置されていますが、一人当たり遺族数が平均10人だと見れば、3000人余りの忠臣を得たことになります。石写真を作って幾ばくかの外貨を稼ぐより、3000余人の忠臣を得ることの方がどんなに素晴しいことでしょう。石写真を作って外貨を100万ドル、1000万ドル稼いだとしても、党に忠実な本物の忠臣3000余名を得ることに替えられましょうか」

「夫やわが子のことを思ったら…」

2000年1月28日、金正日総書記が某ベアリング工場を視察した時のことである。

ある作業台の前で総書記は足を止めた。そこでは一人の女性組立て工が、ベアリング環にベアリング玉を慣れた手付きで入れていた。工場の幹部が彼女はうら若い頃からこれまで10数年間まじめに働いてきた革新者ですと紹介した。

うなずいた総書記は、ベアリングを組み立てる動作が実にてきぱきしていると感嘆し、いちいち数えもせずにどうしてそんなに

正確に玉を入れることができるのかねと、彼女に声をかけた。

「もうすっかり慣れていますので……」

「ひょっとして若者のことを考えた拍子に、玉を一個余計に入れんとも限らんだろうがね」

まわりで軽い笑いのさざめきが起きた。

「将軍、わたくしは……」と、組立て工は顔を真っ赤にさせた。彼女は一年前に結婚した若妻だったのである。

彼女が何を言いたかったのかを察して、総書記は微笑した。

「それなら、夫やわが子のことを思ったら、その瞬間に間違えて玉を一個余計に入れたり、入れもらしたりすることもあるだろうがね」

笑いの波がさらに大きく広がった。

そんななかでも、工場の幹部たちの心境は複雑だった。彼女には生まれて間もない乳飲み子があり、夫は遠方の地で働いている関係で、ずっと別居していたのである。にもかかわらず幹部たちは、苦しい国情の下ではそれ程のことは耐え忍ばねばと、大して気に留めていなかった。

工場の幹部が言いづらそうに、女性組立て工の家庭の事情を話した。

総書記はうなずき、だからこの女性は、作業中にも家庭のことを思わないわけがなかろう、それでもベアリング組み立てを間違えずに素早く正確に行っているのは称賛に値する、と言った。

その後総書記は、女性組立て工が心の悩みにもめげず実に闊達な働きぶりを見せていたとして、夫婦がひとところに集まって楽

しく暮らせるよう、夫を工場近くにある職場へ移す措置を構じた。

赤ちゃんの名「後悔」

九峰嶺(クボン)は慈江道(チャガン)の城干郡(ソンガン)から江界市(カンゲ)に向かう途中にある。2000年8月31日、金正日総書記は九峰嶺の女性道路管理員とその家族小隊員たちに会った。

小隊員たちは、あまりの幸せに涙を流したり笑いさざめいたりし、父親の前ででもあるかのように詩を吟じ、歌を歌った。

総書記は楽しげに、どの合唱団よりも優れているとたたえ、こう続けた。

家族小隊員が10名だそうだが、こんな辺鄙な山里で一生を送るのは決して生易しいことではない。自分自身のことより国のことを先に考えるみなさんのような愛国者が多いために、わが党が強く、わが民族が栄えるのだ。みなさんの内面世界は実に高尚で美しい。こうして一家が揃って祖国と人民のために働くのはなんと素晴しいことだろう。今後とも代を継いでこの峠道の持ち場をしっかり守るのだ。……

「よく分かりました。でも将軍、こんな険しい道はもう二度とお歩きにならないで下さい。わたくしたち一同の心からのお願いです。」

母親の言葉だった。

……有難う。でもこんな立派な道路なら私は全国のどこへでも

行きます。道路がすっかり気に入りました。みなさんの愛国行為を高く評価します。

母親は総書記の手を取り、目に涙をたたえて言った。

「将軍、将軍は『苦難の行軍』、強行軍の先頭にお立ちになり、お骨折りがひとかたならぬでしょうに、今後お食事を欠かさずなさり、睡眠も十分にお取りになって下さい」

総書記は礼を述べ、朝鮮人民が安らかに暮らせるようになったら私も心置きなく眠り、食事も十分にいたします、祖国と人民のためにわれわれみんながもっと多く働きましょう、と答えた。

総書記は、九峰嶺の家族小隊員たちと並んで記念撮影をすることにした。

カメラマンが位置を変えながら焦点を合わせ、シャッターを切ろうとした時、思いがけないことが起きた。

総書記のかたわらに並んで立った母親の３女が、胸に抱いていたわが子の顔に目をやり、しきりに揺さぶり出したのである。

レンズから目を離して見ると、赤子がすやすやと眠って目ざめないので、あわてて揺り起こそうとしたのであった。カメラマンは、総書記のすぐそばにいる赤ん坊が目ざめてにっこりした瞬間にシャッターを切ったら優れた写真が出来上がるだろうと思い、早く起こすようにと目くばせした。

けれども赤子は、深い眠りに落ち、顔を仰向けたまま一向に目ざめようとしない。泣き出しそうな表情で若い母親は、わが子の頬をつねってもみたが、赤子は手を一度振っただけでそのまま眠り続けている。

微笑を浮かべてそんな有様を見ていた総書記は、せっかく眠っている赤ちゃんを起こさないようにと制して、こう言った。

「今に大きくなって記念写真を見たら、眠っていたことをひどく後悔するでしょうよ」

みんな大笑いした。そのせつな、「カチッ」というシャッター音がした。

こうして一風変わった記念写真が生まれることになった。

この時以来、人びとは赤子の名を「後悔（フヘ）」と呼ぶようになった。

「値段を上げなくちゃ」

2001年5月23日、金正日総書記は遠い夜道を車を走らせ、明け方、咸鏡（ハムギョン）南道新興（シンフン）地区革命戦跡に到着した。ひきつづき赴戦嶺（ブジョンリョン）山脈の険しい嶺々を越えて、白亦（ペクヨク）山から玉蓮（オクリョン）山、高大（コデ）山などの革命戦跡を巡り、革命事績事業を現地指導した。

玉蓮山蜜営で、神秘な石の川対岸の茂みに立つスローガンを記した樹木を見て回り、再び吊り木橋を渡って来ていた総書記は道の幹部に、ここから赴戦邑までは何キロほどかと聞いた。

「14キロ程です」

総書記は、では講師（解説員）たちはこの密営まで毎日出勤するのかと尋ねた。

「自宅から出勤せず、ここで寄宿舎生活をしています」

「じゃ、ずっとここで寝起きしていると言うのですか」

総書記の顔色が曇った。

「将軍、ご心配にならないで下さい。私たちは1年12カ月ここで生活しながら、将軍がお越しになる日を今か今かと待っていたのです」

こう言う若い女性講師のけなげな気持ちをおしはかった総書記は、彼女をかえりみて、つぶやくように言った。

「この娘さんたちは、こんな山の中にずっとこもっていたなら、お嫁に行くのも容易じゃなかろうに」

総書記は講師に、年に家へは何回ぐらい帰るのかと尋ねた。

「ひと月に一度程です」

「ひと月に一度程帰れば、若者たちと付き合う機会はないだろうな」

総書記はちょっと考えてから言った。

「町へ帰って若者たちと付き合っていたら、結婚もしやすいだろうに、ずっとここで生活していては、戦跡踏査に来る若者と交際するしかない……」

この言葉にみんな顔をほころばせた。

総書記は、辺鄙な山奥でわが党の革命伝統を固守し輝かせている若い女性講師たちの労をねぎらい、結婚問題をはじめ彼女たちの活動と生活に十分な関心を向けるよう強調した。

総書記が玉蓮山の講師たちに会って話したことが広く知れ渡ると、多くの若者が女性講師たちの家を訪れはじめ、父や母たちはその応接にいとまがない程だった。

婚期を逸するのではと心配していた父や母たちはすっかり安

心した。
（将軍がわが子の価値を高めて下さったのだから、娘の値段を上げなくちゃ）

生易しいことではない

2001年8月26日、金正日総書記は江原（カンウォン）道の龍（リョン）浦（ボ）革命事績地を訪れた。

50年前の４月、当地で人民軍将兵を祖国解放戦争（朝鮮戦争）の勝利へと力強く励ました金日成主席の現地指導事績を生き生きと語る女性講師（解説員）の話を興味深く聞いた総書記は、彼女の生活に関心を向けた。

今何歳か、どの大学を出たのか、家庭の暮らしはどうか。……

彼女は今年40歳であるが、元山（ウォンサン）教員大学に学び、卒業後江原道革命事績館の講師をしばらく勤め、結婚前に深い山奥の龍浦革命事績地を志願して当地へ移って来た。夫は1211高地で軍隊生活を送り、除隊後龍浦協同農場で働いている。今、２人の子があるが、「苦難の行軍」、強行軍時に14人のみなしごを引き取って立派に育て、何人もの子を人民軍に送り、社会生活をさせている者もいる。……

本人と当地幹部から以上のような話を聞いた総書記は、情愛のこもるまなざしを講師に向け、微笑して言った。

――今日、あなたは優れた解説講義をしてくれ、たいへん御苦

労だった。講義は、真実がこもり、素朴ながらも立派なものだった。娘の時から20年間、龍浦革命事績地の講師を勤めたというが、決して短い年月ではない。あなたが「苦難の行軍」の時期に両親を亡くしたみなしごを14人も引き取って育て、人民軍へも送り、事績地の管理員にもならせたのは、なんとも殊勝なことだ。……

総書記は女性講師の手を取ってかたわらに立たせた。

「講義を上手にした記念に、事績建物を背景にして一緒に写真を撮りましょう」

それからひと月程経ったある日、総書記は龍浦革命事績地女性講師のことに触れ、革命事績地の講師を務めながらもそんなに大勢の子供たちを引き取って育てたとは、とても生易しいことではありません、なんとも感心な行いです、革命的軍人精神が身についた優れた女性です、龍浦革命事績地を視察した際、彼女の行いが奇特で、写真を一緒に撮ろうと言うと、彼女は他の講師たちも一緒に撮るようにしてほしいと言うのでした、記念撮影でも自分一人だけを考えるのでなく、他の人たちのことを考える殊勝な女性です、と語った。

子供たちに人気のあるダチョウ

2001年12月20日、新設なった江界(カンゲ)ニワトリもつ料理店を視察して外へ出た金正日総書記は、歩みを止めて目の前の青年公園を見渡した。

「将軍、将軍が数カ月前に贈って下さったダチョウがこの公園で飼われています」
慈江道党責任幹部の言葉に、総書記は顔をほころばせて、市民が喜んでいるかと尋ねた。
「はい、みんなどんなに喜んでいるか分かりません。とりわけ子どもたちが大喜びしています」
「子どもたちが？」
「そうです。将軍が贈って下さったダチョウを見ようと、周辺の郡から何里もの道を歩いてやって来る子たちもいるとのことです。なかには、夜、鳥舎で眠っているダチョウをわざわざ起こして跳び回らせている子もいるそうです」
「ふむ、子供たちが大喜びしているなら、私もうれしい」
「それにダチョウの方も子供たちを歓迎しているようです」
「ダチョウが子どもたちを歓迎していると言うのですか」
「はい、子供たちがわあっと叫んでこちらへ走ると、ダチョウもその後を追い、あちらへ走ると、またそちらへ走るそうです。そんなわけで、ダチョウがちっとも休めないと言って、管理員たちが手を上げています」
総書記は、喜びはしゃぐ子供たちの様子を描き見ているかのように大きく笑い、ダチョウを江界市に贈ってよかった、子供たちがそんなにまで喜ぶとは思いもしなかった、ただ、山間の子供たちにとっては珍しい動物を見せて上げようとの単純な思いでダチョウを贈るようはからったのだが、子供たちがそんなにも喜んでいると言うなら、今夜は眠れなくても疲れを覚えないだろう、

と言った。

子供たちのためなら何物をも惜しまない総書記だけが覚えるであろう、格別な喜びであり、幸せであった。

戦傷栄誉軍人を花の座布団に

2003年の太陽節（金日成主席の誕生日、4月15日）に咸興（ハムフン）栄誉軍人樹脂日用品工場を訪れた金正日総書記は、**「今日は民族最大の祝日太陽節ですが、栄誉軍人のみなさんにお会いしたくて訪ねて参りました」**と挨拶し、工場内を見て歩いた。総書記は合成職場で工場の動力は何をもって充当しているのかと聞き、無煙炭ボイラーの能力を確かめた。そして、いくら考えても、この工場の動力に無煙炭ボイラーを用いるのは面白くない、戦傷栄誉軍人たちが無煙炭ボイラーの前で働くのは健康によくないし、骨も折れるとして、こう言った。

「この工場は栄誉軍人たちが働く工場だから、無煙炭ボイラーを電気式重油加熱機と取り替え、栄誉軍人たちがより文化的な環境の中で働けるようにしなければなりません」

ところで、戦傷栄誉軍人や工場の幹部たちは無煙炭ボイラーを使用してはいても、さして不便な思いをしていなかった。ボイラー設備も悪くなく、まして蒸気の生産にそれなりの労力が投入されるのは当然のことだとして気にもしていなかったのである。問題があるとすれば、石炭の供給が適時になされない場合に、生産

がある程度支障を受けるというぐらいのことにすぎなかった。
　ところが総書記は、生産そのものよりも戦傷栄誉軍人たちの健康や不便を先に考えたのである。後日、総書記は、電気式重油加熱機ではない、設置が一段と容易で、扱い易い電気ボイラーを置くようはからった。
　その日の夕方、工場から戻った総書記は、かなり遅くなってから夕食のテーブルに着いたが、すぐには箸を取ろうとしなかった。先程栄誉軍人工場を視察した時のことがしきりに思い出されたのである。
　総書記は、工場をあとにしてから、自分のために戦傷栄誉軍人たちが祝日に休息も取れなかった、なんとも申し訳ない、彼らが今からでも祝日を楽しくすごせるように牛肉と鶏肉を贈ってあげようと言った。こうして直ちに肉類の供与対策が取られたのであった。
　（それなのに、また何を気にされて箸をお取りにならないのだろうか）
　こう考えた随員の脳裏に、工場で腕が一本ない戦傷栄誉軍人の作業を顔を曇らせて眺めていた総書記の姿が思い浮かんだ。
　総書記は低い声で、本当に胸が痛む、彼らをみんな花の座布団に座らせるべきなのに……何かをもっと贈ってあげよう、その明細を作ろう、と誰にともなく言った。そして、カラーテレビ、肌着、食器一式その他の品名を一つ一つ挙げ、ほかに何をもっと付け加えたらよかろうかと、まわりの人たちに尋ねた。
　一幹部が、綿入れがあるにはあるがもう気候も暖かいので、ど

うしたものでしょうかと言った。

総書記は、いやそうじゃない、われわれにはもう必要ないが、栄誉軍人たちはまだうすら寒い思いをしているはずだ、それに綿入れは来年の冬にも着ることができる、として綿入れ名を書き入れ、それでも気が置けず、明細を４度も書き直した。

こうして翌日、戦傷栄誉軍人たちは前日に続いて、金正日総書記からの贈り物をまた頂いた。

聞き入れられた希望

2003年7月3日、金正日総書記は、将子（チャンジャ）江畔の発電所建設現場を訪れて建設の進行状況を聴取し、江界（カンゲ）市に今一つのしゃれた発電所が立ち上がりつつあるとして、たいそう満足した。

「発電所の建設現場を見て回りましたが、工事がずいぶん進捗しています。施工もたいへん質的に立派に行われています。青年突撃隊員をはじめ発電所建設者たちの尽力は実に見上げたものです」

全景図を前にして、慈江（チャガン）道党の一幹部が、既に竣工した発電所、建設中の発電所、建設予定の発電所の名を挙げながら詳しく説明するのをいちいち確認しながら聞いた総書記は、興州（フンジュ）青年発電所の下方に段階をなして建設する発電所の名称は号数を付して呼ぶのがよい、義真（イジン）発電所だの下南（ハナム）発電所だのと一つひとつ名称を付けると複雑になる、興州１号発電所、興州２号発電所などと発

電所の建設順に号数を付けて呼ぶとよいだろうと言った。

　興州１号発電所、興州２号発電所……。

　人びとは思い思いに口ずさんで喜んだ。確かに呼び易く、覚え易くもあった。

　そんな時、慈江道青年同盟の一幹部が１歩進み出て、こうお願いした。

「将軍、将軍は以前、興州発電所の名称を興州青年発電所と変えて下さいました。義真発電所も青年発電所と呼ぶようにしていただけませんでしょうか」

　彼のちょっと甘えるような言いぶりに、総書記は、君は「青年」という呼称が無くされるのではと恐れてそう言ったのだろう、と愉快そうに笑った。まわりの人たちも笑った。

　総書記は青年幹部の意気組みに心を動かされたかのように、希望を快諾した。

「興州青年発電所が先に建設されたのだから、この義真発電所が竣工すれば、興州青年２号発電所と呼ぶとよいでしょう。興州青年発電所は『苦難の行軍』、強行軍の時期に道内の青年たちが立ち上げましたが、この発電所も青年たちが建設しているのだから、発電所を青年という語を入れて呼ぶといいでしょう」

「どんなにいいことか分かりません」

　2007年5月30日、金正日総書記は江界(カンゲ)ぶどう酒工場を視察した。

総書記を坑道式酒貯蔵庫に案内した工場幹部は、ここには1958年から作られたさまざまの酒が貯蔵されていると報告した。

総書記は、1958年は金日成同志が江界ぶどう酒工場をはじめて訪れた年だ、あの日、金日成同志のお伴をしてこの工場へ来た時のことが思い出される、あれから早くも50年近い歳月が流れている、50年の歴史を持つ酒が多いとのことだが、貯蔵、管理に手落ちがないようにと強調し、なにげなくこう言った。

以前、江界には美人の多いことで知られ、キーセンもかなりいたという。今は道党責任書記と称しているが、当時は道知事と言っていた。道知事がキーセンにおぼれ、そのとりこになったものだというが、責任書記はこの宝の蔵、あれらの酒樽におぼれて、慈江（チャガン）道を離れられないのではありませんか。……

みんなくすくす笑った。

工場幹部がすかさず、道党責任書記同志はお酒を飲めませんと口添えした。

総書記は、もちろん分かっている、分かっているともと言い、からからと笑った。

ひきつづき工場の生産工程を見て歩く総書記に、工場幹部は説明した。

「将軍、工場は毎年、重要な祝祭日ごとに数百トンの酒を生産して、道内の機械工場労働者や江界市民に計画的に供給しています。それでみんなどんなに喜んでいるか分かりません」

道党責任幹部が、労働者たちはお酒や鶏肉、鶏卵の供給を受けては、将軍の恩恵にこたえようとの決意を新たにしています、と

付言した。

総書記はほほえんだ。

「機械工場労働者のためなら何を惜しむことがありません。私は彼らに、なんであれ一つでももっと与えられないのがもどかしいのです。江界ぶどう酒工場の労働者たちが上質のぶどう酒を大量生産して、各機械工場に常時供給しているのはどんなにいいことか分かりません。私はこのことをたいそう満足に思います」

総書記は新設した各工程の設備も道自体の力で作ったと聞いて、こう語った。

——自力で近代的な設備を整え、酒の生産を増やしているとはなんと素晴しいことだろうか。大衆あげての技術革新運動を強力に展開して設備を更新し、自らの原料源に依拠する生産システムを立てたのだから、経営上の実利が確保されている。経験は、科学技術は即ち生産だということを示している。……

社会主義を擁護する僧侶

2008年5月24日、金正日総書記は、空高くそそり立ち、常に白雲が棚引いているとして名づけられた白雲（ペクウン）山の中腹にある龍興（リョンフン）寺を訪れた。

「龍興寺に昔の事物が変わりなく保存されていると聞いてお尋ねしました」

こう住持に挨拶した総書記は、龍興寺はわが祖先たちの高い建

築術と抜きん出た芸術的才能を誇示する歴史文化遺物だ、去る祖国解放戦争で龍興寺が破壊を免れたのは、敵の敗残兵やスパイらがこのあたりに大勢ひそんでいたために敵機が爆撃しなかったからであろうとし、劇映画『忘れえぬ人』の主人公のモデル金徳根（キムドククン）英雄は、ここ白雲山一帯で戦ったと回顧した。

総書記は、龍興寺の内外を見て歩き、寺の遺物はどれも昔から伝わる真品だとして、格別の関心を払った。

・大雄殿の４本の柱に付いている柱聯がみな原版なら結構なことだ。

・釈迦牟尼像が真品だというが、木製の仏像に塗装を施してあるのは見事だ。当時の人たちは大した腕の持ち主だ。

・猿の姿をした神的な動物も真品だし、仏画も原画だというなら、よくぞ立派に保存されてきた。

・壁体の上隅にある組物に施された丹精が元のままだというなら、立派なものだ。

・大雄殿に扁額がかかっているが、真品だとしたら結構なことだ。

・湯ぶねと餅搗き臼も柳の巨木をくり抜いて作った物だが、真品なら結構なことだ。……

総書記が寺の遺物がすべて真品だと知って満足するのを見て、住持は得意になり、扁額の「咸興府白雲山成仏寺香炉全重坤扁額記」に細かい字でぎっしり記されている文のあらましを話した。

……昔、何かの原因で大雄殿が全焼したが、某高官が13歳の少年大工に申し付けて、49日間で再建した。ところで竣工を前にして住持以下寺の僧たちが、年端のいかぬ大工に支払う報酬が惜し

くて、少年を追い返し、自分たちの手で最後の仕上げをしようとした。しかるに工事が思いのほか難渋し、どうにもできなくなったので、少年大工を呼び戻して謝罪し、建築を続けてもらった。ところで、４本の柱のうちの１本にはくさびが入れられぬまま仕上げたため、今も屋根が傾いたままである。……

総書記は話を聞き終わってからも、なんとも言わなかった。

住持は、大雄殿と向かい合っている雲霞楼後壁の柱に付けられたカニの彫刻を指して話を続けた。

「あのカニの彫刻は他の寺院には見られない物です。カニは捕らえて背を石で押さえつけておくと、死ぬまでそのまま踏んばり続けるさががあるということで、雲霞楼を永遠に支えているようにという意味で、あのように柱に付けておいたのだろうと考えられます」

総書記は笑って、もっともらしい話だとうなずき、こう言った。

昔の出来事を解釈する時は、推測によることがかなりあるだろう。現在では、歴史遺跡や遺物を掘り起こし考証するにしても、当時に生きていた人はもちろんいないし、資料も別にないから、大抵は推測するしかないだろう。そんな場合は昔から言い伝えられてきた伝説を手がかりにするほかない。……

総書記はさっき見た大雄殿を振り返り、少年大工が立てたというこの建物が一方に傾いているとのことだったが、どちら側かねと尋ねた。

住持は、おやっと思った。

さっき大雄殿の前で扁額に記載された話をした際はなんの反

応も見られなかったので、つまらぬ説明をしたのではと思ったのだったが、実は注意深く聞いておられたのである。

「傾いているのは、大雄殿のあの後ろ側です」

総書記はわざわざそこまで行って傾いている柱に目を凝らし、くだんの少年大工の作品が、元のままの物だと確かめてほほえんだ。

「歴史文化遺跡は国の貴重な文化財です。ですから朝鮮人民の英知と才能がこもる歴史文化遺跡を手落ちなく保存・管理し、それらを通した教育に力を入れなければなりません。われわれは優れた民族文化遺産を立派に生かすことに一層の力を入れ、人民の間で朝鮮民族としての誇りと自負をさらに高めなければなりません」

こう強調して龍興寺をあとにした総書記は、新しく開発された白雲山遊園地に向かった。

ゴヨウマツは言うに及ばず、アカマツさえ曲がらずに一様に高々とまっすぐ伸びている山の風致に目を向けながら、白雲山名勝の樹林は実に素晴しい、どの木もみな高くまっすぐに伸びているとは見事だと感嘆した総書記は、やがて山林の中に瀟洒に立っているあずまやの前で車を降りた。

「将軍、ここはあずまや舞踊場です」

郡党の女性幹部の言葉に、あずまやがなかなかしゃれている、この不利な地形を巧みに生かし、実に素晴しく建設したものだとたたえ、舞踊場に置かれたテレビの画面を見ては、ここにも電気が入っているんですねと、たいそう満足した。

郡機関所在地から16キロも離れている白雲山遊園地の休養閣に

まで電気が引かれ、休養客たちが文化・情操生活を存分に楽しめるようはかられているのである。それも経済事情が格別に困難であった時期に。……

総書記は、龍興寺でもテレビを見るのかと尋ねた。

「将軍、私の注意が行き届かず、龍興寺にはまだ電気が引かれておりません。蓄電池を利用してでもすぐにもテレビが見られるように致します」

郡党責任幹部の言葉に、総書記は、自分が「アリラン」テレビを贈ってあげようとして、こう言った。

「龍興寺の僧侶もテレビを見られるようにして、社会主義を擁護する僧侶にならせるべきで、社会主義を希釈する僧侶にならせてはいけません」

平壌の娘

2008年7月9日、平安(ピョンアン)北道泰川(テチョン)郡銀興(ウンフン)協同農場を視察し、土地の整理が終わったハンドゥレ原の農耕状況の説明を受けた金正日総書記は、平壌(ピョンヤン)から自らすすんで当地に移住し、農場員となって働いているある娘のことを知った。

８年前、寒中の厳しい寒さの中ハンドゥレ原の耕地整理建設現場を訪れた総書記の現地指導ニュースにいたく心を動かされ、当農場で働こうと思い立ったという平壌の娘。首都平壌から農村へ移住した本人の決断もさることながら、わが子の決心をたたえて

快く農村へ送り出した父親のような人も、そうざらにはいないであろう。

　総書記は、その間、不慣れな農作業に習熟すべく懸命に励んだ労をいたわるかのように、日焼けした彼女の顔や荒れた手を見やりながら、首都平壌に暮らしていながらも、私がハンドゥレ原を現地指導したことに心を動かされて、当農場を志願したとはなんとも殊勝なことだ、とたたえた。

　この時、一幹部が口添えした。

「将軍、この農場員は当農場の生産向上に尽くしている模範農場員であるばかりか、先軍時代のアジテーターとしても分組で大きな役割を果たしています」

　総書記はほほえんで、外国の青年は首都の市民権を得られずにやきもきしているというのに、わが国の青年は慣れ親しんだ首都平壌をいさぎよく後にして、田地や炭田へ、開発地へと志願している、これこそ党と革命にあくまで忠実なわが青年たちの真の姿だ、としてこう言った。

「1960年代には李信子（リ シンジャ）さんが全国に知られた模範アジテーターでしたが、厳正実（オムジョンシル）さんも、李信子さんに負けず立派に働かなければなりません」

　総書記は農場を後にする際、彼女を呼び寄せて今一度強調した。

　ご両親が、米づくりに全力を尽くし党にとことん忠実であれとして、銀興協同農場を志願した厳正実さんを積極的に支持して送り出したそうだが、実に見上げた父母だ。今日、私があなたに言ったことを、手紙に書いてご両親に送るのだ。……

こうして、ハンドゥレ原から平壌へ１通の手紙が届けられ、その後平壌の娘は全国に先軍時代の模範アジテーターとして広く知られるようになった。

優れた人格の持ち主

2009年2月28日、慈江（チャガン）道満浦（マンポ）紡糸工場を訪れ、生産現場と労働者寮を視察した金正日総書記の喜びは大きかった。

「苦難の行軍」、強行軍のあの困難を極めていた時期に、自力で立派に一新させた工場の内外や清潔な作業場、ぴかぴかに磨きのかかった機械、その前で作業に余念のない紡糸工たち……。

紡糸工たちの中には父母のいない孤児たちがかなりおり、彼女たちは工場に引き取られていずれもみな技能工に成長し、工場計画遂行の一翼を担っていた。工場では羊毛糸生産の副産物をもって羊毛布団を作り、娘や若者たちが結婚をする際、廉価で売ってあげているともいう。

総書記は、全国的にこれ程充実した工場を見出すことは難しい、今この場で3重3大革命赤旗獲得の判定を受けても間違いなく合格するだろう、と言って豪快に笑った。

ところで、総書記がとりわけ大きな満足を覚えたのは、工場の生産実績が高く、生産文化が確立していることのためばかりではなかった。それは、人知れず人民のために献身している今一人の優秀な幹部を見出したからであった。

その人は、23名ものみなしごを引き取り、血を分けたわが子のように慈しみ育て、押し立てている女性支配人であった。

すべてが不足していたあの苦しかった時期に、女性の身で支配人の大役を果たすのも容易でなかろうに、父母のいない子供たちを引き取り、骨肉の情で面倒を見てきたのだから、どれ程気苦労が多く、骨が折れたことだろうか。

総書記は、工場の視察中、涙ぐんで挨拶する紡糸工たちが、支配人に養育された当の本人たちであったと知った。

この娘たちが結婚する際に贈ろうと、寮に別に取っておいた台所用品や布団などを見、部屋の壁に掛かっている、支配人が子供たちの勉強を見てあげている写真を眺めて、総書記は多くのことを考えさせられた。

総書記は、今日この工場へ来て支配人の善行を知り、とてもうれしい、支配人の素行はまことに奇特な愛国的行為である、工場支配人は一人や二人でもない数十名もの孤児を引き取って養育したというが、このようなことは誰にでもできることではない、よほどの覚悟をしないではできるものでない、支配人は正真正銘の愛国者だと言える、支配人は自分自身よりも先に社会と集団、党と革命を考え、そのためにすべてを捧げる気高い道徳観、革命的信義を身につけた、優れた人格の持ち主だ、支配人は高潔な人間愛を備え持ち、祖国の未来のためにおのれをそっくり捧げたわれわれの時代の花だ、としてこう続けた。

「先軍時代は、支配人のような人間の大集団を創造する偉勲の時代です」

総書記は「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という集団主義の原則を体質化した千万軍民の威力は必勝不敗であり、この不敗の統一団結がある限り、われわれには恐れるものがない、と力をこめて語り、明るく笑った。

有り難いこと

2009年12月9日、慈江(チャガン)道江界(カンゲ)メリヤス工場を訪れた金正日総書記は、各作業場を見て歩いたあと、生活室へ案内された。

道責任幹部がこう説明した。

「当工場の人たちが孤児44名を引き取って育てている生活室です」

「44名もですか」

驚いて聞き返した総書記を、女性支配人が給食用品倉庫へ案内した。そこには各種の硬質ガラス容器や飲食品材、副食物などが豊富に積まれてあった。総書記は、大したものだ、私も気分がよいと言って喜んだ。随員たちもみな満ち足りた思いで、それらに見入った。彼らは浮き浮きとして総書記の後に従い、調理室へ入った。

そこには、寮生たちの昼食用インゲン飯が用意されてあった。

湯気が上がるインゲン飯を見て総書記は、なかなかおいしそうだ、昼食時なのでそうなのか、ちょっと食べたいものだと、楽しげに言い、以前金日成同志が慈江道を現地指導された際、イン

ゲンは栄養価が高く、味もよいから大いに栽培するようにとおっしゃられた、と感慨深く回顧した。

食事室の壁に掲げられてある誕生日一覧表に目を止めた総書記は、いいことをしている、労働者たちに誕生祝いをしてあげたらみな喜ぶことだろうとたたえ、週間メニューを見ては、水曜日にインゲン飯を出すことになっているが、今日がその水曜日だからメニュー通りインゲン飯を用意したわけだと言って喜んだ。

支配人が言った。

「将軍、今日、寮生の一人が誕生日を迎えました。将軍がお越しになった日に誕生日を迎えたのですから、それこそ大きな福を援かったわけです」

「ああそうですか。そう聞いて私もうれしい」

喜びにひたりながら寮室へ足を踏み入れた総書記は、衣紋掛けにずらりと並んだ娘たちのチマ・チョゴリを見て、チマ・チョゴリは目を楽しませてくれる、そこにアイロンがあるのを見ると、この部屋でアイロン掛けもしているようだ、と言った。そして、壁際に重ねられた布団や毛布を見ては、それらがビニール布で包装され、それぞれに職場名と姓名の表記が付いていることに注意を向け、満浦（マンポ）紡糸工場のそれと同様、父母のいない寮生たちがお嫁に行く時に贈ろうとして用意したのだろうと言った。

「はい、両親のいない孤児たちが嫁入りする時、親のいないことでわびしい思いをすることのないようにし、ひいてはわが国の制度がいかに優れているかを認識させようとして、工場の幹部たちが用意した物です」

「当工場の支配人はなかなか立派です。

……工場の幹部たちが、すべてが不足し、困難な時に、両親を亡くした子供たちを大勢引き取り、骨肉の情をもって世話をし、立派な労働革新者に育て上げたとは、まことに見上げたものです」

総書記はこう言って支配人を指さし、この同志は革命家です、立派です、愛国者です、ここ江界にも満浦の朱福順（チュポクスン）さんのような愛国者がいる、映画にたとえたら、満浦紡糸工場の朱福順さんは第一部の主人公であり、江界メリヤス工場の康成華（カンソンファ）さんは第２部の主人公ですとたたえた。

「将軍、私はただ、将軍のご心労を少しでもお和らげしたくて…」

喉をつまらせる女性支配人を頼もしげに見やった総書記は、支配人の故郷がここ慈江道だそうだが、慈江道の女性は気立がやさしく、しかも勝ち気だから人一倍よく働き、優れた行いも多いと、恩情をこめて言った。

しゃれた工場

2010年7月29日、金正日総書記は慈江道（チャガン）のある工場を久しぶりに現地指導した。

水平水圧プレスの前で、工場幹部が、将軍が７年前にお見えになった際にご覧になったプレスです、あの時は手動のものでした

が、今はＣＮＣ化されています、ＣＮＣ化がなったお陰で、労働者たちは骨の折れる労働から解放され、操作ボタンを押すだけで製品が出て来るうえ、生産性も２・５倍に上がりました、と誇らしげに報告した。

「現在、プレスは稼動しているのですか」

総書記の質問に幹部はうなずき、道党責任幹部も、この工場は全くの自力でＣＮＣ化を完成したと付言した。

総書記は満足して歩みを移した。

多くの旧式の設備を改造し、操作盤まで取り付けてあるので、どのプレスもスマートそのものである。

「うむ、素晴しい」

さかんに嘆声を洩らしながら機械を見て歩いていた総書記は、圧延機の前で立ち止まった。

これもやはりＣＮＣ化されており、コンピューターの操作で圧延製品の厚さを思いのままに調節できるようになっている。

「しゃれた工場になったものだ」

こう呟いて、総合操作室に足を踏み入れると、コンピューターの画面にプレスの動作状況が写し出されていた。コンピューターで各種プレスを操作し、圧延ロールの厚さを調節もし、随時生産日報を引き出して見ながら作業実績の確認もできるという。

「以前は７人が行っていたことを、ＣＮＣ化のお陰で今では２人で軽々と行っています。６時間をかけていた工程も35分に短縮されました」

こう説明する工場幹部に、総書記は、この機械は日に何時間連

続運転が可能かと質問した。

ＣＮＣ化以前は日に８時間しか稼動できなかったが、今では平均16時間休みなく運転しているという。

総書記は、機械の改造に苦労した彼らの努力をおしはかるかのように、感動のこもるまなざしで現場を見回わし、また質問した。

「この多くの機械を残らずＣＮＣ化したのですか」

「はい、すべての機械にＣＮＣ装置がセットされ、それらが統合生産システムにアクセスされています」

「よくやりました。このようにしたら毎日の生産総括をする際、紙片にいちいち実績を書き込む面倒もなくなったわけですね」

工場では将軍の指摘を得てこのような高度のＣＮＣ化目標を立てました、今後、生産の正常化を維持し、更には工場の隅々まですべて現代化します、と工場幹部たちはこもごもに決意を表明した。

「ふむ、みなさんは嘘というものを知らない人たちだ」

信頼のこもる言葉であった。

総書記は、工場を立派に立ち直らせた、プレスもみな素晴しく改造されている、と今一度たたえた。

すっかり気をよくした工場幹部たちは、ＣＮＣ化されていない工場には将軍がお見えにならない、将軍に喜んでいただくためには、必ずＣＮＣ化をやり遂げなければならないと、工場の技術者や労働者たちにはっぱをかけたものですと言った。

総書記は、感謝を送ります、本当にご苦労さんでした、たいそう満足しましたとして、力強く言った。

「江界は模範だ、模範！」

２　先軍長征の道で

忘れえぬ夜間の狩猟

寒さの厳しい1975年1月5日、ある島防御隊を訪れた金正日（キムジョンイル）総書記は、軍人たちの生活状況を具体的に確かめたあと部隊の戦闘準備態勢を点検し、さらに島の子供たちの教育状態についても細心の注意を払った。

時間はかなり流れていつしか日が沈み、島は暗闇に包まれた。

そんななかであたりを行きつ戻りつして何事かを考えていた総書記は随員たちを振り返り、この孤島の陣地を訪れ、今なんとなく空虚な思いに駆られながら立ち去るのはどうにも心苦しい、島で苦労している軍人たちに何かを贈って帰れたら、この気持ちもいくぶん晴れると思える、それでこれから猟をしてはと思うが、どうだろうかと同意を求めた。

彼らは驚いた。この不慣れな島の暗い森の中で狩猟をするなど思いもよらぬことである。

思いあぐねた彼らは、狩猟は自分たちにお任せになり、将軍はここでしばらくお休みになって下さいと勧めた。

総書記は、みなさんの心遣いは有難いが、私の心情も理解して欲しい、島の軍人たちは金日成（キムイルソン）同志にはお変わりないかと真っ先に尋ね、前線の守りは心配なさらぬようにとわれわれを力づけて

くれた、だから私も彼らになんらかの誠意を示したいのだ、とし、「祖国の最前線を揺るぎなく守っている軍人たちに、私の手で捕った野獣の肉を提供したいのです」と切々と語った。

こうして始まった猟が終わったのは、零時過ぎであった。

随員たちが早く宿所へ戻って休むようにと勧めたが、総書記は獲物の量を確かめ、島防御隊の軍人たちだけでなく、今度の航海を共にした海兵たちにもまんべんなく行き渡るよう配分までした。そして、乗用車に獣を乗せて埠頭まで運び、島をあとにした。

神業とまがう射撃術

1975年1月13日、金正日総書記は新型狙撃兵器の性能を試すべくある射撃場に現れた。

射撃地点に立った総書記は、本来の標的をさしおいてそのかたわらの松の枝に電球を10個吊るすよう指示した。

100メートル先に吊るされた電球の本体は透明なガラスであるだけに、ほとんど見分けがつかず、口金のみようやく識別できる程度であった。

銃声が響いた。見ると、電球は一つ残らず砕け散っていた。射撃場は嘆声にどよめいた。

「よろしい。この銃は合格だ」

満足した総書記は、今度はペニシリン瓶を的にしようと言い、薬瓶が50メートル先に置かれると、100メートルの距離を取るよ

う指示した。

ペニシリン瓶は電球とは比べようもなく小さい。だからいかに特殊な照準装置を有する狙撃兵器であっても、そんなに遠くの小さい透明な瓶をどう照準できようか。……

総書記は矢継ぎ早に引き金を引き、銃声が谷間に鳴り響いた。双眼鏡で見ると、10個の瓶は跡形もなく、そこに台座だけが残っていた。

最後に同じ台座の上に、10本のサイダー瓶が並べられた。ところがである。不思議なことに射撃が終わっても瓶はどれもがみな同じ場所に変わりなく立っている。

驚いてそこへ駆けていった人たちは、一斉にあっと叫んだ。立ち並んでいるサイダー瓶にはすべて頭がないのである。

「われわれの労働者たちは実にあっぱれだ。大したものだ」

総書記はわが射撃術についてはいささかもてらうことなく、明るい微笑を浮かべて、こう銃の生産者たちをたたえた。

無害煙草

抗日革命闘士金一（キムイル）の生涯には、革命先輩に対する金正日総書記の気高い信義の世界をかいま見せるエピソードが数多く残されている。

その中で1976年4月以後彼が朝鮮民主主義人民共和国第１副主席を務めていた頃の一つのエピソードをここに紹介する。

ある会議を前にして、休憩室で金一と談笑していた総書記は、彼の指に目をとめ、第１副主席は煙草を日に何本ほど吸っているのかと副官に聞き、その返答に目を見張った。

金一は噂に違わぬヘビースモーカーであった。

彼の喫煙について、いつだったか金日成主席は、抗日武装闘争当時、密営の焚き火が消えることはあっても金一の煙草の火が消えたことはなかった、部隊が宿営した場所の土を掘り起こしてみて、そこに吸い殻が多いと、金一の連隊の宿営地だったと判断できたものだと回顧している。

そんな習慣から抜け切れず、彼は今も煙草を過度に吸っているのであった。

生涯を革命活動に打ち込み、他に趣味というものを持たない彼が、晩年の今、煙草を止めろと言っても通ずるわけはなかろうが、そうと知りながらも、総書記は我慢できず、副官をきびしくとがめた。

――第１副主席同志は煙草のために健康を害している。それにもかかわらず、君はいつもそばにいながら何をしているのか。第１副主席同志の喫煙を統制すべき人は君しかいない。主治医や家族は一緒にいる時間が多くないのだから統制できるわけがない。ところがなぜ君は自分のなすべき任務を怠っているのだ。職務の怠慢は他にあるのではない。君の場合、第１副主席同志の健康の管理に関心を向けないこと以上の職務怠慢はない。君は処分を受けるべきだ。処分も厳重処分だ。……

その日会議から帰った金一は、ポケットから煙草とパイプ、マ

ッチを全部取り出した。煙草を止めようと決心したのである。

ところが、それは３日坊主にすぎなかった。煙草を口にしなくなった時からそわそわして気がしずまらず、手はしきりに空のポケットをまさぐり、テーブルの引き出しを開けたり閉めたりしながら時間をすごし、誰かが訪ねてくると、煙草をせがんで吹かすのである。

彼にとってこれ以上の不自由があったろうか。

そんなある日、副官がにこにこして現われ、煙草とマッチを差し出した。

「どうぞ一服なさって下さい」

「なんだと、おれを冷やかそうって言うのか」

「いやそうじゃありません。これは……健康に害のない無害煙草です」

「無害煙草?!……」

初めて聞く言葉である。

副官は驚く彼にこう説明した。

煙草のことで副官を叱責した総書記は気分がすぐれず、金日成同志に従って長年革命活動を続けている第１副主席には気苦労がどんなに多かろうか、それで煙草も人一倍多く吸うようになったはずだが、それを急に止められようかと心配して、該当幹部に任務を与え、健康に害のない煙草を手に入れてくるよう指示したのであった。

60歳の〝花婿〟

「金日成同志が金策（キムチェク）同志に深い親しみを抱いていたように、私は呉振宇（オジンウ）同志に親しみを抱いていました」

金正日総書記が呉振宇を追憶した言葉である。

呉振宇が病没した1995年2月25日、総書記は深い悲しみに沈み、老革命家たちが１人、２人とわれわれのかたわらを離れていくのは実に胸の痛むことだ、彼らが活動はできなくても、われわれのそばに居てさえくれたら力になる、にもかかわらず、このようにみな逝けばどうするのだと嘆息して、語を継いだ。

――わが党に呉振宇同志のような老革命幹部がいたということは、天の星を取って来た以上に貴重なことであった。呉振宇同志を失ったことは、わが党と朝鮮革命にとって極めて大きな損失だ。……

抗日革命闘志であり人民武力部長であった呉振宇。彼は金日成主席と金正日総書記の最も近しい革命同志、革命戦友であった。

呉振宇の60歳の誕生日のことである。

総書記は彼に電話を入れ、会合があるからどこそこに早く来るようにと指示した。

彼が急いで指定の場所へ行くと、そこには既に大勢の革命闘士たちが集まっていた。

隣の部屋から総書記が、花婿が到着したのだから、祝膳の前に座らせなくちゃ、と言って入って来た。

（花婿？……）

一同は驚いてまわりを見回したが、そこにいるのは大半が60歳内外の闘士たちで花婿らしき若者はどこにもいなかった。

総書記は、さあみなさん、こちらの部屋へどうぞ、花婿さんが到着したのだから、式を挙げなくちゃと言った。

総書記は時たままじめな顔をして突拍子もない冗談を飛ばすので、今度もみんなを笑わせるつもりなんだろうと思いながら、隣室へ入った呉振宇は目を丸くした。

さほど大きくない部屋ではあるが、そこに確かに大きな膳部がととのえられている。

総書記は顔色を正して言った。

簡素な膳ではありますが、これは、金日成同志に従って今日この日まで、革命の長途を力強く歩んで来られたわが革命の元老である、人民武力部長同志の還暦祝いの膳です。

……

人民武力部長同志の還暦祝いの膳を〝婚礼披露の大膳〟として準備したわけですから、花婿の介添の役は私が務めます。

（えっ、それじゃわしが花婿だというのか……）

呉振宇は、こみ上がる激情を抑えることができなかった。

総書記は彼の杯に祝福の酒を注ぎ、花婿をお祝いして乾杯しましょう、と言った。

宴たけなわとなるや総書記は、この喜ばしい日に、武力部長同志から実際に結婚した時の経験談を聞いてみましょう、と提案した。

拍手喝采が起き、呉振宇が立ち上がった。

彼は祖国の解放直後、平安（ピョンアン）南道安州（アンジュ）郡へ派遣されて郡党書記に就任した。

そんなある日、彼は品のよい美貌の女性と見合いをすることになった。ところが、娘の親は、一人として身寄りのいない男に娘を呉れるわけにはいかんと、その場で拒絶した。

呉振宇はそんな親に向かって、滔々とまくしたてた。

私は当郡の責任者であり、安州郡の土地と工場はみな「私のもの」であることを忘れないでいただきたい。安州を私の責任で治めるのは英明な金日成将軍からじかに授かった命令である。昔、鳳伊金先達（ボンイキムソンダル）が大同（テドン）江の水を売り払ったという話があるが、いわんや金日成将軍の部下であるこの私が、安州の地一つ治めることができないと思っておられるのか。実際、パルチザン闘争に比べたら、そんな仕事は泥を切るよりも易しいことだ。では、これで失礼する。……

すると娘の父親があわてて座り直し、彼のズボンをつかんで聞いた。

「あんたは本当に“縮地法”を使う金日成将軍の部下だと言うのかね？　……そんなら背に翼があるだろうに、それを見たいものだ」

呉振宇がまじめな顔をしてここまで言うと、室内に爆笑が湧いた。

「ですから、金日成将軍のおかげで、お気に召す女性を妻にめとったというわけですね」

総書記が笑いながら口をはさんだ。

呉振宇は話を続けた。

いよいよ婚礼の儀式が始まり、彼は大膳の前に座った。その時村の若者どもがくるくると巻いた朝鮮紙を彼の前にほうり投げた。

開いて見るとこんなことが書かれてある。

「この大泥棒め、貴様がこの村の娘を白昼にかどわかして行こうというからには、大膳をわれわれに渡すか、さもなければ娘を置いて帰るかだ。どちらだ」

これは朝鮮古来の婚礼風俗の一つで、礼式は普通嫁方と婿方の両家で二重になされるが、嫁方では婿を迎えて式を挙げ、ついで婿が嫁を伴って帰り、婿方の家でまた式を挙げるのが普通で、嫁方での式に際しては、村の若者たちが花婿に難題を吹っかけて〝おどし、困惑させ〟る風があった。

巻き紙を開いて見た呉振宇は即座に返書をしたためて、前へほうり返した。

式をつかさどる白いひげを垂らした老人がそれを取って目を通し、にやっとして声を張り上げた。

「こいつらめ、ひどい目に遭う前にとっとと消え失せろ。ここに画かれた棒は、10人を一撃のもと叩きのめすというほどの意味だ。それに、三つのばってん〝X〟の上に点を打ってあるのは、30人以上でも一人で相手にしてやるということだ。また、その下に〝将軍の麾下〟と書かれたのは、千万大軍も蹴散らす縮地法を駆使する力があるというわけだ」

若者どもは仰天して、退散してしまった。……

座中はまたしても哄笑に包まれた。

総書記は豪快に笑い、さすがに武力部長同志は見識に富み、臨

機応変の才があるとして、こう続けた。

——金日成同志は数日前、人民武力部長が間もなく還暦を迎えるが、還暦祝いを立派に行うようにと教示された。私はその時金日成同志に、還暦祝いを、年は取っても気持ちは若くあるべきだという意味で〝結婚祝い〟として行いたいと申し上げた。金日成同志は私のこの意見に、とても素晴しい趣向だとして、たいそう満足された。……

こう語った総書記は、〝婚礼の祝膳〟はこのままお宅に贈って〝花嫁さん〟にもお見せし、〝新郎新婦〟が並んで写真を撮るようにしようと言った。

山海の珍味とトウモロコシ粥

1995年8月28日、金正日総書記は微笑をたたえて大波に揺れる艦のデッキに立っていた。

海上では実戦を彷彿させる軍人たちの水泳訓練が行われていた。

「……軍人たちの水練は確かに堂に入っています」

総書記は人民軍指揮メンバーを振り返り、3面が海に囲まれているわが国では誰もがみな水泳ができなければならない、わが国の兵士たちにとって水泳は極めて重要な訓練種目だ、いかなる部隊であれ、軍人たちを射撃に長じ、行軍でも後れを取らず、水泳にも長けた「一当百」の兵士に鍛え上げなければならない、と力をこめて言った。

訓練が終わると、総書記は彼ら軍人の一人ひとりを頼もしげに見回して、私は今日、短時日のうちに不屈の意志と頑強な忍耐力を発揮して高度の水泳法を身につけた中隊軍人たちを祝って、昼食を用意したから、兵士たちを艦の食堂へ案内するようにと言った。

テーブルには、さまざまの料理や果物が盛り沢山に並べられてあった。

総書記は、諸君はこれらを残らず食べられるだろうかな、と笑って聞いた。

「将軍のおぼしめしになる食事です。どうして食べ残せましょうか」

将軍は大きくうなずいた。

よろしい。

私は今日、別の予定があり、諸君と席を共にするゆとりがない。しかし諸君は、私と一緒に昼食を取るのだと思うのです。茫々たる海上のすがすがしい風に当たりながら昼食を取るのも悪くないでしょう。

総書記は随行した指揮メンバーを振り返り、みなさんはここへ残って兵士たちと一緒に食事を取ってから追って来るのです、と言い、兵士たちが箸を手にするのを見届けて、その場をあとにした。

こうして、前線視察の途についた総書記は、途中の道ばたで昼食を取った。それは１碗のトウモロコシ粥であった。

恐縮する随員たちに向かって総書記は、兵士たちが食事に舌鼓を打っているだろうと思うと、今日の昼食は抜かしたとしても腹がふくれるような気分だ、と言った。

古豊生まれの２兵士

1996年3月20日、前線東部の諸軍部隊を視察し、帰路についた金正日総書記は、鉄（チョル）嶺の頂に至った。

鉄嶺は30余年前の春、人民軍部隊現地指導中の金日成主席が、当地の警備に当たっていた一軍人に親しく会い、記念写真を撮った意義深い地である。

当時主席に随行した総書記は、その日のことを感慨深く振り返った。

嶺の頂に立ってくねくねと続く鉄嶺の峠道をしばらく眺めていた総書記は、以前ここに哨舎があったが、今もあるだろうか、哨兵がいれば会って見ようと言った。

すぐさま一将官が哨舎へ向かって走って行った。ところが哨舎はかなり離れたところにあったので、哨兵が連れて来られるまではしばらく待たねばならなかった。

夕日が西山の向こうに没し、風はいよいよ激しくなった。

しかし総書記は、寒風にさらされながら20分間も兵士の到着を待った。

やがて将官が武具で身を固めた一兵士を伴って戻って来た。

総書記は挙手する兵士に温かいまなざしを向けて、「**名前は何と言うのかね**」と聞き、彼の故郷や父母についても尋ねた。

兵士は自分の姓名を告げ、故郷は慈江（チャガン）道古豊（コプン）郡ですとはきはき答えた。

総書記は兵士としばらく談話を交わしたあと、記念に写真を一枚撮ろうと言った。

撮影後、兵士は総書記にお願いした。

「敬愛する最高司令官同志、写真ができたら早く見たいものです」

総書記は、君はなかなか傑作だ、写真はすぐ送る、と言って豪快に笑った。

ところで、あとで知ったことだが、数十年前この山頂で金日成主席と記念写真を撮った兵士も、慈江道古豊の生まれだということである。

古豊生まれの2人の兵士！

一人は主席と並び、今一人は総書記と並んで先軍革命のシンボル鉄嶺の頂で記念写真を撮ったことで、遠い北方の僻地古豊が今や全国に名を知られる土地になった。

中止を命じられたボクシング試合

1996年4月25日の朝、金正日総書記は最前線人民軍部隊の視察スケジュールを作成し、今日は朝鮮人民軍の建軍記念日だから手ぶらで行くわけにはいかない、軍人たちに贈る祝日用食料品を用意し、芸術公演の手立ても講じることだと指示した。

総書記を陣地にお迎えし朝鮮人民軍勲功合唱団（当時）の公演も観覧することになったとして、兵士たちは大喜びした。

部隊に到着した総書記は、建軍節を迎えた軍人たちを熱烈に祝

福し、本日のスケジュールについて尋ねた。

部隊では多様なスポーツ競技を主とし、なかでもボクシングの試合に重点を置いていた。総書記に部隊の戦闘力と軍人たちの勇猛な気概を評価してもらうには、ボクシング試合が一番だと思ったからである。

総書記は、指揮官たちと座を共にして試合を観覧した。

リングに上がった選手は共に筋骨隆々とし、見るからに敏捷そうであった。ゴングが鳴り、両人は強力なパンチを加える機会を狙い、軽いフットワークで右に左に回った。そんななかで接近戦に移り、強打の応酬が熾烈に繰り返された。

応援合戦もフィーバーした。

そんな時、総書記は指揮官に静かに声を掛けた。

「もういいですから、試合はそれくらいにしなさい」

（えっ、試合の途中に?!）

訳が分からず、指揮官は腰を浮かしたまま、もじもじした。

総書記は、祝日なのに兵士たちに激しい疲労を与えるべきでない、祝日はゆったりとした気分で楽しく過ごすべきであって、ボクシングなどをして血を流し、顔がはれたりしてもよかろうか、祝日にこんな試合をすることはない、とつぶやくように言った。

結局、ボクシングは途中で中断され、代わって楽しい文化娯楽的なスポーツ競技が始まった。

列車の中で

1996年6月3日、金正日総書記が人民軍部隊を現地指導する途上の列車の中でのことである。

待っていて見る楽しみ　人民軍の戦闘力の強化方途について話していた総書記は、ちょっと話題を変えて、軍の政治幹部に、各大隊に供給したビデオ付きテレビをどんなふうに利用しているかと聞いた。

大隊政治指導員たちが計画を立てて、中隊と直属区分隊へ順に回して新作の映画を観覧させ、必要な場合は、映画上の模範に学ぶ集いなども行っているという説明に、軍人たちがビデオを見て喜んでいるか、と再び尋ねた。

「とても喜んでいます」

「軍人たちがビデオを見て喜んでいるなら結構なことです」

こう言って総書記は、一般物の劇映画を好んでいるか、それとも戦争ものを好んでいるかと質問した。

「戦争映画の方を余計に好んでいます」

総書記はうなずき、そうあるべきだ、軍隊は銃を取って敵と戦うことを基本的な使命とする以上、歌を歌っても戦闘的な歌を歌い、映画を見、小説を読んでも戦争をテーマにした映画や小説に興味を抱かなければならない、ソ連のテレビ劇映画『17日間の出来事』をビデオに早く収録して配布することだとし、こう続けた。

「私が前にも話したことですが、ソ連劇映画『17日間の出来事』その他のシリーズ映画は軍人たちにいっぺんに全部見せず、1部を見せたあと、次の部を見たいと待ちどおしく思っている時にまた1部を見せることです。劇映画は待っていて見る楽しみもなければなりません」

軍人たちの心理を見極め、それに応じた文化情緒生活を組織するようにという意味のこもる言葉であった。

トランプ　「兵士たちの上に立つ指揮官がトランプを楽しめないようでは、彼らと親交を結べません」と、トランプに話題を移した総書記は一幹部に、トランプ遊びには幾通りの方法があるかと聞いた。

彼はトランプ遊びについて多くは知らないが、とにかく軍人たちは現在5種類ほどの方法で遊んでいると答え、それらの遊び方を説明しながらその一つに“ホンソル”と通称されているゲームもあると語った。

微笑を浮かべて聞いていた総書記は、その“ホンソル”というのは、相手に一泡吹かせる（ホンサルネダ）“ホンサルゲーム”という意味になるわけだと言って、豪快に笑った。

実際このゲームでは、意表外の“ホンソル”で泡を吹かなかった人はいないであろう。まことに当を得た地口で、みな大笑いした。

総書記は、一度支給されたトランプは封を切ると何カ月ほどもつか、と尋ね、軍人たちに上質のトランプを支給すべきだ、これまで軍人たちに支給したトランプは折れ易く、角も擦れてすぐに

切れてしまうとのことだが、そうなればトランプの使用価値がなくなるとしてこう言った。

「総政治局は、軍人たちが使っていた古いトランプを私に届けて下さい。古くなったトランプを軍人たちが何カ月ほど使用したかを記すべきです」

総書記は、自分が軍人たちの使用したトランプを点検し、上質のトランプを作るよう措置を講ずると語った。

その後、総書記の執務テーブルには軍人たちの使い古したトランプが持ち込まれ、代わって総書記の配慮になる上質のトランプが兵士たちに支給された。

戦士に恵まれた喜び

1996年12月1日、金正日総書記は近衛ソウル柳京守(リュギョンス)第105戦車師団を視察し、実動訓練を指導した。

監視所に立った総書記は、粉雪が白く舞う訓練場の全景を見渡した。風当たりの特に強い監視台の寒さはひとしお身に沁みた。部隊の指揮官が、監視台の床に置かれた幾つもの石を指して、軍人たちが焼いた石ですと報告した。

感動した総書記は、焼け石にしばらく目をこらし、軍人たちはなんと奇特なんだろうかと繰り返し称賛した。訳を聞かなくても、兵士たちの心情が十分におしはかれたのである。

訓練が開始され、時間とともに吹雪はつのり、監視所の中にま

で粉雪が舞い込んだ。

指揮官や随員たちは総書記に、どうか焼け石の上に立ち、しばらくでも足を温めるよう進言した。しかし総書記は、訓練が続いている間、一度として焼け石の上には立たなかった。

それから長い歳月が流れたある日、軍人たちの芸術宣伝隊公演を観覧していた総書記は、ダイアローグ詩「偉大な先軍の途」に、「苦難の行軍」期に私が105戦車師団の戦車兵たちの訓練を指導した内容が盛られているが、あの時のことが感慨深く思い出されるとしてこう続けた。

——あの日は本当に寒かった。どんなに寒かったかというと、足が凍えるのではと思えるほどだった。監視台には軍人たちが足を温めるようにと焼け石を置いてくれていたが、あの寒い野外で訓練する軍人たちの姿を見ていると、とても焼け石の上に立つ気になれなかった。だが、それらの焼け石に目を向けたとたん、凍えていた身体が急に温まってくるようで、兵士たちの素行がなんともけなげで、目がうるんだものだった。……

総書記はこう言葉を結んだ。

「この世にわが兵士たちのように優れた軍人はいません。私は確かに戦士に恵まれています」

逆に解説を受けた案内教員

1997年1月1日、金正日総書記は万景台（マンギョンデ）革命学院を訪れた。

総書記に革命事績教育室の解説をすることになった女教員は、胸をときめかせながら、解説をなんとか立派に行おうと努めた。

総書記は、学院の開院式で演説する金日成主席の写真の前で立ち止った。

「これは、学院の開院式で演説を行う金日成主席の写真です。……」

総書記は、この写真を見ると当時のことが感慨深く思い出される、としてこう語った。

――その日の夕方、帰宅した金日成同志は母に、今日学院の開院式で演説した際、院児たちの姿を見ていると、山でともに戦い犠牲になった革命同志たちが思い出されて、涙があふれ出るのを抑えようがなかった、われわれが父となり母となって、彼らを立派に育てよう、と切々とお話になった。母も、私も今日院児たちを見て涙が止まらず、頭を上げることができませんでした、私はあの子たちと血の通う母親になります、と誓ったものだ。あの時の金日成同志と母の言葉は私の胸に強く焼きついている。……

女教員は驚いた。自分が用意した解説にはそのような内容が一切なかったのである。ところが女教員のこの驚きは序の口にすぎなかった。

写真に再び目をこらした総書記は、眼鏡を掛けて前列に座っている人物は学院の初代院長を務めた人だが、彼は安重根（アンジュングン）が伊藤博文を射殺すべく満州へ向かった際に同行したメンバーの一人だと教えた。

女教員は、解説者としての自分の立場も忘れて、総書記の説明に聞き耳を立てた。

金日成同志は、学院長が幼い子を持つ人であったら院児たちにあまり情がわかないかも知れず、その子らがお父さん、お父さんと言って院長につきまとっていたら、院児たちが父母を思って悲しむだろうからと、子のない彼を院長に選んだのでした。

こう言って総書記は、主席を囲んで撮った遺児たちの写真の前に歩みを移した。

女教員は、この写真のことは自信を持って解説できる、と勢いづいた。

ところが総書記はここでも院児たちの一人ひとりを指さしながら、あの子は誰それの娘だし、この子は誰それの息子だと説明し、また、前の人に遮られて顔がはっきり見えない学院の一幹部も、誰それに間違いないと、名前まで挙げるのである。

女教員は驚嘆した。

数十年も前の写真、それも、総書記が五つの時に撮った写真の中の人たちのことを、こんなにもはっきりと記憶にとどめておられるなんて……。

（敬愛する将軍！　私は今日将軍に解説するはずのところを、かえって解説をしていただきました）

〝暴　風〟

人民軍部隊に非常呼集〝暴風〟命令が下った。

呼集を受けた人民軍将兵は平安（ピョンアン）北道から黄海（ファンヘ）南道に至る広大な広闊地帯へと急遽移動展開し始めた。

背負い袋と装具類を携帯した軍人たちが、トラックに乗り、あるいは徒歩で昼から夜にかけて移動する光景は人々を驚かせた。

なんのための大機動か知るよしのない当地帯の人たちにとって、それは大きな驚きであったが、わが軍の動きに常時目を光らせているアメリカ帝国主義者と、南朝鮮傀儡一味のあわてぶりはいかばかりであったろうか。そこでは笑うに笑えぬ悲喜劇が演じられた。

恐怖におののき右往左往していた彼らの混乱状態がおさまったのはその数日後である。人民軍諸部隊が集中移動した目的の地は、前線の陣地ならぬ処々の協同農場であったことがようやく判明したのである。

ところで、人民軍部隊の大機動という事態は、どうして起きたのだろうか。

1997年4月4日、金正日総書記は軍の指揮メンバーを集めて、人民と生死運命を共にする人民の軍隊、革命の軍隊である人民軍がおのれの道義を尽くすためには農村支援戦闘を着実に行うことだ、今年は農村支援戦闘を従来のように周辺の協同農場を支援するようなやり方ではなく、部隊を約３、４カ月間遠方の平野地帯に展開し、軍隊が穀物の生産で一役買うようにしなければならない、としてこう強調した。

軍人たちは最高司令官の命令を貫徹する前には祖国の青い空を仰ぐなという忠誠のスローガンを高く掲げて、安辺（アンビョン）青年発電

所の建設で英雄的偉勲を立てた軍人建設者たちのあの精神、あの気迫で農村の支援を力強く行い、国の穀物増産で一役買わなければなりません。

〝暴風〟命令はこうして全軍に下されたのであった。

魚のせいならぬ水のせい

1997年9月15日、人民軍の某島防御隊を訪れた金正日総書記は、強風のすさぶ前方監視所に上がり、ここで部隊の戦闘準備と戦闘力の強化、訓練とかかわる問題などについて語った。そして、防御隊に漁船は何隻ほどあるのかと聞き、さらにこの水域にはどんな魚が多いのかと尋ねた。

「カレイがたくさん捕れますが、なんと言ってもハタハタが一番です」

総書記は笑って、自製の伝馬船でカレイ、イカナゴ、ハタハタなど多くの魚を捕って、軍人たちの食卓を常に潤さなければならない、と言った。

この時、随員の一人が、「最高司令官同志、島の人たちは魚ばかりたくさん食べるので太らないのではないでしょうか」と言った。

ところが、総書記はそれを否定した。

魚ばかり食べていては身体が痩せるというのは理屈に合いません。島で生活する軍人たちが魚をたくさん食べていて太らないのは、島の水が身体に合わないからではないでしょうか。

島防御隊の指揮官たちは驚嘆して、顔を見合わせた。

一指揮官がその通りです、とこう述べた。

「最高司令官同志、島の兵士たちが陸の軍人たちより魚をたくさん食べながらも身体が太らないのは、この島の水が硬水なので消化に障りがあるからです」

総書記は、島防御隊は水の管理に特別の注意を払う必要があると強調した。

賞　賛

1997年9月28日、ある人民軍部隊を視察していた金正日総書記は、部隊食堂の壁にかけられてある掲示板に目をこらした。

〞兵士たちのための日〟と題された掲示板であった。

初めて見る変わった題であると、好奇のまなざしで本文を読み進む総書記に、部隊長が説明した。

——部隊指揮官たちは兵士たちの生活をいささかなりとも豊かにする問題をもって討議し、〞兵士たちのための日〟の運営を思いついた。その方法は、部隊の全軍官夫婦が、毎年12月から翌年３月まで順ぐりに副食物を用意して、昼食のたびに兵士たちの食卓に添えることにした。こうして部隊長の担当日には、部隊長とその妻が兵士たちの親となって食卓に彩りを添え、政治委員の担当日には、政治委員とその妻が負けず劣らずといろいろの副食物を用意する。他の軍官たちも、事前に副食物の準備を十分に

しておき、担当日に運んできているが、その間各軍官夫婦は他にひけを取ってはと物言わぬ競争を起こしている。こうして兵士たちは毎日のように故郷の母にもまがう細やかな愛情を覚え、これに力を得て戦闘政治訓練によりよく励んでいる。……

彼の説明によって、各行に部隊長夫婦の姓名をはじめ部隊内の全軍官夫婦と、超期服務下士官夫婦、軍属夫婦らの姓名が日別に書かれた掲示板の意味がはっきりと理解できたのであった。

「たいへん立派なことです。……実に優れたことをしています」

総書記は満足して何度もうなずき、部隊の軍官家族が一日や二日でもなく何年もの間、12月から翌年３月まで、毎日交替で昼食用にと、自分たちが準備した副食物を運んできて兵士たちの食卓を潤すことは簡単なことでない、部隊の軍官家族は兵士たちを骨肉として、自分自身より祖国を先に考える殊勝な女性たちだとし、“兵士たちのための日”をすべての部隊と区分隊が常時運営するとよかろうと強調した。

後日、総書記はこう語った。

「軍官たちとその家族が〝兵士たちのための日〟を運営していることは、世界に誇るべきことです。外国の軍隊では指揮官やその家族が、自宅でさまざまの美味な料理を作って兵士たちに提供するなど、想像もできないことです」

不思議なめがね

1998年5月22日早朝、金正日総書記を乗せた野戦乗用車は前線東部カチ峰の峠道を上っていた。

海抜1000余メートルの高地で総書記の到着を待つ軍人たちは欣喜雀躍していたが、部隊指揮官は気が気でなかった。

高地は濃霧に包まれて周辺の峰はほとんど見分けがつかないのである。こんな状態で前線の状況を説明するのは及びもつかない。……

（困ったことになったものだ。霧はいつ晴れるだろうか）

やがて、高地に総書記を迎えた指揮官は観念して、霧海の中におぼろに見える幾つかの峰を頼りに、敵軍の配置状態と現状況を報告するほかないと思った。

ところが総書記は、地形については先刻承知しているから気にすることはないとして、こう言った。

「向こうに見えるのはソンジョ岩で、その前の二つの山は351高地と月（ウォル）飛（ビ）山ですね」

濃霧の中にかすかに見える嶺はもとより、姿すら見えない山の位置と名も的確に指摘する総書記の眼力に、随員も部隊の指揮官たちも驚嘆した。

総書記は、軍事境界線南側の地形地物についてもはっきりと知っていた。

（将軍は以前、当地をたびたび視察しているのではなかろう

か？……）

「わたしはめがねを掛けているので、すっかり見えます。諸君もめがねを掛ければ何もかもはっきり見えるでしょう」

総書記はとぼけたように言った。

「えっ？……」

みなぽかんとして顔を見合わせていると、総書記はからからと笑った。

彼らは今更のような思いにひたった。

祖国と人民を確固として守るべく、人民軍の戦闘準備に万全を期して総書記は、全前線のすべての山々や地形地物をも欠かさず脳裏に収めていたのである。

偶然か必然か

1963年2月、金日成主席に随行して前線西部の最前線高地を訪れて以来金正日総書記は、それらの高地を幾度となく視察している。

2001年2月7日、あの日から丸38年が経ったこの日も将軍は当高地を視察した。

この日、総書記はある女性中隊を訪れた。

38年前、主席が当地の一区分隊を視察した際に接見した平安（ピョンアン）北道昌城（チャンソン）郡出身軍人の娘が、当女性中隊の政治指導員を務めていた。

あの日主席は、昌城郡出身の若い兵士に会い、故郷はどこか、今何歳か、入隊前、家庭では穀物の分配をどれほどもらっていたかとこまごまと尋ねたものである。歳月は流れ、除隊後その兵士は志望して、自分が勤務した最前線の陣地へ娘を送った。

そのことを知った総書記は、たいそう喜び、昌城出身軍人の娘を身近に呼んだ。

敬礼する中隊政治指導員を頼もしそうに見やった総書記は、顔をほころばせて、父親が守っていた前線の陣地を娘が代わって守っているのは実に殊勝なことだとたたえて、随員たちを振り返った。

「私が今日、金日成同志が昌城出身のちびっ子兵士に会ってちょうど38年目になるこの日に彼の娘に会ったのは、何か因縁があるようです」

最前線の同じ陣地で38年前の2月7日には、主席が父親に会い、38年後の2月7日には、総書記がその娘に会うことになった意義の深い邂逅。

偶然だろうか、それとも必然だろうか？

随員たちは、総書記の言葉に深く考え込んだ。

金日成主席が生涯歩み、金正日総書記が変わりなく継承して歩む先軍の道。その意を体して全国の家庭は祖国の守りを家風とするようになった。ならば、この日の邂逅は先軍朝鮮でのみありうる特異な、必然的な因縁であるというほかないであろう。

ほのめかしてくれた生活のことわり

2001年3月4日、金正日総書記は勲功国家合唱団の責任幹部から、古参団員たちの活動と生活状況についての報告を受けた。

その最中、総書記は、あるホルン演奏家の現在の生活状況について質問した。

彼は優れた技量の持ち主で、還暦が過ぎてかなり経った今も楽器に特有な音色を立派に生かしており、以前総書記が、彼は世界記録集に登録するに値する特技演奏家だと称賛したほどの人物だった。

責任幹部は、「彼は昨年妻に先立たれてからは、あととりたちと一緒に過ごしています。ところがあととりの話では、どうしたわけか父親はこの頃、帰宅するといつになく怒りっぽくなっているというのです」と話した。

総書記はさもありなんとばかりに笑い、とがめるように言った。

「あなたは生活のことわりに暗いようです。

昔から男やもめの怒気と後家の涙が合わさって新しい家庭が出来上がると言われています」

「えっ？…」

初めて聞く格言ですぐには意味が取れなかったが、ちょっと考えてみると得心がいった。

総書記は頭をかく彼に言った。

「あなたは……その気持ちを十分に理解して、一月以内に嫁を

取らせたあと、私に報告するのです」

「分かりました」

そのしばらくあと、ホルン演奏家は後添いを得、そのことは総書記に報告された。

「で、本人は喜んでいますか」

「はい、あたかも若返りでもしたかのように演奏に熱を上げていますし、怒気も収まったとのことです」

総書記は満足して、豪快に笑った。

煙草〃百勝〃４箱

2001年5月10日、ある砲兵区分隊を視察した金正日総書記は、区分隊食堂の壁に掛かっている「一日の糧食供給規定量」という表を眺めながら、**「煙草1日10本」**とつぶやいて、中隊長を振り返った。

「煙草は不足なく供給していますか」

「はい、規定通りに供給しています」

「では一つ見てみましょう。中隊長の煙草を見ましょうか」

「ポケットに煙草を入れておりませんので……」

「では軍人たちの煙草を見ることにしましょう。煙草を数箱持って来なさい」

「分かりました」

待つほどもなく中隊長は〃百勝〃４箱を持って戻ってきた。

総書記は、煙草の箱の色がなぜこんなにまちまちなのか、軍人たちに供給する煙草がこんなにまちまちでいいものかと言い、随員にこの煙草を朝鮮人民軍総政治局へ持って行き、箱の色が違うわけを確かめることですと指示した。そして、この煙草を持って帰れば中隊にはその分だけ煙草が足りなくなる、だから今日煙草を４箱持って行く代わりに、中隊に〝百勝〟４箱を必ず弁済しなければならない、煙草は中隊の人員数によって供給するのだから、これを持って行ってしまえば、軍人たちの分がそれだけ不足する、としてこう言った。

「誰であれ中隊に供給する物資にやたらに手をつけてはいけない。このようなことでは最高司令官も例外ではありません」

数日後、総書記が送った〝百勝〟４箱が中隊に届いた。

大きな喜び

2001年5月25日、金正日総書記はある中隊を視察した。

「花の香気が満ちている」　兵営の構内にアカシアの花の香りが漂っていた。周辺に植わったスモモとアンズの木には果実が枝もたわわに実っている。

漫画映画のウサギのお山のようだ、兵室もこざっぱりとしており、木々には鳥の巣箱もある、として喜んだ総書記は、深く息を吸い込んで言った。

空気がなんともすがすがしい。空気が澄み、アカシアの花の香が満ちている。実に気分がさわやかだ。

総書記は中隊長を振り返った。

「中隊長」

「はい」

「君は私よりもいい家に住んでいる。私の家へ来てもこんなふうではない。これは嘘じゃない」

みな楽しそうに笑っている時、どこかで「メエー」というヤギの鳴き声がした。まるで自分もここにいるから、早く来て見てくれとでも言っているかのように。

「あれは畜舎だね。行ってみよう」

総書記が歩き出そうとすると、部隊幹部が、食堂を先にご覧になってくださいと言った。

「いや、畜舎から先に見よう。あれらが私を呼んでいるようだ」

畜舎で家畜の頭数や、ヤギ乳の生産状況の説明を受けている時、総書記を歓迎するかのように、土間にねそべっていた仔犬がひょいと起き上がり、首をかしげて尾を振った。

「いや赤犬もいるとは」

総書記は朗らかに笑って、食堂に足を向けた。調理台にはさまざまの料理が盛り沢山に並べられていた。

「こりゃ国際ホテルもそこのけだ。すごいもんだ」

釜の蓋もぴかぴかしているとして満足した総書記は、この中隊のように思想教育にも力を入れ、兵営の管理も手落ちなく行い、物質生活のレベルも高いと、「中隊はわが家、楽しいわが家」と

いう歌詞にもあるように、軍人たちが中隊に楽しみを抱き、軍務に精を出すことだろうと言った。

「表彰すべきだ、大きく」　総書記は柱に貼られた「勇敢」「不屈」などのスローガンを見て尋ねた。

「これはなんですか」

「金日成主席が示された10項の戦闘道徳品性を記したスローガンです」

総書記は柱の上に取り付けられた箱を見て、**「あれはなんですか」**と聞いた。

「軍人たちが休息中に使う将棋、ユッノリ具、トランプなどを入れておく箱です」

「うむ、なかなかよろしい。その下のものは？」

「トランプ遊びなどの時に座る敷物です」

「一式がきちんと揃っているわけだ」

総書記は木の枝に付けられた鳥の巣箱を見ては愛国心の表れである、鳥の巣箱を作った兵士たちの気持ちが大切だと満足し、中隊の寝室が立派に作られていることもたたえた。

部隊の一幹部がこう報告した。

「中隊がこのように出来上がったのには、しばらく前までここで中隊政治指導員を務め、他の軍務に移った趙敬求（チョギョング）政治指導員の努力が大きかったと言えます」

「趙敬求……　趙敬求と……　どこかで聞いた名のようだが」

「彼は兵士時代にちょっとした問題を起こしていたのです。こ

の中隊で兵士生活を行っていた際に軍紀を犯して除隊されていた人です」

「軍紀とは、どういう軍紀かね」

「若い血気に駆られて、大衆規律を犯したのでした」

「それで除隊されたのですか」

「はい」

こう答えた指揮官は、彼は除隊後故郷に帰り農場で働いていたが、なんとかして軍隊に戻り、いまわしい汚名を返上しようと決心して、当時中隊が担当して建設を進めていたある工事場を訪ねて行き、兵士たちに混じって一心不乱に働いた、中隊の幹部をはじめ軍人たちは彼の心情を理解し、献身的努力に共感を覚えながらも、彼の復隊に一肌脱ごうとするまでには至っていなかった、そんな時にそのことを知った総書記が彼を復隊させる措置を取ってくださったのでした、と報告した。

「あ、なるほど。彼の名前に聞き覚えがあると思ったのはそのためだったわけです。……だから彼がやがてこの中隊政治指導員を務めることにもなり、こんな大きなことをやってのけたわけですね」

総書記は、私は多くの人民軍部隊を視察しているが、この中隊ほどに軍務生活を立派に営んでいる部隊を見るのは初めてだとして、こう言った。

「彼を押し立てなければなりません。表彰を大きくすることです。ところで、どんな表彰を行えばいいだろうかね」

「しばらく前、表彰の上申を行ったのですが、彼の過去が問題

になって保留されました」

「いや、表彰すべきです。大きくね」

総書記は、彼ほど優れた軍人はそうざらにはいない、彼は奇特な政治指導員だ、行く先ざきで趙敬求、趙敬求という名が聞かれるが、人々の追憶に残るそのような人こそ優れた軍人だ、とたたえた。

その後趙敬求には労働英雄称号が授与され、彼をモデルにした劇映画も作られた。

「非常呼集だ、直ちに」 あたかも一幅の絵のような中隊の兵営とその一帯を見渡していた総書記が、不意に命令を下した。

「非常呼集だ。非常呼集」

「えっ？…」

思いがけない非常呼集命令に面くらっている指揮官たちに向かって総書記は、こんなに立派につくられた中隊へ人民軍の指揮メンバーや各軍種・兵種の指揮官たちを呼び集めて見せ、手本とするようにしなければならないと言った。

「分かりました。後日参観を組織します」

いや命令だ。直ちに非常呼集をかけるのだ。これは何かの状況に対処した非常呼集でも、何かの事態による非常呼集でもない。当中隊の義挙、肯定的模範に見習うようにするための非常呼集だ。

総書記は笑いもせず、真剣な面持ちで言った。

軍の指揮メンバーは、即時全部隊の指揮官を非常呼集すると答えた。

　総書記はうなずいて言った。

　恐らく建軍史上例のない非常呼集であろう。一日か二日農村支援が延びてもかまいません。みなここへ来て必ず見なければなりません。全員を呼ぶのです。……一切の軍務を中止して来るようにとね。アカシアの花が散る前に直ちに。……

　非常呼集を受けた各軍種・兵種の指揮官たち、最前線を守る指揮官たち、農村を支援中の部隊の指揮官たちすべてが、中隊に急遽集合した。

　現地で非常呼集の理由を知った指揮官たちは、中隊を参観して大きな感銘を受けるとともに、深い自責の念にかられ、新たな決意を固めた。

「正直に話してみなさい」

　2001年6月25日、ある人民軍部隊を訪れ、女性軍人たちの訓練を見た金正日総書記は彼女たちを身近に呼んだ。

　名前はなんと言うのか、故郷はどこか、身長はいくらかといちいち尋ね、女性軍人たちの体格はよいが背が低いと言った総書記は一軍人に聞いた。

　「入隊したのは何年度かね」

　「1998年の春、平壌で入隊しました」

　「1998年度に入隊したのなら、米が最も不足していた96年度と97年度には家庭にいたわけだ」

「そうです、将軍」

「米がなくて苦労したろうね」

女性兵士はうつむいて、返答をためらった。

「家にいたとき飢えに苦しんだこともあったろうが」

「将軍、飢えたことは……ありません」

「君は故郷が平壌だから少しはよかったろう。しかし、平壌の住民も『苦難の行軍』期には食糧の打撃を少なからず受けた。当時誰もがみなひどい飢餓にもめげず社会主義を守り抜いたものだ」

帝国主義者の反共和国孤立圧殺策動と経済封鎖の中で社会主義を守っていた「苦難の行軍」の日々を振り返ってか、しばらく口をつぐんでいた総書記は、やがて今一人の女性軍人に目を向けた。

「君はいつ入隊したのかね」

「1998年4月です」

「98年度の入隊なら、君も『苦難の行軍』を経験したわけだ」

「はい」

「家にいた時飢えたこともあったろうね」

「飢えたことは……ありません」

「いや、お米がなくて何度食事を欠かしたか？

正直に言ってみなさい」

「飢えたことはなく……お粥で……飢えをしのいだことはたびたびありました」

「お粥で飢えをしのいだとね。お米はどこで手に入れたのかね」

「母が市で……ふっ……」

「泣くなんて、泣くんじゃない」

総書記は高ぶる感情を抑えて随員たちを振り向いた。

「地方の子たちが飢えなかったなど論外だ。

この軍人たちは私に心配をかけまいとして飢えはしなかったと言っているのだ。当時朝鮮人は誰もが草粥で飢えをしのいだのだからね」

あたりにむせび泣く声が満ちた。

一女性軍人が、気をしずめて言った。

「あの頃、私たちより、将軍がとても苦労をなさいました。将軍が人民と分け隔てなくお粥をおすすりになりながら『苦難の行軍』を勝利へお導きなさったことを私たちはちゃんと存じています。私たちは決してそのことを忘れません」

総書記は涙にうるんだ目を彼女に向けた。

「ところで、軍隊に入ってからも飢えたことはあるのかね」

「ありません」

「今はどうかね？　いいかい」

「本当に素晴しいです。将軍のご配慮で、私たち兵士は空腹も寒さも知らず、軍務に励んでいます。ただ将軍さえご健康ならば、それに越したことはありません」

「有難う」

こう言って彼女の肩を叩いた総書記は、随員たちを振り向いた。

「われわれが『苦難の行軍』に際して、育ち盛りの子たちに満足な食べ物を与えることができず、そのためにこの兵士たちは丈が伸びなかった。当時のことを思うと今も胸が痛みます」

随員たちは、こみあげる激情を抑えていた。総書記は部隊指揮

官たちに向き直った。

「諸君は私の意図を違えずに、軍人たちの生活を父母と同じ心情で世話しなければなりません。

……

わが軍人たちは、故郷と父母のもとを遠く離れた祖国防衛の持ち場で、夢の多い青春時代を銃と共に黙々と送っている真の革命戦士たちです。

軍人たちの生活の世話を焼くのは、指揮官の当然の本分であり、信義です。

私がいつも強調していることですが、指揮官たちは自分たちが温かく満腹している時も、兵士たちは寒く、空腹を覚えてはいないだろうかと気を配り、兵士たちの生活に十分に心を致すことです」

特異な報告システム

2002年3月1日、人民軍部隊のある女性中隊を視察した金正日総書記は、三つ子の女性兵士たちに会い、微笑して名を聞いた。

「尹黄玉（ユンファンオク）です」

「尹金玉（ユングムオク）です」

「尹山玉（ユンサンオク）です」

総書記は、三つ子の姓名の中の字を合わせると「黄金山」となる、名を意味深く付けたものだと言って、ほほえんだ。

彼女たちの故郷は平安南道（ピョンアン）陽徳（ヤンドク）郡の山里で、金日成主席が祖

国の解放後黄金山の新しい歴史を開くべく指導した、深いいわれのこもる土地であった。彼女たちの両親は、伝説のような山の名の由来を孫子たちに長く伝えたくて、三つ子の名を考え出したのであった。

彼女たちの名を聞いて、両親の心情をおしはかった総書記は、入隊はいつしたのか、両親は何をしているのかと質問し、**「君たちは平壌産院で生まれたのだね」**と言った。

「そうです」

「金指輪はもらったの？」

「はい」

三つ子の出産のためには飛行機も送り、補薬も与え、出生記念に女の子には金指輪、男の子には銀粧刀を贈ってくださる総書記の恩情を思って、彼女たちは目をうるませた。

総書記は、両親が軍隊に送り出し、りりしく成長したわが子たちの姿を見たらとても喜ぶだろうとして、軍務はきつくないか、きつくないわけがあろうか、きつくても我慢してきっと耐え抜くだろうと言って、頼もしそうに彼女たちを見やった。

そして、父母の身長はいくらか、君たちは誰に似ているのかと聞いた。

「二番目の金玉は母、3番目の山玉は父、それに私は父と母に半分ずつ似ています」

総書記は豪快に笑った。

「この三つ子はまだ年がいっていないし、両親がともに背が高いから、今にもっと大きくなるだろう」

こう言って総書記は、毎年彼女たちがどれほど大きくなったかを私に報告しなさいと指示した。

「分かりました」と答える人民軍指揮官のあとに続いて、「父なる将軍！……」と叫んだ三つ子の女兵士たちは、みな喉をつまらせた。目からは涙があふれ落ちていた。

こうしてその後、三つ子女兵士たちの身体の成長に関する資料が毎年最高司令部に報告されるという特異なシステムが生まれた。

解かれた処分

３回催促して受けた報告　人民軍部隊の視察を続けていた金正日総書記は、2002年12月18日、ある部隊の訓練を見て、軍人たちの肉体的負担がどうにも大きいと思えてならなかった。

訓練を見たあと、兵舎と食堂を見て歩いた総書記は、区分隊指揮官に、軍人たちに何が十分に供給されていないのかと質問した。

供給はすべて十分になされているという指揮官の返答に、総書記はかたわらの部隊長に、部隊に不足しているのは何かと再び質問した。

「最高司令官同志の配慮で、すべての物資が十分に供給されているので、不足しているものはありません」

総書記は納得がゆかずに、反問した。

「どうして何も不足していないと言うのです。

私に心配をかけまいとしてそんなふうに答えているようだが、

ためらわずに難渋している問題を一切合切話しなさい」

３回も同じ質問を繰り返す総書記に向かって、部隊長は言いづらそうに報告した。

「部隊が副業を等閑に付したせいで、軍人たちに肉類を満足に供給できずにいます」

総書記は、さっき見た軍人たちの訓練は強度がかなり高い、それだけに肉類の供給を欠かすべきでない、軍人は訓練を一度行えばアヒル一羽を丸ごと食べても満足しないだろうにとつぶやき、部隊に肉類を送ろう、ところで、ニワトリとアヒルの肉のどちらがいいだろうかと部隊長に尋ねた。アヒルの肉の方がいいという答えに、そう、アヒルの肉は養分が多く、味もよい、部隊長がやっとの思いで言ったことだから、軍人たちの食卓に肉類が上がるよう自分がはからうと約束した。

引き返してきたわけ　総書記を見送ったあと、部隊では指揮官も兵士たちも総書記の話で時間が経つのを忘れていた。12月の短い日は早くも山の向こうに沈んでいた。

そんな時、外でにわかにクラクションの音がし、１台の車が指揮部の建物の前に止まった。

何事かと外へ出た指揮官たちは、わが目を疑った。

車から降りたのは、数時間前総書記とともに出発した上級の責任幹部だったのである。

彼はどうしたのかと怪しむ指揮官たちに、こんなことを話した。

先程当部隊の視察を終えてある地点へ来た総書記は、随員たち

にこう語った。

——私が今日の視察で何よりもうれしかったことは、彼ら部隊指揮官たちが以前処分を受けたことでも落胆せず、奮起して軍務に励んでいることだ。彼らが気落ちして軍務に消極的になっていると心配したが、戦闘準備態勢の完成に大いに努め、部隊の管理でも実に多くのことをやった。……

一幹部が立ち上がって報告した。

「最高司令官同志、今、部隊の指揮官たちは、以前軍務怠慢で処分された自分たちを、最高司令官同志がお越しになって激励して下さるとは夢想だにできなかった光栄だとして、ただただ感激にひたっています」

しばらくおし黙っていた総書記は再び口を開き、彼らはまだ処分を解かれていない、諸君は彼ら指揮官たちが特別軍務に励んでいると知っていたなら、当然赦免を上申すべきであった、私は明日部隊の軍人たちに肉類など食料品その他多くの贈り物をしたいのだが、部隊指揮官たちが処分を解かれていない状態で贈り物を受けることになれば、つらい思いをするだろうとして、**「処分を解かれていない彼らが肉のスープをたっぷり作り、兵士たちとテーブルを共にしても、気が引けて箸も取れないだろう」**、とかすれた声で言った。

しばらく何事か考えていた総書記は、新年も真近いのだから、指揮官たちが家族たちと一緒に楽しい気分で正月元旦を迎えるようにすべきだと語った。

幹部たちはえりを正して総書記の次の言葉を待った。

やがて総書記は力をこめて言った。

——戦闘準備態勢を完成し、部隊の管理で模範を示した当地部隊の指揮官たちを赦免し、従前の軍事称号を授けることだ。君たちはしばらく私と行を共にできなくても直ちに引き返して部隊指揮官たちに私の言葉を伝え、従前の軍事称号を授けるべきだ。……

「分かりました。最高司令官同志のお言葉通り、当地部隊の指揮官たちの処分を解き、従前の称号を授けるということを伝えます」

こうして一人の責任幹部が部隊に引き返してきたのであった。

撮れなかった写真

吹雪が荒れていた2003年1月23日、夜がまだ明けやらぬ前に金正日総書記の野戦乗用車が最前線某部隊の前方指揮所に到着した。

急な知らせで前方指揮所に駆けつけた部隊の指揮官たちは驚いた。総書記が随行者も伴わずに現れたのである。……

数時間前、執務室で夜を明かした総書記は、一幹部を呼び、最前線の某陣地へ行くから急いで準備するようにと指示した。

彼は直ちに出発の手配を進めたが、カメラマンに知らせる余裕はなかった。総書記の現地視察の一歩一歩の記録が、総書記の革命活動史の編纂がいかに重要であるかを知り尽くしている彼は、いらいらした。

そんな彼の焦燥の色を見てとった総書記は、前線の兵士たちが待っている、随行者とカメラマンはあとを追ってくるようにすればよいと言い残して、そのまま出発したのである。前線部隊の指揮官たちはそんなことを知るよしがなかった。

驚き茫然としている彼らに、総書記は他の人たちはすぐにやってくる、われわれだけが先に前方指揮所を視察しようと言って歩き出した。

高地の頂で総書記は、広大な防御前線を見渡して部隊長の状況報告に耳を傾け、地形地物や兵力の配置状態を一つひとつ確認した。

かなりの時間の経過後、総書記は、では兵士たちに会うことにしようと言って、高地を下りた。

随行者たちやカメラマンが到着したのはその時だった。

幹部たちは総書記に、たとえわずかな時間でも今一度前方指揮所へお上がりになってはと懇請した。

総書記は大様に笑い、写真を撮れなかったために、そんなことを言っているのだろうが、それはどうでもよい、として、**「兵士たちが待っています。写真は兵士たちも加えみんなで一緒に撮りましょう」**と言った。

総書記が最前方高地の指揮所に立った先軍長征の一ページ——そのページには、惜しくも歴史の記録で空白を残すことになった。

誰のおかげか

国が「苦難の行軍」、強行軍の痛手からまだ完全に立ち直っていなかった頃のことで、西海岸のある農村においても電気はほとんど入っていなかった。

ところがこの村の家々に思いがけなくも電灯が点った。近くの人民軍部隊が風力発電所を建設し、電気の一部を農村に送ったのである。

「人民軍のおかげで電灯が点った！」　村人たちは大喜びして軍隊を誉めそやした。

ところで、村に電気が入ったのには、次のようないきさつがあった。

2004年2月3日、金正日総書記が当部隊を視察した時のことである。

総書記は部隊が建設した風力発電所を見ようと言って、指揮部の裏の険しい山の頂に登った。

高地の尾根伝いに数十メートル間隔で立ち並ぶ風力発電機は、まわりの景勝と調和し、風車の高さと羽根も壮大でなかなかの景観であった。

「風力発電機が大変に大きい。壮観です」

総書記は、勢いよく回転する羽根を眺めてたいそう喜び、ここで生産される電気はどう使っているのかと聞いた。

「部隊指揮部と直属中隊、指揮部の軍官と軍属の家庭に送って

います」

部隊指揮官の説明に総書記は、直属中隊も電気暖房を行っているのは結構なことだとたたえ、部隊の近くの山麓に並ぶ農村に目を向けた。

「あれらの住家には電気がどれだけ入っていますか」

総書記は誰ともなく質問した。

部隊の幹部たちはもじもじした。

そんな彼らの気持ちを察した総書記は、風力発電機で生産した電気を駐屯地域の住民にも送るべきだ、指揮部軍官の住宅地域と農村住宅地域が一本の道路で分かたれ、夜軍官たちの住宅地域はあかあかとし、農村の住宅地域は暗闇に包まれていることであろう、この対照的な現象を見て、人民はなんと考えるだろうかとして、こう続けた。

「人民たちに、今度われわれは風力発電所を建設したが、電気の生産量はあまり多くない、しかし少ないながらに電気を一緒に使おうと持ちかければ、人民は、われわれの人民軍は確かに違う、軍隊のおかげで電気が入ることになったと言って喜ぶだろうし、この物語は伝説のように後の世まで伝えられるだろう」

指揮官たちは胸を熱くしながらも、どうして自分たちは人民のことを考えなかったのかと、深い自責を覚えた。

こうして農村の住宅地域にも電気が入ることになったのである。感謝する農場員たちに、部隊の軍人たちはことのいきさつを話し、こう強調するのであった。

「だから軍隊のおかげではなく、わが将軍のおかげです」

「スリーポイント部隊長」

2007年11月27日、人民軍のある部隊を視察した金正日総書記は、軍人会館の廊下に掲示された部隊の沿革史に注意深い視線を向けた。

部隊政治幹部がそこに掲示されている部隊長の写真を指し、部隊長同志は、10年前、将軍が軍事大学を現地指導された際学生たちのバスケットボール試合を観覧し、途中「スリーポイント」と叫ぶと、たちどころにスリーポイントフィールドゴールを成功させた人ですと説明した。

総書記はたいそう喜び、当時のことを感慨深く回想した。

10年前のある日、軍事大学では、〝城塞〟と〝盾〟の二チームが試合を行ったが、総書記を迎えて激戦が展開された。

プレー開始５秒後〝城塞〟チームが先取点を上げ、試合は白熱した。

〝盾〟チームにいた部隊長がボールをつかんだ時、**「スリーポイント、スリーポイントを決めろ」**と、総書記の大声が響いた。

当時彼の立っていた位置はバスケットからかなり離れていた。これまでそんな遠くからスリーポイントを上げた例はなかったが、総書記の声援に力を得て、思い切りよくバスケットめがけてボールを投げた。

驚くなかれ、高だかと飛翔したボールがバスケットにすっぽりと入ったのである。

「やった、よくやった」

総書記は手を叩いて喝采した。……

当時を思い浮かべて総書記は、10年前の学生が今は部隊長になっているのだねと、明るく笑った。

隊内の視察を終えた総書記は、部隊が思想教育も、飛行訓練も、部隊の管理と給養活動も立派に行っているとして大いに満足した。

いよいよ部隊と別れることになった総書記は、歩みを止めて振り向いた。

「スリーポイント部隊長」

「はい」

「その年ならバスケットボールをまだまだやれるだろう」

「分かりました」

「元気で軍務に励むのです」

真っ先に見る権利

大同門（テドンムン）映画館の改築工事が終わった直後、新しい映画館で真っ先に映画を見ようと集まった平壌市民で、映画館の前は黒山の人だかりであった。切符を手に入れるのはとてものことでないと、みんなが思っている時、元気のよい足どりで行進してきた軍隊が立ち止まり、映画館の前に整列した。人々は何事だろうかと目を

見張った。

2008年8月2日。党中央委員会の幹部たちに会って改築なった大同門映画館の運営状況を確かめていた金正日総書記は、映画は映画館で見てこそ見ごたえがある、観覧の優先権は誰に与えたものだろうか、計画は立っているのかと尋ねた。

平壌市内の労働者と幹部、アーチストなど切符の優先配当対象者は各階層にわたっていた。ところが、そこには改築工事で汗を流した軍人たちが含まれていなかった。

総書記は遺憾にたえないという面持ちで、新しい何かを建設すれば、まずその建設者たちが利用するようはかるべきではないかとし、かなり以前にあった事実を話した。

1970年代に平壌地下鉄が竣工した時、地下鉄の建設状況を視察した金日成主席は、地下鉄を建設した軍人たちが電車に乗ってみただろうかと尋ねた。

軍人たちはまだ地下鉄に乗っていないという返答に、主席は、その間軍人たちは地下鉄の建設で苦労が大きかった、だから電車には誰よりも先に彼らを乗せてしかるべきだとして、2日間彼らが先に乗ってみるよう優先権を与えたのであった。

総書記は、海州（ヘジュ）——下聖（ハソン）間の鉄道を敷設して竣工式を行ったあと、真っ先に列車に乗ったのは鉄道を建設した青年建設者たちであり、北部鉄道を敷設し開通式が行われたあとも、鉄道を敷設した青年建設者たちが先に列車に乗ってみるようにしたものだとしてこう続けた。

ある対象の建設が終われば、建設を担当した建設者たちがまず

利用するようはからうのは当然なことであり、まさにそうすることが人民的な政治です。

続けて総書記は、ところが最近われわれの幹部たちはそんなことに関心を払っていない、大同門映画館の改築工事にあたった軍人たちがこうした現代的な映画館で映画を見たことはないだろうから、彼らに真っ先に映画を観覧させる措置を講ずるべきだ、映画は一度に1000名ずつ観覧できるのだから、何回かに分けて、軍人たちがみんな先に映画を見るようにすることだ、軍人たちには戦闘的な映画を選んで見せるがよいだろうと、誰も考え及んでいない点まで指摘した。

こうして立派に改築された大同門映画館で、軍人建設者たちは真っ先に映画を見る権利を与えられ、軍隊が映画館にやってきたのである。

3　献身の足跡

生硬な娘がつられて笑った

1964年1月6日、一心に録音を取っていた朝鮮劇映画撮影所の新入りの若い娘録音係は、人の気配に振り向いた。

見知らぬ青年が録音室に足を踏み入れていた。娘は、誰かしらと思いながら、目礼した。

「映画音楽の録音を取らせていただきたくてお伺いしたのですが」

「録音は許可なしには……」

娘は丁重に答えた。

「あ、なるほど。許可をもらってこいということですね。いや、そんなこともわきまえずについ、どうも失礼しました」

「あの一、そういうきまりになっていますので……」

「そりゃ当然でしょう。うっかり失念しました」

青年がこう言って引き返そうとした時、所の幹部たちが急ぎ足でやってきた。金正日総書記がお出でになったと知らされて、あわてて駆けつけたのである。

彼らと挨拶を交わした総書記は、今あった出来事を話した。彼らは舌打ちし、娘をねめつけた。彼女は真っ赤になり、おろおろした。

総書記は、そんな娘の気持ちを笑顔でなごませながら言った。

「私は今日、とんだ失策をしでかすところだった。そんなことはまるで念頭にもなかったのですからね。娘さんが注意してくれなかったら、私もこの娘さんも所の規定を破ってしまったことでしょうな」

幹部たちはほっとして笑い、娘もつられて、くすっと笑った。こうして、室内のこわばった雰囲気は、春の雪のようにたちどころに消えてしまった。

技術者の感嘆

1967年1月5日午後遅く、金正日総書記は首都のある養鶏場を訪れた。

すでに日が沈み、あたりが薄闇に包まれたたそがれ時で、ニワトリはみな止まり木にとまってうとうとしていた。床の餌箱には、餌が少なからず残っている。

総書記は、ニワトリたちがなぜ餌を食べ残しているのかと、養鶏技師に尋ねた。

「ニワトリは暗くなると、餌があっても残して、止まり木に上がって眠ります」

総書記は、今一度尋ねた。

では、なぜ鶏舎に明かりを点けないのです。

（鶏舎に明かりを？……）

技術者は首をかしげた。

総書記は、夏の蒸し暑い夜、農村の家々ではうるさい蚊に悩まされまいと、軒に電灯を吊るし、庭先にはヨモギの蚊やり火を焚いて、家族の者みんながそのまわりに車座になり、縄をなったり、四方山話に花を咲かせたりするが、他方、ニワトリたちは明るい庭のあちこちで夜遅くまで熱心に餌を突っついているという、ニワトリのそんな習性を利用すれば、肥育を早めることができる、と言い、こう続けた。

夜、鶏舎に明かりをつけて餌を与えると、ニワトリたちは夕方早くから止まり木に上がろうなどとはせず、ずっと餌を食べるでしょう。そうしたらニワトリの成育を促せることになります。これは別して手間のかかることではありませんから、ちょっと関心さえ払えば、いくらでも実行できます。

技術者は、総書記の言葉どおりにして、ニワトリの肥育状態を観察した。すると、63日齢のニワトリの体重が従前より600～800グラムも増えているのである。彼は膝を打って嘆声を発した。

実行不能な厳命

1975年8月4日、一幹部が金正日総書記に呼ばれた。執務室に足を踏み入れた彼は、思わず緊張した。総書記の怒気を含んだ目が自分をにらんでいるのである。こんなことはついぞ経験したことのない彼であった。

続いて、行事や集会のたびに私の歌を歌っているということは本当ですか、という総書記の厳しい声が部屋中に響いた。

彼は返答に窮した。

当時、『親愛な金正日同志の歌』をはじめ、総書記をたたえる歌が創作され始めていたが、それらの歌はたちまちのうちに全国に流行して、老いも若きも、幼い子どもたちも喜んで愛唱し、行事などの際は、『金日成将軍の歌』とともに総書記をたたえる歌も歌わされていたのである。

総書記はそのことを知って、彼を呼んだのであった。

「私は君に、一切の行事と集会では『金日成将軍の歌』だけを歌うようにと指示しているが、それが一向に守られていないのだ。

君は、幹部が行事のたびに気ままに私の歌を歌わせるようなことを二度としないようにし、そんなことを企画した者が出たら処罰せよと指示したにもかかわらず、自分の一存で黙殺してしまった。……君が私の指示を好き勝手に解釈して、実行をさぼったのはよくありません」

こう叱責した総書記は、今後は無条件歌えないようにすることだと厳しく指示した。

彼は、こうなったからには事情をありのままに説明して、了解を得るほかないと思った。

「指導者同志、人民が心の底から喜んで歌っているものを、私がどうやって禁止することができましょうか。私には歌を禁止する措置を講じるだけの才幹がありません。それに、たとえなんらかの措置を講じたとしても、人民は絶対に受け入れないでしょう」

「何と言ってるんです」

総書記はきっとなって、自分の最大の念願は金日成同志をたたえる歌声が国中にみなぎるようにすることだけだ、私の歌は絶対に歌えないようにしなさいと厳命し、こう続けた。

「今後、会議や行事の際は他の歌は歌わず、『金日成将軍の歌』だけを歌うようにすることです。私の指示を再び違えたら、君を解任するほかない」

総書記は、自分と一緒に最後まで革命を行うつもりならば、指示を無条件実行しなさい、手の施しようがなくなる前に、直ちに必要な措置を講じることです、と厳しく命じた。

彼は執務室を辞して街路へ出た。たまたまその時、一団の児童が列をなして歩きながら元気よく歌っていた。

白頭の気象一身に抱き
朝鮮の空に輝く日ざし
革命の赤旗を高だかと
チュチェの祖国輝かす
ああ　親愛なる指導者同志
その名輝け金正日同志
……

彼は歩みを止めて考えた。

（心の底から湧き出るあの歌を禁止する？　いかなる方法をもってそんな指示が実行できようか）

チトーの驚嘆

1976年4月13日、ユーゴスラビア（当時）訪問を終えて帰った外交使節が、金正日総書記に帰朝報告を行った。報告はやがて、対談の形に移った。

彼は、チトー大統領と会見した際、気位の高いことで有名なチトーが一連の国際情勢と朝鮮問題に関する独自の見解を述べたあと、「朝鮮は自主性が強いので私の気に入っている。それで私は、強力な自主政治を展開している朝鮮の金日成同志を尊敬しているのです」と語ったことを話した。総書記はたいそう満足して言った。

「今日、われわれの時代は自主性の時代です。世界の多くの国が自主の道へと進んでいます。いかなる国であれ、大国のタクトで踊っていれば、そんな国は現代版植民地に転落します」

「現代版植民地ですか」

驚く彼を見やって総書記は、こう続けた。

――政治的従僕は別途に存在するのではない。他人の精神をもって生き、他人の言いなりになるものは誰であれ、みじめな政治的従僕にすぎない。大国の間に挟まっているわが国の場合、自主性を守ることはとりわけ重要だ。自主性は国と民族の生命である。金日成同志が早くから教えているように、われわれ朝鮮人にはソ連の衣服も合わず、アメリカの衣服も似合わない。われわれ朝鮮人には朝鮮の衣服が一番ぴったりしている。わが国はたとえ大

きくはなくても、大国のいかなる圧力にも屈せず、自らの決心をもって政治を行い、大国の顔色をうかがうことなく、自己の意思を堂々と主張している。だから、世人が感嘆するほかない。チトー大統領もほかならぬわれわれのこの自主の政治が気に入っているのだ。……

「そうです。非同盟運動を主唱した一人であると自負するチトーではありますが、そんな彼も、わが国の強力な自主性には驚嘆しているのです」

「私は、国と民族の自主性を生命よりも重んじています。万一、われわれの中に自主性に背を向ける者がいるとしたら、そういうやからはチュチェ思想を否定する売国奴です。自主性を守る道こそが愛国の道です。チュチェ思想の祖国では、自主性が精神的な柱です」

「ブルジョア政客たちも、自主性の強力な政治家の典型は朝鮮に存在するとたたえています」

「偉大なチュチェ思想の核は自主性です。自主性——ほかならぬここにわが民族の尊厳と繁栄があり、国の統一もあるのです」

通訳と支配人のミス

中国を訪問していた金正日総書記は、1983年6月7日、上海市のある缶詰食品工場を訪れた。

工場の一幹部から滅菌消毒工程の説明を受けていた総書記は、

食品工場では滅菌消毒がとりわけ重要だが、当工場では缶の滅菌消毒をどう行っているのかと尋ねた。

「セ氏120度で８分間消毒します」

「セ氏120度？」

総書記は首をかしげて、「それより４～５度は高くなければいかんのだが……」と独りごちた。

あわてた通訳は、工場幹部に温度が何度だったのかと聞き直し、顔を赤らめて前言を訂正した。

「わたしの通訳にミスがありました。温度はセ氏124度だとのことです」

機械の騒音で説明を聞き違え、ミスをしたのであった。

総書記はうなずいて、そう、セ氏124度で８分間なら十分に消毒されるだろう、と言った。

そんなやりとりを聞いていた随員たちは、数日前青島ビール工場を訪れた際にあったことが思い浮かんだ。

その日総書記は、ビール缶の内壁にはどんな防腐剤が使われているのか、防腐剤を使うとビールの味が変わらないだろうかと、支配人に尋ねた。

専門家が行うような質問を矢つぎばやに浴びせられてややあわて気味になっていた支配人はつい、ビールの味は変わらないと答えてしまった。総書記は、本当にそうかと聞き返した。

支配人は自分のミスに気づいて、てれくさそうに笑いながら前言を取り消した。

「実は、ビールの味がちょっとばかり変わります。今わが工場

では、解決に努めています」

総書記は豪快に笑った。

黄州川のほとりで

1987年9月28日、現地指導の道すがら、金正日総書記が自郡の黄州（ファンジュ）川に魚を捕りに寄るという通知を受けた郡幹部は、急ぎ魚網や釣竿などを用意して郡境の川辺へ向かった。

待つほどもなく、数台の車が出迎え人たちの前に止まり、総書記が明るい笑顔を浮かべて乗用車から降り立った。

両手を腰に当てて緑の濃い山のふもとを巡って悠々と流れる黄州川を眺めた総書記は、**「黄州川の水はいつ見てもきれいに澄んでいる」**とつぶやいた。

郡幹部の気持ちはこの上なく晴れ晴れとしていた。

現地指導を休みなく続ける総書記を、いつになったらゆったりとした環境の中でお迎えできるだろうかと念願し、その日の到来を心待ちにしていたのである。

彼は急いで、用意して来た魚網と釣竿を取り出した。

「漁具が仰山なのを見ると、魚があまりいないようですな」

こうジョークを飛ばして笑った総書記は、今もこの川にはコイが多いだろうかと尋ねた。

「はい、ずいぶんといます」

うなずいた総書記は、実は最近、平壌（ピョンヤン）に規模の大きいコイの養

魚場がつくられたのだが、それには優れた雌ゴイがあまりないということだった、それで途中この川のことが思い出されて寄ってみたのだと言った。

「……」

しばしの休息が目的で来られたと思ったのだったが、総書記は開設間もない養魚場に入れる雌ゴイを手に入れるべく、数十キロもの回り道をして訪ねて来たのである。

「そのことでしたらご心配なさらずに、きょうはゆっくりおくつろぎになって下さい。わたくしどもが雌ゴイをどっさり捕って平壌へ送ります」

総書記は、当地の住民に迷惑をかけることはない、人民のためのことだから、われわれがやってしかるべきです、と謝絶した。そして随員たちに向き直り、魚を捕る際、魚を傷つけないようにするにはどうしたらよいかをいちいち教え、きょうは私が検閲官になると言った。

随員たちは投網やすくい網を持って、三々五々散って行った。

郡幹部は総書記に、ここに釣竿もありますから、しばらく釣りを楽しみながら休むようにと勧めた。

総書記は、今日私は検閲官です、検閲官が魚を釣っていてはおかしい、それはともかく、われわれは久しぶりに会ったのですから、少し話でもしましょうと言い、彼と並んで川辺を歩きながら長いこと郡の活動状況を聞き、助言を与えもした。

そうこうするうちに時間がかなり流れ、思い思いに散っていた随員たちが多くの魚を捕って戻って来た。

そのうち成績があまりよくなかった随員に向かって、総書記はどんな場所に網を打ったのかと聞いた。
彼は、水の流れはちょっと速いが、かなり深くて澄んだあの下流のあたりに網を打ったと答えた。総書記は、捕ったコイの数が多くないので聞いてみたのだが、そうだろうと思った、コイは川底のあたりに棲む魚だから、網が底まで届かないとあまり捕れない、それに、コイは水の流れがゆるく、底に泥が多いいくぶん濁った水を好む習性がある、と教えた。
雌ゴイを選り分ける時のこと。
捕った魚を入れた水溜りには、さまざまの魚が所狭しと群れていた。それらの魚を満足して眺めていた総書記は、数人の随員に、中へ入って魚が傷つかないよう注意してコイを選び出すようにと言った。
直ちに彼らは水溜りに入って行った。ところで彼らはみな申し合わせたようにまごまごした。
そんな様子を見た総書記は、彼らにはコイとフナの見分けがはっきりつかないようだ、と言って豪快に笑い、その識別法を教えた。
コイを選び終わった時、郡幹部は、美味な魚を別途に選んで総書記に差し上げたいと言った。
「誠意は有難く思います。けれども私はちょっと違ったことを考えています」
こう言った総書記は、そっちの魚は郡営の寄宿舎に贈ることにしよう、寄宿舎生活をしていると、いつも何かを口にしたいという思いにとらわれるものだ、だから魚のスープが食卓に上がった

ら大喜びするだろう、それからあちらの魚はみな光復（クァンボク）通りの建設者たちに贈ろう、光復通りの建設者たちの苦労はさぞかし大きいことだろうとして、こう言葉を結んだ。

「そうしたら、きょうわれわれがここへ来た意義は一段と大きくなるでしょう」

未来に向けた政治

準戦時状態の緊張が尾を引いていた1993年3月30日、拡張なった松濤園（ソンドウォン）国際少年団野営所を視察した金正日総書記は、見違えるほど変貌した野営所の全景を見渡して、ここは位置もよく、外部形成の様相も優れて、見るほどに素晴しい、と満足した。

明るい瞳が曇ってはと　総書記は新築の野営閣に案内された。

家具備品や床、天井、トイレなどを見て歩いていた総書記は、どの部屋もホテルのそれに劣らない、ベッドなどの家具備品はもとより、トイレの設備に至るまでどれを見ても申し分がない、として手放しで喜んだ。

やがて野営閣と食堂を結ぶ渡り廊下へ出た総書記は、窓外にうっそうとした松林の周辺に並ぶ施設を見て、あれは何かと聞いた。

それは、すぐる1960年代末、米軍の情報収集艦「プエブロ」号拿捕事件による一触即発の危機に対処して構築された防御施設であった。

それまでかなりの幹部が野営所を訪れていたが、この施設に注意を向けた人はほとんどなく、一部それと知った幹部も、国の緊張が今なお続いている実情では、そこに軍事施設があるのはやむを得ないことだと判断していた。

ところが総書記はたちどころに、野営所構内にそんな軍事施設があるのは面白くないから、すぐ撤去するようにと指示した。

キャンプ生活を楽しむ子供たちがそれと知って、たとえ瞬時ではあっても不安に駆られ、明るい瞳が曇るようなことがあってはという深い配慮が、そこにこもっていたのである。

惜しいことはない　食堂の調理室では、設備を一つひとつ注意深く見、アイスクリーム製造機を新型のものと取り換えるよう指示もし、バースデーパーティー用食堂では、野営所で誕生日を迎える子供たちを祝い、写真も撮ってあげるとみな喜ぶだろう、と満足して語った総書記は、円形食堂では、今回の野営所改築工事にどれだけの費用が投じられたのかと尋ねた。

「……**私が決心して子供たちに贈ることになった少年団野営所ですから、何も惜しむことはありません**」と言った総書記はこう続けた。

――私は、４万平方メートルもの近代的な大型少年団野営所を子供たちにプレゼントできるようになってとてもうれしい。松涛園国際少年団野営所は、わが党が子供たちに贈る愛のキャンプです。おそらく社会主義が挫折した国や資本主義国では、松涛園国際少年団野営所のような素晴しい施設を子供たちにプレゼント

することなど、想像もできないでしょう。これはひとえに、未来に向けた政治を展開するわが国においてのみ可能なことです。……

総書記はこう言って、キャンプ生活の組織に誠意を尽くし、すべての子供たちが一度はここへ来たいと熱望するようはかるべきだと強調した。

愛の限界は？　キャンプ生活中には金剛山(クムガン)や馬息嶺(マシク)へも行って見ることになろうが、そこではテント生活もし、登山も楽しめるようにしなければならない。それに野営所担当の協同農場や水産協同組合をつくり、子供たちの食卓に肉類や卵、水産物を欠かさず乗せるようにすることだ。金剛山とクァイル郡にも中央少年団野営所を設け、各道にも近代的な少年団野営所をつくろう。……

こう話しながら新築の会館、電子娯楽室、各種サークル活動室、海洋知識普及室を見て歩いた総書記は、ここに水族館を建てるとなれば費用がどれほどつくか見積ってみるべきだと言った。そして、遊泳場にはプラスチックボート100隻を配備し、遊泳場わきの空き地には遊戯施設を設け、野営所の運用に必要な運輸手段も十分に備え、その修理場も建てるようにと指示した。また、党が松涛園国際少年団野営所を立派に建て直したのだから、社会主義労働青年同盟は管理運営に手抜かりがないように努め、青少年課外教育部門の幹部たちは、子供たちの年齢と心理に即したキャンプ生活が楽しめるよう綿密に手配すると共に、キャンプ生活の内

容を不断に更新し、わが党の愛と配慮が子供たちによりよく行き届くように努めなければならないと強調した。

野営所の視察を終えた総書記は、その足で前線視察の途についた。

次世代への総書記の愛には限度がなかった。だからこそ朝鮮の子供たちはもとより、大人たちもこんな歌を愛唱しているのである。

４月の春節にもわれらの将軍
戦地の兵士たち訪ね行く途次
キャンプに向かう子たち見て
車の窓から手をお振りになる
将軍は前線へ子たちはキャンプへ

将軍の前にはそそり立つ高地
子たちの前には日が昇る海原
………

総書記と人民

錦繍山(クムスサン)記念宮殿(当時)の開設を１日前にした1995年7月7日。

地下鉄駅から記念宮殿までの道路に沿った緑地は大勢の人で混み合っていた。錦繍山地区の一本の木、一ふさの花にも自分たちの真心がこもるようにと念じて集ってきた人たちである。

道路にちり一点があってもと、掃いてはまた掃く人たち。公園

の花樹に水をそそぎ枝を手入れし、芝生を整理する人たち。そこには年寄りもいれば、少年団ネクタイを結んだ子供たちや大学生もいた。

そんな時、記念宮殿の方から新敷設のレールに乗って一台の電車が走って来た。

なにげなく手を休めて電車に視線を向けた何人かの人たちの目がにわかに輝き、歓呼が上がった。

「将軍がお乗りになっている！」

「万歳！」「万歳！」

たちまち、走って来る電車に向かって人びとが駆け出た。

先頭を足の速い若者たちが、その後を女たちが、さらにその後を子供や年寄りたちが総書記の姿が映る車窓に目を向けながら、われがちに走った。

車内で随員たちとの談話に余念のなかった総書記は、それに気づいて腰を浮かし、車窓に向き直って手を振った。

懸命に走る人たちの目からは、とめどもなく涙が流れていた。

もういいから走るのではない、転んでは大変だ、と手をもって制したが、足元に何があるかは気にもとめず、総書記の姿にひきつけられて走っていた一少女が、花樹に足を取られて倒れた。けれども彼女はすぐに立ち上がり、またこぶしを握って走り出した。

電車はＵターン地点のすぐ手前で、歓呼する人たちに取り囲まれてとうとう停車してしまった。

もっと近くで、たとえ一瞬間でも総書記の姿を仰ぎ見たくて詰めかける群衆に向かって、一人の幹部が、総書記の多忙な時間を

奪わないでくれと、涙声で懇願した。
人びとはレールの外へと徐々に足を引き、やがて電車はUターンして記念宮殿の方へ向かって走り出した。それでも、人びとは電車を追って走った。
電車がスピードを上げ、人びとの姿は遠ざかっていったが、彼らの上げる歓声はなおもこだました。
総書記はいつまでも彼らに目を向けながら、かすれた声で言った。
「わが人民は実に素晴しい人民だ。
あのような人民と共に息づき活動していると思うと、革命をもっと立派に行わなければという決心が固まる」

つまらぬ心配

1997年10月21日、金正日総書記は新設なった松岩(ソンアム)明基牛牧場を視察した。
白衣をはおった総書記は牧舎の内部を見て歩き、牛にまぐさを与えながら言った。
「これら牛どものまるまるとした姿を見ていると、おのずと唾がわき、楽しい気分になる」
総書記は、この牛牧場は他の牧場と異なり、牛を牧草地に放牧することなく、牛舎内で集中的に肥育し、多くの肉を集約的に速く生産する優れた牧場だ、これでわが人民に美味な牛肉を提供できるようになった、としてすこぶる満足し、肥えた牛たちが首を

振り振りさかんに反芻している様子を見ながら、誰にともなく言った。

「以前は放牧を常としていたので、牛たちは牧童の笛の音を聞き慣れていたものですが、今は牛舎の中で飼育しているのだから、牧童の吹く笛の音はもはや聞けなくなりました」

牧童の笛の音は、長年放牧場の情趣の一つとされていた。家畜を追って歩きながら牧童が吹く笛の音は、彼らが山や谷を登り降りしながら流す汗と苦しい労働を牧歌的なメロディーで隠蔽したものだが、ここでは放牧を行わず、工業的方法で飼育しているのだから、笛の音はもはや聞かれなくなったのである。

始終満足した表情をたたえて牛舎内を見て歩いていた総書記は、一幹部の言葉を聞いて立ち止まった。

彼はずっと気にし考え続けていた、牛肉の生産コストを充当する問題について、総書記の意向を伺ったのである。

しばらく無言で彼を見つめていた総書記はやがて、そんなつまらぬ心配はする必要がない、われわれがいつ人民のためのことでそろばんをはじいたことがあったろうか、われわれは、人民のためとあれば何物をも惜しむべきでない、お金も人民のために必要であり、食肉も人民に提供するために生産するのだ、だから打算を先立たせるようなことはせず、食肉さえ十分に生産すればいい、と言った。

総書記は、金日成同志は生前、朝鮮人民に肉類や卵を十分に提供すべくずいぶん苦労なさった、われわれはなんとしても金日成同志の念願を叶えなければならない、この牛牧場の食

肉生産能力を倍増すべきだが、そのためには牛飼育の科学的研究を深め、食肉の生産速度を速める方途を見出さなければならない、と強調した。

自力更生が一番だ

1999年9月23日、金正日総書記は咸興（ハムフン）青年電気器具工場を現地指導した。

もっと価値あるものを　工場の箱組立て職場を経て一般器具職場に入った総書記は、組立て中の配電盤の前で足を止めた。支配人は、現在建設中のある中小型発電所で使うことになる配電盤と分電箱ですと説明した。

総書記の口元にかすかな笑みが浮かんだ。職場長はびくっとした。ごつごつして、誰が見ても出来の悪い配電盤本体のみすぼらしさを笑われたのでは、と思ったのである。

支配人は面白なさそうに、実は鋼板の不足で、古いドラム缶などを収集して本体を作っているので、こんな不細工なものになってしまいました、と消え入るような声で弁明した。

ところが総書記は、いや、そんなことで笑ったのではないと言って配電盤をためつすがめつ見たあと、配電盤の外形はきれいでなくてもいい、古いドラム缶を切断して作った配電盤と分電箱を見て、見かけがいいの悪いのとあげつらう必要はない、としてこう続けた。

「電気は発電機から生まれるのであって、配電盤や分電箱から生まれるのではありません。私は中小型発電所をものものしく建て、配電盤のような付帯設備などもぴかぴかのものを設置して得意がるのを好みません」

工場幹部たちはほっとした。

総書記は、ある工場に行ってみた時、ぴかぴかのものものしい輸入配電盤が取り付けられてあるのを見たが、それが故障で動作しないばかりか、予備の修理用パーツがなくて、いつ直せるか見込みも立たない状態だった、それで私は、なんといってもわれわれのものが一番だと今一度確信したものだったと言った。

ついで総書記は、組立て職場でも当工場製の非常電源安全器を見、その技術的特性を外国製品との比較で聞き、それならわれわれの物の方が優れているではないか、たとえ外形は輸入品のように見栄えはよくなくても、内容がよければそれまでだと言って喜んだ。

生と死の別れ目　工場を視察し大いに喜んだ総書記は、更に、組立て中のスイッチを手に取って見て、農村文化住宅などで炊飯する際、電気コンロに接続し、炊き上がったら飯を温めておくのにも使えるのだから、双子スイッチと名づければよいとし、農村文化住宅用に作られた電気炊飯器を見ては、われわれの物が一番だ、農村の実情にふさわしく立派に作った、舶来品がはだしで逃げ出すだろう、と重ねてたたえた。

喜びにひたる工場幹部たちを見回した総書記は、今後このよう

な優れた製品を大量生産して人民に提供することだ、私が工場を支援する、われわれが手を取り、確信をもってしゃれた電気製品を作ってみよう、と励ました。

ついで電気操作器具の製作現場で足を止め、労働者たちの作業を眺めていた総書記は、工場幹部たちを振り向き、去年ある機械工場に数百台の工作機械を生産する課題を与えたが、その際この工場がさまざまの障害にもめげず、電気操作器具を全量生産して送ってくれたので、工作機械がとどこおりなく生産できた、ところで今のような困難な時期にどうやって生産の正常化を果たしているのか、秘訣は何かと尋ねた。

思わぬ質問に、支配人は一瞬とまどったが、やがてぽつりぽつりと話し始めた。

——工場設備の購入交渉である国を訪れた際、法外な値を吹っかける相手側の傲慢無礼な態度が腹に据えかね、面談の席で、われわれは貴社の製品は買わないことにする、われわれは自分たちの手で設備一切を作って見せると、言ってのけた。すると彼らはやれるならやってみると言わんばかりにせせら笑った。それで民族の自尊心を汚さないためにも、自分たちの手できっと作らずにはおかないと腹を決めた。……

総書記は、よく言ってやりました、それこそ自力更生の革命精神です、他国に期待を掛けるのは亡国の道ですとして、「**自尊心のない人は死人と変わりがありません**」と力をこめて言った。

そういう精神さえあれば　工場の青年操作器具職場に据え付

けられた組立て台の前に立ち、ほぼ完成した工作機械用ボタンスイッチと端子ボードを手に取って動作させてみた総書記は、この工場で作ったボタンスイッチはきれいではないが、たいへん優れている、われわれの物が一番だ、と再び高い評価を与えた。そして、信頼性さえ保障されているなら問題になることはない、端子ボードも立派に作られていると言い、この端子ボードは何極のものかと尋ねた。

それは12極だが、現在工場では２極から50極までさまざまのものが作られており、注文に応じて製作しているとの説明に総書記は、逓信省など通信部門に多くの需要があるだろうとし、電気操作器具の信頼度はばねによって決まるが、それらはどこから入手しているのかと聞いた。専門家でないと出来ないような質問だったので、工場幹部たちは驚きの色を隠せなかった。

一幹部が、ばねは以前は輸入に頼っていたが、今は工場が遊休資材を掘り起こして加工し、充当していると答えた。総書記は、当工場にはそのための再加工場があるのかと、再び質問した。

ばねと言えば、何か簡単に作れるものと思えようが、実際は極めて難しい技術工程を経て完成される製品で、専門工場でもないこの工場で作っているというのがちょっと信じかねたのである。

「はい、みすぼらしい職場ですが、そこでスプリング鋼やピアノ線などを手に入れて来て細く伸ばし、それを更に熱処理して使っています」

総書記はこの上なく満足し、自力更生だけが生きる道だというスローガンはなんと素晴しいことか、と力をこめて言ったあと、

工場の責任幹部に向き直り、この工場では自力更生を大いに行っているが、いつからそうすることを決心したのかと聞いた。

「総書記が慈江(チャガン)道の諸工場を鑑として押し立て、全国がその範にならうように努めることだと強調されたお言葉を実行したにすぎません」

「だから、慈江道の諸工場を見学したというわけですね」

「そうです。そこでは実に多くのことを学びました」

「うむ…」

うなずいた総書記は、今日この工場へ来て力が湧いた、この工場ではここ何年かの間自力更生の革命精神を大いに発揮して、いろいろな製品を生産していると称賛して、こう言った。

「当工場の幹部たちのように、勝利を確信して取り組めば不可能というものがない。強盛大国の建設も問題でありません」

水が半分、魚が半分

2000年5月9日、金正日総書記は、新設なったあるナマズ工場を視察した。

この工場は、数万匹のナマズを円筒形池に入れて工業的方法、集約的方法をもって養殖する、現代的な施設を備えているとして、一般の養魚場とは違ってナマズ工場と名付けられているのである。

工場の施設を見渡した総書記は、ナマズ工場を労働党時代の味がするよう立派に建設したが、今に屋根を乗せ、周辺の整理を終

えれば、工場がいっぱしの招待所よりはるかに立派に見えるだろうとして、こう続けた。

「孵卵室がよくできています。この孵卵室は清潔な科学研究室のような趣です」

一幹部が、当工場では年に数百トンのナマズをわずか15名の家庭婦人の手で生産していると報告した。総書記は、なるほど、それはたいそうなことだ、と満足を表した。

円筒形の肥育養魚池では、この腕ほどものナマズがひしめいていた。一体水の方が多いのか魚の方が多いのか見分けがつかないほどである。随員たちは感に堪えず、やあ、やあと嘆声を上げた。

水と魚が所狭しとばかりに混ざり合っているその肥育池を一瞥した総書記は、「まさに水半分、魚半分です」と言って喜んだ。この表現に一同はまたまた嘆声を発した。水半分、魚半分という総書記の言葉は、ナマズの高い生産性を集約的に表現したものであった。

総書記は、肥育池が円筒形をなしているが、ナマズの養殖を集約化しうる秘訣はほかならぬここにある、ナマズは肥育速度が早く、飼料単位が低いうえ、高度に集約化して養殖できるために、生産性と収益性がことのほか高い、ナマズは美味で養分に富み、薬剤としても利用される、温水が豊富にある温泉地などでナマズの養殖を広く行うべきだ、と強調した。

水半分、魚半分、ナマズ養殖の集約化！

この表現はそれ以来、総書記の構想で広く始まった養魚法の標準を語るシンボリックな明言として、広く人びとの間で語られる

通用語となった。

祖国の統一史に長く残る「インタビュー」

歴史的な6・15共同宣言の発表後、南朝鮮のメディア代表団が平壌を訪問した。彼らはいずれも我こそはと自負する、南朝鮮ジャーナリストの「大立者」たちであった。

金正日総書記は、2000年8月12日、彼ら代表団に会った。

彼らが「衝撃的なインタビュー」として大書特筆することになる、接見席上での幾つかの逸話をここに紹介する。

一心団結と軍事力　談話の途中、総書記は身近にいたあるメディア社長に声を掛けた。

「ジャーナリスト生活を始めて何年ほどになりますか」

社長は質問の意図を分からず、「はい、数十年になります」と答えた。

「じゃ、その間、およそ80～90パーセントは反共記事を書いたのでしょうな」

座中に爆笑の渦が湧いた。

なんのための質問だろうかといぶかり、職業的な習性で神経を尖らせていた代表たちは、総書記の意表をつくギャグに大笑いしてしまったのである。

張りつめていた座の雰囲気が一気にほぐれると、彼らの職業意

識がにわかに頭をもたげた。北を訪問した当初、総書記になんとしてもお会いしたい、談話や午餐の席ではいかなる質問も行わないと約束していた彼らであった。ところが、そんな約束はいつしたかと言わんばかりに、彼らは、知りたい、聞きたいの一念で、次々に立ち上がって質問を繰り広げたのである。予定しなかった「インタビュー」はこのようにして始まった。

あるメディア社長がまず立ち上がった。

「国防委員長、社会主義堅持の力の源はどこにあるのでしょうか」

総書記は別に考える風もなく答えた。

――私の力の源は軍事力にある。私の力の源は二つだが、第１は一心団結であり、第２は軍事力だ。軍事力があってこそ、外国との関係を自主的な立場で解決していける。外国との親交をはかるとしても、強力な軍事力が背景になければならない。さもないと、朝鮮封建王朝末の大院君や明成皇后と同じ運命を免れない。……

合作も民族同士　南のメディア代表たちは活気付き、無遠慮な質問が矢継ぎ早に出された。深くも広い知識と鋭い判断、ユーモアたっぷりの説明をもってする総書記の答弁に勢いづいたのである。

あるメディア代表が立ち上がった。

「国防委員長、北のアニメの製作とソフトウェアのレベルは世界的です。だからこの分野で外国と合作して海外へ進出すれば、

金を大いにかせげると思いますが、いかがでしょうか」

総書記は豪快に笑って、代表団たちを見回した。

——北と南がこの分野で合作したら、われわれが50を持ち、南が50を持つことになって、金はまるごとわれわれの地に落ちる。にもかかわらず、なんのために外国と合作しなければならんのですか。……

一同の脳裏には、6・15共同宣言に明記された、あの有名な表現がよみがえった。わが民族同士で！

総書記は、一言の名答をもって、わが民族同士でというスローガンが空言でないことを闡明した。分裂の悲劇に終止符を打つためには、7千万が力を合わせなければならないという統一の大命題を今一度強調したのである。

統一はいつ　いつしかかなりの時間が流れた。南のメディア代表たちは、この絶好の機会を逸してはと、時間の流れは意にも介せず、質問を続けた。

それまで沈黙を守っていた一メディア代表がおもむろに腰を上げた。

「国防委員長、統一の時期は、いつ頃訪れるでしょうか」

一同は驚いた。それは質問というより、この場で総書記の予言を引き出そうとする無礼な行為だと見なしたのである。

実際、半世紀以上も紆余曲折を経ている国土の統一がいつ成るかを、どの誰がこの場で確言できようか。座中の視線が一斉に自分に集中したのを覚えて、彼はとまどった。総書記の高見に接し

たくて行った質問だったのだが、同僚たちから厳しい視線を浴びて、うろたえたのである。

総書記は、さわやかな表情で一同を見回した。

――統一の時期は北と南の決心にかかっている。われわれがいかに決心し、わが民族同士がどう力を合わせるかによって、統一は今直ちにも実現が可能である。……

拍手喝采が湧き、南の代表たちの顔には驚嘆の色が漂った。

説明の意味も深かったが、それほど微妙な難しい質問に、どうしてそんなに明快な回答がすかさずに出せるのだろうか、という思いにとらわれてのことであった。

現在の私の心境は　和気藹々とした同胞愛の情が流れる対話がよどみなく進む中、一メディア社長が立ち上がった。

「最近、国際五輪委員会委員長が９月に行われるシドニー五輪に国防委員長と金大中（キムデジュン）大統領を招請したわけですが、委員長のご意向はいかがなものでしょうか」

場内はしーんとなった。

時事的な性格と政治的な性格のからんだ難しい質問だった。

ちょっと考えた総書記は、まだそんな報告は受けていない、しかし、時間が許さず、同じ民族が暮らしているすぐ近くのソウルにも行けずにいる時に、遠い他国のシドニーまでどう足を運べようか、と反問し、**「実際、ソウルを訪問して南にいるわが同胞ともいまだに挨拶を交わせずにいる私が、遠方のシドニーまで出掛けて〝俳優〟を気取ることなどどうしてできましょうか」**

切々とした真情のこもる言葉に、場内はざわざわした。

総書記は語を継いだ。

――現在の私の心境は、ソウルも訪れ、済州（チェジュ）島にも行き、釜山（プサン）にも一度行ってみたいと思っている。しかし、私には次々に持ち上がるさまざまな問題の処理で時間を割くことができない。……

南のメディア代表たちは深い感動に包まれ、総書記の発言を一心にメモした。

翌日、南の各新聞は、金正日総書記が南朝鮮のメディア代表団を招待した午餐会の席上で語った発言内容を、全二面にわたって一斉に報じた。

その分量は、200字詰め原稿用紙で80枚内外に達するほどのものであった。

酒に関する「特別講義」

2002年2月23日、金正日総書記は大紅丹（デホンダン）ジャガイモ工場に新築された酒造職場を視察した。

職場包装室の一隅に当工場製の各種ジャガイモ酒が並べられてあった。アルコール分25度、30度、40度……。ところが、それら酒瓶の形もラベルの図案もみな同じで、ちょっと見ては、どれがどれだか区別がつかない。

自分のぼんのくぼは見えぬで、工場幹部が酒の自慢を始めた。

――当工場の酒はヨーロッパのある国のワインより優れてい

る。その国のワインにはアルデヒドとメチルアルコールの含量が一リットル当たり30ミリグラムもあって飲酒後頭痛を覚えるが、当工場のジャガイモ酒は含量が４ミリグラムほどにすぎないから、頭が痛まず、覚めるのも早いのでいい。……

総書記は微笑して、酒は酔うために飲むのだから、すぐに覚めるような酒はよいとは言えないと教え、蓋を開けた酒瓶を手に取って匂いを嗅いで見た。

みななんと評するだろうかと、総書記を注視した。

「〝どびゃくしょう酒〟の匂いがする」

こう言って、総書記はからからと笑った。

人の意表をつく奇抜な洒落に、同行の随員たちまでもがどっと笑った。

俗っぽい人たちだけが口の端に乗せるようなげすな言葉を、総書記はなんとユーモラスに使いこなしたのだろうか。

とくとくとして酒の自慢をしていた幹部は気恥ずかしくなり、顔を赤らめた。

そんな彼にいたわるような視線を向けた総書記は、最初の製品がこれほどならまあ悪くはないが、このジャガイモ酒は評判になるべきだ、国際市場に出しても好評を博するほどに大紅丹ジャガイモ酒の品質が高まったら、その上で自慢をすべきだとたしなめた。

幹部は、いい気になってつまらぬ自慢をした自分がなんておろかな人間だろうか、と自省した。

彼だけでなく、工場の全幹部は、そんじょそこらの〝どびゃくしょう酒〟ではなく、ジャガイモ酒独自の風味と特色を持つ世に

聞こえた大紅丹ジャガイモ酒を必ず作り出そうと、ひそかに決心した。

総書記は、アルコール分によってラベルの図形や色彩を異にし、酒瓶の形も変えるべきだとし、誰に問うでもなく、世界に名の知られた酒の名称や由来、アルコール分についてどれほど知っているかと聞いた。

工場幹部たちは顔を見合わせるばかりで、誰一人として答えようとする者がなかった。

総書記は、そんな彼らの気持ちを察して微笑した。

「わが国は以前から焼酎が有名ですが、25度のジャガイモ酒をなぜ焼酎と呼ばないのか分かりません。焼酎はアルコール分が低いので、古くから燗をして飲んだものです」

ついで総書記は、各国の酒についていろいろと語った。

――日本の清酒は16度のものが普通だ。日本では古くから清酒が賞揚され、焼酎は強いとしてあまり喜ばれていない。ウオツカはロシアの特産だが、アルコール分は42度ないし45度である。ロシアでは42度以下の酒はつくろうとさえしない。ウオツカは冷やして飲むと香りがとてもいい。ロシア人は冷蔵庫に氷を入れておき、それを酒に浮かして飲む習慣がある。ウオツカは舌ざわりがよい。中国の名高い酒は、茅台酒(マオタイチュウ)と白乾児(パイカル)である。これらの酒はアルコール分が高い。……

つづけて総書記は、朝鮮の焼酎をはじめ、世界各国の有名な酒の名称と由来、アルコール分と飲み方に至るまで詳しく説明した。

人びとは、楽しいおとぎに夢中になって耳を傾ける少年少女の

ように、総書記の話に引きつけられていた。初めて聞く酒に関する特別〝講義〟であった。

〝講義〟を終えた総書記は、大紅丹ジャガイモ酒を国際市場でも名を馳せるほどの有名ブランドに仕上げなければならない、と今一度強調した。……

近年、品質を高めた大紅丹ジャガイモ酒は、毎年行われる全国酒品評会で連続最高の評価をかちえており、海外でも、朝鮮のジャガイモ酒は確かにうまいと評されている。

崩壊論者は残らず来て見るがよい

2002年7月18日、金正日総書記は国が経済的に困難を極めていた時期に亀城(クソン)市が南山(ナムサン)協同農場に建設した総合畜産分場を視察した。

展望台に立って分場の建築物を長らく見回した総書記は、分場を立派に造成した、亀城市がよくやっていると満足を表した。

あれらはヤギじゃないですか。

総書記は、前方の山腹に白く群れて動いている家畜を指して聞いた。

「はい、ヤギです」

ここ総合畜産分場ではヤギを何匹ほど飼っているのか、雌は何匹かと聞いた総書記は、周辺の山や谷を望見し、ここはなんと素晴しい地帯だろう、と再び満足を表した。

一幹部が、ある建物を指して言った。

「あれは牛舎です」

「牛は何頭ありますか」

当分場には数十頭の牛があり、それらは一定の期間飼育されて協同農場の諸作業班に配当され、役牛として利用されているとの説明を受けた総書記は、ほかにどんな家畜があるのかと聞いた。

「ガチョウ、ブタ、ウサギなどです」

「牛は現在牛舎で飼っているのですか、それとも放牧しているのですか」

「放牧を基本にしています」

彼は、向こうに見えるのが放牧中の牛です、と山のふもとを指さした。総書記は、あれに見えるのが牛なんですね、この分場は実に素晴しい、噂一つ立てずに大きなことをやってのけたものですとたたえ、確信ありげに言った。

「崩壊論者たちを残らずここへ呼んで見せつけるといい。他国のことを好んであげつらう西側のジャーナリストたちもここへ来て、朝鮮人民がどんなふうに生きているかをわが国で確かめるようにするのも悪くありません」

総書記は、南山協同農場は畜産に大きな力を入れ、畜産物加工品を大いに売り出してお金を儲けるつもりだろうな、と言って、楽しそうに笑った。まわりの人たちもどっと笑った。

奥歯がしっかりしていないと

2007年8月1日、羅南（ラナム）炭鉱機械連合企業所を現地指導した金正日総書記は、設備組立て場で労働者や技術者たちが大型機械設備の組立てを最終段階で進めている様子をしばらく眺めたあと、すでに仕上がっている設備の諸要素についての説明を、支配人から受けた。

説明する支配人はいささか面映ゆい思いをしないでもなかった。完成段階にあるこの大型機械に、最初に予定していたものよりはいくぶん遅れたプログラム制御装置が取り付けられていたからである。

「この設備は最初、交流サーボモーターとボールねじによるシステムを採用すべく設計されたのですが、途中、プログラム制御装置を採用することに設計を直して組み立てられています」

支配人の面目なさそうな言い訳に、総書記は豪快に笑ってこう言った。

「党に無限に忠実な羅南の労働者たちは、すべてが不足し、困難な状況の下でも、自力更生、刻苦奮闘の革命精神と創造的知恵をいかんなく発揮し、新しい現代的機械の生産で革新を起しました」

批判されるものと覚悟していたところ、思いもよらぬ称賛を受けて、支配人は面食らった。それもそのはずだった。交流サーボモーターは、稼動中の設備のスピードと力をその時々の状況に応じて自動制御しうるモーターで、ハイテク技術に属するものだっ

た。それで、この方式こそ新しいものの不断の創造を強調している党の意図に沿うものと確信して、採用を決心したものであった。

「将軍、この次は交流サーボモーターとボールねじによるシステムを導入した機械設備を製作します」

こう言う支配人に総書記は、それはわが国の現在の実情には合わないと指摘した。

「え？……」

驚く工場幹部たちを見回した総書記は、現状では油圧方式がわが国に適する、交流サーボモーターとボールねじによるシステムを導入した機械設備を使用するには、電力系統の電圧と周波数の定格値が正確に守られなければならないが、現状では電圧と周波数を正確に固定することは困難である、交流サーボモーターとボールねじによるシステムを採用した設備をつくるというのは、支配人の欲望にすぎない、もちろん将来はそんな機械をつくらなければならない、と語った。

支配人はおのれを恥じた。

工場では、狭隘な殻の中に閉じこもって片寄った考えしかできないでいる時、総書記は国の全般的な経済実態に思いを致し、現実から遊離した人たちの主観的な欲望をたちどころに見抜いて、科学技術的問題で宙に浮いた思考方式を警戒し、現実的に考え、実行するようにとさとしたのである。

しかしながら彼らの意気込みは立派だとして、総書記はこう続けた。

——奥歯がしっかりしていてこそ、固い食物が噛み砕けるよう

に、今は油圧式機械設備をつくっていても、生産土台がしっかり固まり、定格電圧と定格周波数が正確に保たれる段階に至れば、漸次交流サーボモーターとボールねじによるシステムを採用した機械設備を製作するのです。現段階でそのような機械設備をつくろうと言うのは、あまりにも背伸びをしていることになります。……

総書記は今一度、わが国の現状に合うのは油圧式機械設備である、コンピューターによるデジタル制御装置を採用した油圧式機械設備をつくったのは、当を得た処置だった、ここではこのような油圧式機械設備をひきつづき生産することだ、と激励した。

「三日浦」の火花

当時、三日浦（サムイルポ）特産物工場について知る人は多くなかった。

ところが、この無名の工場で上がった一点の火花が、全国に食品加工業革新を起す炎となって勢いよく燃え上がったのである。

それは、2009年4月7日、金正日総書記が当工場を視察したことで引き起こされたのであった。

こじんまりした2階建ての建物が庭のまわりに巡らされた三日浦特産物工場はさほど目立つほどの工場ではない。ところが、作り出される食料品は大変なものであった。

パン、麺、菓子、食用油、酒、蜂蜜、水産物、各種野菜の辛漬け、各種の高麗（コリョ）補薬剤と飲料、それに陶磁器などなど。……その

どれもが100パーセント国産原料をもって作られ、加工や包装のレベルも最新技術に支えられた、高い文明度を誇る生産品である。

工場沿革紹介室でも、生産現場でも、総書記は始終にこにこし、まるで３大革命展示館の食品陳列場のようだ、製品はどれもみなわが国、わが祖国のものである、これこそ軽工業革命、食品加工業革命における基礎の基礎である、私は今日、「光明星（クァンミョンソン）２」号衛星ロケットを打ち上げたこと以上にうれしい、とたたえ、工場幹部たちに向き直った。

私は先軍時代の要請に即して工場を立派に建て、数百種もの上質の製品をどしどし作り出して、わが国の軍人と人民の食生活向上に大きく寄与している当工場の幹部とすべての従業員に最高司令官の心からの感謝を送ります。

その時、先程から何か言い出しそうにしながらもためらっていた支配人が、思い切って口を開いた。

「最高司令官同志、一つお願いがあります。工場建設の初期からこれまでの10年間、熱心に働いてきた革新的な従業員たちに一度お会いになっていただけないでしょうか」

「よろしい。彼らを一人残らず呼びなさい」

総書記の快諾で、10余人の革新者たちが大喜びして集まってきた。

そんな彼らを前にして総書記は、みなさんが今日のような喜びを味わうべく、革命的軍人精神、自力更生、刻苦奮闘の革命精神をもって働いて来たのは実に誇らしいことです、みなさんは真の愛国者であり、功労者ですとたたえ、彼らと並んで記念写真を撮った。

次いで総書記は、工場直売店に足を運び、売り場をずっとみて歩いた。

商品が所狭しと並ぶ陳列台を眺めながら、実に気分がいいと言って歩いていた総書記は、ある売り場に並んでいる濁酒の瓶に目を止めて、需要が多いだろうかと聞いた。

「少なくありません」

私もこの濁酒を５本ばかり買って行こう。

レジはどこにいるのかね。代金を払わなくちゃ。

「はい」

商店ではかけ売りをしないことです。

まじめくさった表情でこう言い、総書記は朗らかに笑った。

一同は、先ほど工場内を見て歩いた際も、当工場製の酒で一等うまいのはどれかと聞き、七宝（チルボ）山のマツタケ酒が最上だと言う支配人の言葉に、それでは諸君もその酒を買い、ほかにも欲しい物があったら購入して帰るとよいとして、「**ただ代金は払わないとね**」と言ったことを思い出して笑った。

とはいえ、彼らは、総書記が三日浦特産物工場の手本をもって、全国に軽工業革新の炎を燃え上がらせようと構想していたことにまでは考え及んでいなかった。

労働者たちへの敬意

2009年5月20日、大興（テフン）青年鉱山（当時）を訪れた金正日総書記

は、国の実情に即したマグネシアクリンカー生産工程の独自的な確立に成功したという報告を受けて大いに満足し、よくやりました、まさにそうすることがわれわれの方式であり、チュチェ工業なのです、と手放しで称賛した。総書記は、耐火物生産の主体化を立派に実現したのは一つの革命であり、わが国工業の発展上、大きな意義を持つ巨大な功績である、これは核実験の成功に劣らぬ大きな成果だ、金日成同志が耐火物工業の主体化に成功したことを、じかにおいでになってご覧なさったとしたら、どんなにお喜びなさるだろうかと、切々と語った。

耐火物生産の主体化を願って労苦を重ねた金日成同志の、深い思い出にとらわれていた総書記は、再び語を継いだ。

——大興青年鉱山の労働者たちは、口先ではなく実際の行動をもって金日成同志の革命思想、チュチェ思想を光り輝かせており、その正当性と生命力をいかんなく世に誇示した。大興青年鉱山の労働者たちは実に感心な人たちだ、耐火物の生産に参加した設計家、技術者、労働者たちはみな英雄だとして、「**大興青年鉱山を大興青年英雄鉱山と呼ぶことにしよう**」と言った。

耐火物の生産工程図を眺めていた総書記は、その前へさらに一歩近づいた。一同の視線が一斉に工程図にそそがれた。

工程図に目をこらし、大興青年鉱山の労働者たちは実に大きなことをやりとげたと、今一度称賛した総書記は、「**この場に労働者たちがいないため、彼らに敬意を表する思いで、私は、われわれの方式を表示したこの耐火物生産工程図に直接敬意を表します**」と語り、工程図の前に頭を下げた。

一同はこみ上げる感激を抑え、一斉に拍手した。

満点の上の満点

2009年10月20日、金正日総書記は、新たに建設された万寿台（マンスデ）通りに並ぶアパートを視察した。街区内の公園とアパート群を眺めたあと、ある住宅に入って台所に足を踏み入れた総書記は、壁のタイルを叩いてみながら、台所が立派に出来ている、タイルの継ぎ目の処理を上手に行った、目地が厚いのではと思ったが、薄くなっているので、見た目に悪くないとたたえた。

ダクトを指して、女性の台所仕事に便利なように、厨芥を流し出す口も設けられていますと言った一幹部の説明に、総書記はたいそう満足した。

「台所に厨芥排出用のダクトを設けたのも結構です。台所にこんなものまであるので、主婦たちが喜ぶことでしょう」

こう言ったあと、食器戸棚を開けて戸棚の中と外を見、さらに隅々に目をこらした総書記は、台所に食器戸棚を付けたのはいいが、それに隙間がないようだと言った。一同は怪訝な思いで顔を見合わせた。

「戸棚が密閉されていると、中の食べ物が変質しやすくなります。内部の湿気が外へ抜けるよう、隙間がついていなければなりません」

かまどを分けた娘の暮らしを気づかう母親のような心遣いに、

一同はいたく心を動かされた。

やがて、第３号区画第３号棟に歩を運んだ総書記は、第１号玄関の前で立ち止まった。

「ここはどこの第１号玄関ですか」

「ここ第３号区画第３号棟には、玄関が第１号から第10号までがあり、先ほどご覧になった玄関は第10号玄関です」

説明にうなずいた総書記は、**「第３号区画第３号棟の第１号玄関入り口に玄関名だけが付いていますが、号棟名も併記して、何号棟何号玄関と表記しなければなりません」**と指摘した。そして、玄関名だけを表示すれば、他地から来た人は、目的の家を見付けるのに骨が折れるはずです、悪くすると、ソ連劇映画『運命のいたずら又は銭湯の効用』の主人公のように家を取り違えないとも限りませんと言って、愉快そうに笑った。随員たちは大笑いし、案内していた幹部も頭をかいて笑った。

万寿台通りの住宅を見て回った総書記は、住民の生活に便利に、申し分なくつくられている、台所や洗面所、居間の内部などのつくりも見るほどに素晴しい、万寿台通りの住宅は、設計も施工も上々だ、これまで見たさまざまの住宅のうち、こんなに優れた住宅を見るのは初めてだ、あまりにも立派で、私もここへ引っ越して来れたらという思いに駆られる、としてこう続けた

「万寿台通りの住宅は、強盛大国で全人民が暮らすことになる住宅のモデル、標準です」

総書記は、欠陥を見付けようにも見付からない、自分はさまざまの単位を現地指導し、優秀な対象は満点の評価を下したものだ

が、万寿台通りの住宅は満点の上の満点だとたたえた。そして、もとの住民たちすべてに新居が行き渡るでしょうねと尋ね、「100パーセント配当されます。撤去した人たちは何度もここ新築住宅へ来て見ては、24時間断水することなく、また世帯別に水加熱器や厨芥排水施設も備わっているのを知り、とても喜んでいます。彼らはみな、いつ引っ越せるのかと尋ねては、将軍の熱い愛に涙ぐんでいます」という説明を聞いて満足した。

総書記は、撤去中の世帯はもとより、万寿台通りの住宅を配当された人たちを早く入居させるべきだ、そのあと彼らの反響を総合してみるとよいとして、「**万寿台通り住宅の利用者たちがみな喜べば、その時は満点の上の満点、満々点と評価します**」と言った。

総書記はこの日、平壌市で10万世帯分の住宅建設が開始されたからには、すべての住宅を万寿台通り住宅のレベルに勝るとも劣らぬよう建設することだと強調した。

これで終わるべきでない

2009年12月9日、金正日総書記は北辺のある工場を視察した。

目を覚ましたプレス　前年の一月当工場を現地指導した際、生産系列を現代化、ＣＮＣ化すべき課題を与えていた総書記は、生産現場を見て歩きながら、課題が立派に遂行されたことを確かめて、大きな喜びにひたった。

わずか２年近くで生産工程一式が100パーセント改造されているのである。ＣＮＣ設備数十台が追加配置されているのもそうだし、各種のプレスが樹林さながらに立ち並んでいるのも全く新しい光景であった。

「将軍、ここはプレス職場です。将軍がご指摘なさったとおりに、今ではすべてのプレスがＣＮＣ化されています」

「見事です」

総書記の称賛に勢いづいた工場幹部たちは、こもごも報告した。

「ＣＮＣ化がなった結果、不合格品は一切出なくなりました」

「労働者たちがコンピューターを操作して働くので、みな喜んでいます。彼らは仙人にでもなったような心地で、退屈さえしているほどです」

総書記は、「まかり間違えばみんな無職者になりかねません」と言って、からからと笑った。

ＣＮＣ化が高い段階になるほどに労力管理にそつがないように努めよという意味である。

「苦難の行軍」時以来死蔵されていた2500トンプレスもＣＮＣ化のおかげで再生したとの報告を受けたあと、総合操作室へ歩みを移した総書記は、ここで、画面に顕示されたプレスの作業状況を具体的に観察した。

「2500トンプレスのＣＮＣ化は生易しくはなかったでしょうね」

「はい、簡単ではありませんでした。でもＣＮＣ化がなったおかげで、20年間も寝かされていたプレスが、長い眠りから覚め

て立ち上がりました」

「20年間眠ったのですから、これからはフル稼働させることです。ＣＮＣ技術を導入したのはなんとも素晴しいことです」

総書記は、こざっぱりした身なりの若い女性たちが1200トンプレスをプログラムで操作している様子を頼もしげに眺めた。

「将軍のお言葉どおりに、このようにプレスがＣＮＣ化されたので、女性たちも機械を運転できるようになり、労働者たちは骨の折れる労働から完全に解放されました。将軍、ほんとうに有難うございます」

工場幹部の声はうるんでいた。

「そう、みんな楽に働けるようになりました。楽にね」

総書記の声もかすれていた。

大学論文を書く時が来た　工場の視察中、総書記は随行する中央の一幹部を振り向いた。

「再投資をする際は、対象をじっくり考慮しなければなりません」

これは、総書記がＣＮＣ化に取り組んでいる工場、企業を現地指導する際にきまって強調する指摘であった。

なおも国の経済事情が厳しい今は、どんな対象にどれほどの投資を行うべきかは、慎重かつ責任的に決定すべき重要な問題であった。再投資の目的はほかでもなく、最先端突破戦の勝利にあるのである。

それにしても、現代化の高い目標をめざして再投資問題を提起したその深い意味を、人びとがしっかり把握するのは容易でなく、

それだけに再投資についての正しい認識を当事者たちに抱かせるのはとりわけ重要である。

　再投資に関する総書記の説明は続いた。

「今は加工速度を高めることで製品の質をやっと確保した段階にすぎません。これは、つい今しがた大学の入試に合格したことと変わりがありません」

　中央の幹部は肩の荷が重くなるのを覚えた。ＣＮＣ化を実現した工場では、それぞれの実情に合わせて新たな目標を立てるとはしているが、総書記の高度の要求に照らすと、距離はまだまだ遠いと言わざるを得なかった。

　「再投資の立案に取り組んではいますが、まだ完成はされていません」

　彼の率直な言葉に、総書記は慎重な面持ちで、再投資は必ず行うべきだが、まっとうに行わなければならない、現在の状態で終われば、すでに収めた成果も崩れてしまう、と言った。

　総書記は工場幹部を振り向いて念を押した。

「ＣＮＣ化をこれで終わらせてはなりません。今のところは大学入試に合格したにすぎず、今や大学論文を執筆する時になりました」

　「はい、よく分かりました」

　総書記は言葉を続けた。

　――ＣＮＣ化に更に拍車をかけ、次の高地を極めることです。最先端の突破は、人民経済全部門を包括するスローガンであり、先頭を走る人たちは、常に先端を切って前進しなければなりません。……

モモとピクルス

2011年8月、金正日総書記はロシア連邦のシベリア及び極東地域を非公式訪問し、21日、ブレヤ水力発電所を参観した。

アムール州長官は、総書記の訪問を歓迎し、発電所内で昼食会を催した。テーブルには誠意のこもるさまざまの料理が盛り沢山に並べられてあった。

テーブルを見回したロシア連邦極東連邦区駐在大統領全権代表は、アムール州長官の脇腹を小突いて、にやっとした。テーブルの準備がよく出来ている、これほどなら申し分ないという意味であろう。

ほほえんだ総書記は、テーブル上の果物や野菜はみなアムール州の産物かと聞いた。

「ええ、そうです」

州長官の答えに、大統領全権代表も、どれもみなアムール州産のものだと付言した。

ああそうですか。ではこのモモもアムール州で取れたものですね。

州長官はあわてた。実は、モモは州の産物でなかったのである。

「正直言って、そのモモは外国からの輸入品です。ところで、それをどうしてご存知なのですか。ほんとうに知らぬことがありませんな」

総書記は、いやそんなわけではない、私は、当地方ではモモがあまりよくできないことを承知している、いつだったか中国を訪

問した際、これと全く同じようなモモを見たことがある、それでちょっと聞いてみたのですと言った。州長官と大統領全権代表は、感にたえぬ表情で顔を見合わせた。

ところで、テーブルにはなぜピクルスが置かれていないのですか。

ピクルスは酒を好むロシア人にとって、塩ニシンと共に酒の肴として欠かせぬものとされているのである。

州長官は、ピクルスがないではないが、そんなキュウリの塩漬けまでテーブルに乗せるのはどうかと思いまして、と答えた。

ピクルスが出なかったのを見ると、お酒を飲まないという心積もりのようですな。

「いや、そんなわけでは……今すぐピクルスを用意するように致します」

直ちにピクルスの皿が運ばれて来た。

ところで、なぜか、全権代表と州長官は杯を唇に当てはするが、そのままテーブルへ下ろしてしまうのである。

全権代表はどうしてお酒を飲まないのです。

「大統領から金正日同志を誠意を尽くしてもてなし、粗相のないよう、酒は絶対に飲むなと指示されたもので……」

大統領の指示なら致し方ありませんな。でも、州長官は飲むべきです。

「上司が飲まないのに、どうして私が……」

それならあえてお勧めはしません。後日、きっとわが国へお出で下さい。私が正式に招聘します。朝鮮へ来られたら、私の指示に従わなければなりません。ご両人の酒の実力を検分します。

総書記はこう言って、からからと笑った。座中が愉快な笑いに包まれた。一家親類の集まりのような和気藹々とした雰囲気であった。

人民の喜びの中で

酷寒の続いていた2011年12月4日、金正日総書記は凱旋（ケソン）青年公園遊園地を視察した。

総書記の喜び　関係幹部たちの出迎えを受けた総書記は、遊戯機械の運転はすぐにも可能かと聞いた。

「はい、いつでも運転できます。将軍が昨年の5月25日にお出でになった時は、スーパーチェアの基礎にゆるみが出来ていて、施工をやり直していたために運転できなかったのですが、将軍が、運転が可能になったらまた来るとおっしゃったとおり、今日このようにお見えになり、ほんとうに……」

幹部の声が詰まった。

総書記は、今日は凱旋青年公園遊園地の管理運営状況を実地で確かめるべくやって来た、われわれは人民が世に羨むことのない幸せな生活を送れるよう、いっそう多くの努力を傾けなければならない、と語ったあと、遊園地の管理運営状況について詳しい説明を受け、どの施設もみな正常で、パン食堂など給養サービス網も別状なく運営されていると聞いてたいそう満足し、遊戯施設の

ある方へ向かった。

途中、人民が喜んでいるか、これまで事故はなかったか、遊戯機械に乗る代金は幾らかなど、いちいち確かめる総書記の質問に答えた一幹部は、「人民の幸せを願って今日またここ凱旋青年公園遊園地へお出でいただいて、まことに有難うございます」と、感謝の気持ちを表した。

「大城山（テソンサン）指導局の責任幹部が、私が日曜日のこの寒い日に凱旋青年公園遊園地を訪れたことで感謝していますが、人民に幸せな生活を満喫させるのは私の喜びです」

じかに乗ってみよ　スーパーチェアの方へ向かって歩きながら、総書記は**「遊戯施設を稼動させて、今日ここへ一緒に来た人たちはみな乗ってみることです」**と言った。

幹部たち一同が乗ったスーパーチェアは、上下に大きく波打ちながら回転した。そんな様子を見ながら、総書記は一幹部に、人民が多く遊びに来ているか、みんな喜んでいるかと尋ねた。

「みんなほんとうに喜んでいます。一度この遊園地へ来たら、なかなか帰ろうとはしません。将軍のご配慮で遊園地が新装なった時、飛行兵たちが真っ先にやって来て遊戯施設を乗り回し、大はしゃぎでした」

総書記は、飛行兵たちが喜ぶほどなら結構なことだ、ところで、凱旋青年公園遊園地のどの遊戯機械が一番人気が高いのかと尋ねた。

「スーパーチェア、ジェットコースター、それに……」

彼は指を折って答えた。総書記は、凱旋青年公園遊園地の遊戯施設の中では、座席の軸が最高120度まで傾斜して上がるこのスーパーチェアの人気が一番高いということはうなずける、スーパーチェアの次に人気があるのはジェットコースターだと言うが、私の見るところでは、ジェットコースターより急降下塔の方がもっと人気が高いと思えるがと言った。そして、スーパーチェアの乗り心地はどうだったかと聞き、スーパーチェアに初めて乗った人は度肝を抜かれて、二度と乗らないと言いながらも、その後遊びに来ると、また乗ると言うそうだが、スーパーチェアに乗るのはなかなか簡単でなさそうだと言って笑った。

ちょうどその時、スーパーチェアがはるか最高点に上がりつめたかと思うと、あわや地面に激突するのではと思われるほど勢いよく降下した。爽快、痛快……実に形状しがたい気分である。

5分という時間はまたたく間に流れた。地上で見物していた人たちもその間手に汗を握り、笑ったりはしゃいだりした。

スーパーチェアは停止し、人びとが降り立った。総書記は彼らに、気分はどうだったかと聞いた。

「いやあ簡単じゃありません」

「座席が頂点から急激に降下しだした時は、うわっと思いました」

「積もった疲労がいっぺんに吹っ飛んだ思いです」

総書記はたいそう満足した。

急降下塔の前へ来た総書記は、この遊戯機械には青年をはじめみんな喜んでしきりに乗りたがっているというなら結構なことだ、だが、これに乗ると、恐怖のあまり失禁する人もいるんじゃ

なかろうかと言って、豪快に笑った。
「そんな人も実際にいます。なかでも女性のほうに多く見られます。それで、外国では急降下塔のかたわらに下着の売店さえあるとのことです」
みんな大笑いした。
急降下塔の技術的特性について質問した総書記は、塔高が54メートルにもなり、座席は秒速15メートルで上下すると言うが、乗客は上昇する時より急降下する時に青くなるだろうと言い、急降下塔の運転中故障が生じて、乗客たちが降りて来れないなど、事故を起すようなことはなかったろうかと尋ねた。
そんな場合は非常対策が講じられており、運転中故障が生じれば、手動で座席を下に降ろせるが、これまで事故はなかったと聞いて、総書記はほっとした。そして、重ねて強調することだが、遊園地の管理運営で何よりも大切なことは事故の防止である、遊園地の幹部と機械工は遊戯娯楽施設の点検を規定どおりに実施し、設備の管理運営を責任をもって手落ちなく行うようにと強調した。
総書記はほかにも、３重回転盤、軌道回転盤なども見て歩き、それぞれ幹部たちに乗ってみるようにし、彼らの感想をいちいち聞いて、すこぶる満足した。

ハンバーガー　総書記は遊園地が運営しているパン食堂を眺めた。
凱旋青年公園の奥の小高い場所にあるパン食堂は、他の食堂と

は違って２階づくりで、窓が大きくてさわやかな感じがし、人びとの目につきやすいサービス店である。

総書記は、あれはハンバーガーを作ってサービスするパン食堂だが、軍人建設者たちが建物をこざっぱりと立派に建てたと言って一幹部を振り向き、人びとはハンバーガーを好んで食べているのだろうかと聞いた。

ハンバーガーは世界に広く知られたパンの一種で、食堂では、ローストチキン、オムレツ、ソーセージ、ジャガイモ粥、葉菜、それに茶などの付け合せ料理を添えてサービスしており、人気が高かった。

このパン食堂は、外国のある会社と合弁で運営する食堂で、原材料をはじめ料理設備、食器類などの一切をその国から輸入しているためにコストが高くついているが、総書記はコストに関係なく格段に安い値でサービスするようはからったのであった。

総書記は、**「パン食堂で上質のハンバーガーを廉価でサービスするのでとりわけ人民に喜ばれているというが、そんなに人気が高いなら、私もうれしい」**と言い、今後とも食堂の運営に力を入れ、ハンバーガーの質を落とさず、人民へのサービスに努めることだと強調した。

電　飾　総書記は、遊園地の電飾はちゃんと稼動しているかと質問した。

「はい、電飾が特別に素晴しいとして、電飾の見物でわざわざやって来る人たちも少なくありません」

総書記はそうだろうとうなずき、公園の奥へ向かって歩き出した。
案内する幹部は深い感慨にふけった。
遊園地の最初の設計では夜間の運営が考慮に入れられていなかったために、電飾も祝祭日や国家的な記念日にある程度の雰囲気をかもし出す程度の装飾にとどめ、あまり大がかりにすることは考えていなかった。
ところが、2010年4月22日、遊園地の開設を前にしてここを訪れた総書記は、公園内の照明が全般的に弱い、照明灯と街灯、庭園灯、投光器などを適切に取り合わせてもっと配置し、遊園地とその一帯を真昼のように明るくするようにと教え、遊園地は日中は運営せず夜間に運営するよう指示したのであった。
こうして、凱旋青年公園遊園地の電飾は現在のように異彩を放って完成したのである。
そんなことを思い起こしている幹部を振り向いて、総書記は言った。
「人民が凱旋青年公園遊園地へ来て遊戯施設にも乗り、電飾であかあかと輝く夜景を楽しみながら、強盛大国の大門内に足を踏み入れたような思いだと言い合って、とても喜んでいるとのことだが、人民がそんなにも喜んでいるなら、私の気分も楽しくなります」

小さいが大きい売り場　総書記はミルサム屋台店の前で立ち止まった。ミルサムとは水に濃くといた小麦粉を油をしいた鉄板上で円形に薄く焼いたものをもって野菜や肉類その他種々の

具を包んだ料理である。
　売り子の挨拶を受けた総書記は、店の中をのぞき、ミルサムは人びとに喜ばれているだろうかと聞いた。
　内部の台上には、ミルサムを盛った角盆が右側に並び、左側にはミルサムを焼くかまどが据えつけられてあった。
「将軍、ミルサムの人気は大変なものです」
　売り子の答えに、傍らにいた幹部たちも、ミルサムはとてもよく売れ、客はこの前に一度立つと、なかなか立ち去ろうとしませんと口添えした。
「人びとがこの屋台でサービスするミルサムに舌づつみを打ち、一向に立ち去ろうとしないのは結構なことです」
　こう言ってほほえんだ総書記は、売り子たちの身なりに注意を向け、彼女らの薄着を気づかい、寒くないかと聞いた。
「いいえ、ちっとも寒くありません」
　こう元気よく答える売り子に微笑を送った総書記は、彼女たちがかまどの熱で暖まった店内にいて寒い思いをしていないのなら、気が置けると言って、屋台の前に貼られたミルサムの説明文を読み、値段も確かめてから、みなさん、ご機嫌ようと挨拶して歩き出した。

　残した写真　幹部たちが軌道回転盤に興じていた時、一女性幹部が総書記にお願いした。
「人民が凱旋青年公園に来てどんなに喜んでいるか分かりません。将軍は遊園地が開設して以来、これまで４回もお見えになっ

たのですから、今日は遊園地を背景にして写真をお撮りになって下さったらと思います」

総書記は快く承諾し、あたりを見回してここで撮ろうと言った。撮影の背景を定めた総書記は、女性幹部の背を軽く押して、軌道回転盤を背にして立たせ、他の幹部たちも並んで立つよう手招きした。

「当地の幹部たちが、私が凱旋青年公園遊園地の開設後４回もここへ来たので、今日はきっと記念写真を１枚残して欲しいと言っています。勤労者や青少年たちの幸せな笑い声に満ちる、人民の優れた憩いの場となった凱旋青年公園遊園地で、幹部のみなさんと一緒に遊戯施設を背景にして写真を撮りましょう」

もっと高く響き渡れ　軌道回転盤の運転中、ここ１年間の凱旋青年公園遊園地への人民の参観状況と反響についての説明を受けた総書記は、この遊園地の人気が非常に高い、勤労者たちや青少年学生がこの１年間に80余万名もやって来て、憩いのひとときを過ごしたのは喜ばしいことだ、ここへはわが国を訪問する外国人も大勢来ていることだろうとし、一幹部に、ここへ来るのは平壌市民の方が多いのか、それとも地方の人たちの方が多いのかと聞いた。

彼は、平壌市民は言うに及ばず、地方の人たちも大勢やってくる、地方の人たちの中には、ここへ一度来てみたくてわざわざ上京する人も相当多く、大マスゲームと芸術公演『アリラン』の観覧で上京する人たちも、公演の観覧後、夜がかなり更けていても

この遊園地に来ようとしている、ある日、80歳の老母が息子に背負われて来たことがあるが、老母は素晴しい遊園地をこの目で見たので、もう死んでも悔いがないと言った例もある、と答えた。

総書記は、人民がそんなに喜んでいるならたいそう結構なことだとして満足した。

総書記は、次へ向かうコースの途上でも、われわれは朝鮮人民に、世に羨むことのない幸せな生活を満喫させるためにもっともっと励まなければならない、わが党が大きな資金を投じて凱旋青年公園遊園地を建設したからには、遊園地の管理運営を手落ちなく行い、人民が遊園地にしょっちゅうやって来て、いささかの不便もなく、楽しく憩えるようにしなければならないとし、遊園地をあとにする時、幹部たちに今一度強調した。

「人民により幸せな生活をと念じる党の意図がいかに実現するかは、人民の忠僕である幹部たちがどれほど頑張って働くかに全的にかかっています。凱旋青年公園遊園地の管理運営を担当したすべての単位の幹部たちは、『人民に奉仕する！』という党のスローガンを肝に銘じ、職務によりよく励み、ここから人民の幸せな笑い声がいつまでも大きく響き渡るようにしなければなりません」

印刷＝朝鮮民主主義人民共和国
ㄱ－6835028

E-mail：flph@star-co.net.kp
http：//www.naenara.com.kp





ISBN 978-9946-0-1383-1

朝鮮・平壌

チュチェ105（2016）